

川柳塔

平成十一年二月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷八七三号



日川協加盟

No. 873

二月号

全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を昨年につづいて開催します。全日本川柳大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の權威ある三大自然行事ですので、こぞつてご参加ください。

課題と選者（各題2句・連記）

- 〔乾杯〕 塩見 一釜 酒井 路也 共選
 〔化粧〕 佐藤 美文 杉森 節子 共選
 〔そろそろ〕 藤澤 岳豊 小林由多香 共選
 〔切符〕 大木 俊秀 田中 正坊 共選
 〔未〕 塩見 草映 外山あきら 共選
 第二次選者 仲川たけし 磯野いさむ 大野 風柳 竹本 瓢太郎 吉岡 龍城

参加費

2000円（投句料・『平成柳多留』第6集代）

賞

平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・（社）日本青少年育成協会会長賞・（社）全日本川柳協会会長賞・全日本川柳誌上大会賞

締切

平成12年3月10日（金）

発表・表彰

平成12年6月・第24回全日本川柳東京大会

参加方法

所定用紙に各題2句と雑詠1句を書き、参加費と共に左記へ（用紙は請求ください）送ります。

〒530-0041

大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話・FAX (06) 6352-2210

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL・FAX (06) 6372-1178

ああわが友

橘高 薫風

湖北長浜に近い高月町の渡岸寺は雪雲の下に静まり返っていた。暖冬の今年はお寒を過ぎて伊吹山にも冠雪なく、雪溪のように白い亀裂が一筋走るばかりだ。畏友寺尾俊平さんは、まさかっと思の第三雑詠の選評（昭和61年9月号）に次のように書いています。

この夏、渡岸寺の観音さまを拝みに行くつもりでいる。薫風さんと私はこの観音さまに魅入られて長い。数珠を持つ旅も楽しいものである。

ほうほうと笑うて芒野に消える 俊平

これは俊平さんが渡岸寺の国宝十一面観音像の写真に魅せられてのこと、ご本体は無論のこと、裏仏の暴悪大笑面に異常な関心を示していた。

私は十年來約束を果たせずにいた仏様に、今日会いに来たのである。

大和法華寺の十一面観音に似た貞観時代の特徴を持つ仏は、金箔の剥けた風情に森厳を極め且つ優美であらせられる。私は冥福を祈るだけでなく、慙愧の思いで瞑目を続けた。

私は今年の年賀状に次のように書いた。寂しい新春です。

満目百里 雪白く

広袤山河 風あれて

枯木に宿る 鳥もなく

ただ上弦の 月蒼し

これはまだ私の小学生の頃、母が眠る前に歌ってくれと言って、しばしば口ずさんだ歌です。と。

この歌は昭和11年頃からの軍歌で、題は「ああわが戦友」、当時の満洲で関東軍の演習時兵隊が常に歌ったものと聞く。死なば共にと 日頃から（三番）

思いし事も 夢なれや

君は護国の 鬼となり

われは銃火に まだ死なず

俊平さんはかねがね私に、お互い年を取ったのだから折りを見て伯夷・叔齊になろうよ、と言っていたが、昭和が平成に変わる頃から体調を極度に崩し、明子夫

人と交代に入退院を繰り返していた。

第三雑詠の選評にもしばしば「諸君、健闘を祈る。がんばれ」と書く。彼はそう言うて自分を鼓舞していたのだ。昨秋

「お前がぐずぐずするのなら、冬二と一緒にグッドバイだ」とせかせかせ逝ってしまった。明子夫人より後に残ることを一番怖れていたのが、彼の死を自殺と思う。

慈悲深い菩薩のかんばせも暴悪大笑面もこの世のこと、彼の「新世界より」の便りはまだ来ない。

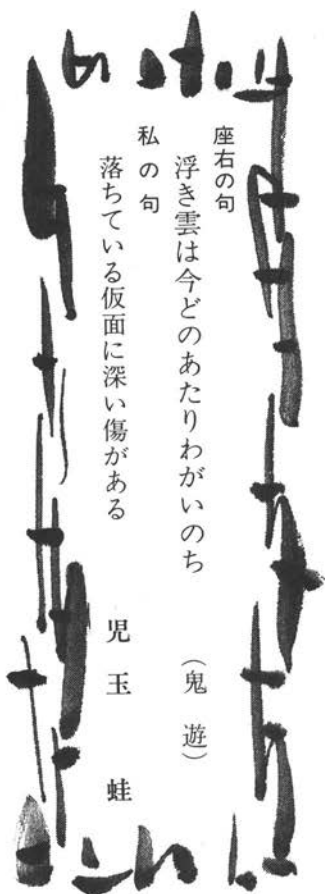
その夜低気圧が通過し豊中にも八つ手の葉に雪がつもる。伊吹山も白い神の座の偉容を輝かしていることだろう。

翌日、新春コンサートあり、朝比奈隆指揮のベートーベンピアノ協奏曲「皇帝」を聞く。ピアノは伊藤恵、大阪フィルハーモニー交響楽団の演奏である。

昭和50年秋、俊平さんとウィーン・シンフォニカを聞いた。同じ曲「皇帝」である。その夜、両陛下が親善の旅に発たれたことまで思い出し、生きるありがたさと寂しさをかみしめたのである。

ああわが友ぬくもりを皆持ち去りて

薫風



座右の句

浮き雲は今どのあたりわがいのち

(鬼遊)

私の句

落ちてゐる仮面に深い傷がある

児玉蛙

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ああわが友

孫の結婚

川柳塔(同人吟)

この句 この人

自選集

大空のころろ

(109)

川柳の群像 工藤安亭

誹風柳多留二四篇研究

14

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟

愛染帖

橘高薫風 (1)

東野大八 (2)

橘高薫風選 (4)

橘高薫風 (51)

橘高薫風 (52)

橘高薫風 (57)

東野大八 (58)

河内天笑選 (64)

桑原道夫 (62)

岩崎みさ江 (91)

波多野五楽庵選 (88)

孫の結婚

東野大八



平成11年12月4日、風穏やかな好天の陽ざしあたたかな名古屋市の南山大学構内の教会で、私の孫の雅代が晴れの結婚式を挙げた。

天井の高い広大な礼拝堂で、舞台正面の高い祭壇には、キリストの神像が、高々と灯を掲げた六本の燭灯に映え荘厳そのものだ。

燕尾服姿の婿殿は、顔半分を黒々としたヒゲ面だが、名を横関浩という一級建築士の肩書だそう。それに寄り添う新婦は、純白のドレス姿で、細い面腕は長い手袋で、髪から背にかけ長々と薄い被衣の裾を床の上にまで曳いていて、日頃見馴れたマーちゃんの愛称の彼女は、全く別人のように高雅な美女さながらにてり輝いている。

広い堂内に木魂する奏楽に、花嫁の父となつた中老の式服の黒い腕に片手をかけた純白の新婦は、しずしずと真紅のカーペットの上をゆつたりと歩む。輝かしい晴れの日を迎えたその歓喜の双眸に、立ちすくむ私は思わず熱いものが胸底をつき上げてくるのになまらず、思わず涙をポトポトと滴らせた。

茴香の花

「梅」

一路集「つまり」

「頂く」

初歩教室「流れる」

一月本社句会

エッセー 長崎は今日も晴れだった

各地柳壇（佳句地十選／藤解静風）

8ミリ映画と白溪子さん

北山悟郎さんを偲んで

柳界展望

二月各地句会案内

■編集後記

宮西弥生選……(92)

鴨谷瑠美子選……(94)

森茂美選……(94)

高橋岳水選……(95)

吐田公一……(96)

黒川紫香……(102)

黒川紫香……(103)

黒川紫香……(118)

玉置重人……(119)

玉置重人……(120)

玉置重人……(122)

みつ子・希久子……(124)

みつ子・希久子……(124)

座右の句

寝転んでうまい話を持っている

(狸村)

私の句

吊橋を渡った順に出る笑い

加藤基

映画やテレビ等でおなじみの牧師の言葉や

新郎新婦の誓いの言葉などに、ウェディング

リングの受け渡し的一幕など、式典はたつた

の二十分で終了した。金屏風を背にした和風の

式典に較べるとアツという間の一瞬だった。

「お世辞たらたら、間延びた仲人口の紹介

やお式辞もなく、男女一対の立会人が黙然

と介添したままの教会結婚式って簡略でいい

ね、これからはこれに限る」

とは、横関家・古藤家の結婚披露宴会場とも

なった八勝館御幸の間の会食の席で、私は居

合やす人々に向かってそう率直な意見を述べた

ことである。新婦の弟や妹の、結婚適齢期

を二人も抱えているだけに、まことに実感こ

もる率直なその感懐でもあったわけだ。

思えば私たち夫婦の婚姻は、赤紙一枚のご

く単純な動機に由来している。晴れの結婚式

場からその足で、新婦親子二人っきりの見送

りを受け、長い北京駅のホームを独り歩き続

けた僕だ。行手に待つはただ地獄の戦場ある

のみ、果して生きて再会できるかどうか、素

然たるその心中は今もって万感無量だ。

見送りに行つて涙、なみたの私を、貴方は一

度も振り返って見てくれなかった、そのぐり

言をその50年後の今もきかされる僕だが、ぶ

ざまな隻手の傷兵も明けて今年で87だ。げに

怖るべきは歳月だが、まさにその終幕を飾つ

てくれたのが今回の孫の結婚式だった訳だ。



橘 高 薫 風 選

倉敷市 小野克枝

春の絵が合わせ鏡の中で揺れ
綿雲のひとつが残る古日記
逆境を火中の栗として耐える
笑っても泣いてもダイや似合う女
螢火も野火もいつかは消える闇
人生を石やき芋の石になる

堺市 桑原道夫

銃声を待ち焦がれてる立ち枯れや
お茶漬けの中の風を見届ける
むなしさを突つく金魚のおちよば口
浜辺にて愛しき人の土踏まず
千切れんとして吹かれてる旗があり
トランクに必死で詰める鳥の羽根

竹原市 小島蘭幸

龍の尻尾を掴んだような気もするが
旅の母から少女のような電話来る

寝言の妻を可愛いと思う眠る

柚子をいただいて柚子風呂にひとり

まだ誰も帰っていない門灯よ

蟹食べている大山は美しい

富田林市 藤田泰子

独り居の隙間に据える君子蘭

思慕捨てる夜間飛行の窓の外

右へ右へと男の舵は戦好き

贅沢な昼寝シヨパン聞きながら

倒れそうになつたら私の出番です

酒煙草のんで仲間にしてもらう

八尾市 高杉千歩

歳豆を数える八十を越す

百歳も夢ではないぞバースデー

二ヶ月の美学よ揺らぐ絵蠟燭

とんでもないことを考え零時すぎ

パソコンへ助走路が長すぎて

おたやんのような美人が見つからぬ

松原市

玉置重人

ハナハトマメマス昔は古きよき時代
迷子札みたいの名刺持ってます

花に水妻にも何か捧げねば

好きに生き好きに死ねたら涅槃だな

朝市の蕪が赤い宿の下駄

数ばかり恃んで墓穴掘っている

神戸市

小林一夫

壁にもたれて壁あることを喜びぬ

君は遠くて近景遠景曼珠沙華

錠剤の数字ちいさき昼霞

銀杏光りて第五病棟前広場

オルガンの音透きとおる冬冬冬

約束が流されてゆく冬の川

米子市

澤田千春

仏像を彫って仏になった人

水槽で鯛がにんまり笑ったよ

飴なめた顔はだあれも憎めない

天の広場で父もジョギングしてるだろ

ダンボールごっこ遊びをふくらます

息詰めて鱗いっきにとりのぞく

米子市

政岡日枝子

いつものように飴で喧嘩をやめさせる

飴も母も段々固くなる冬場

古希すぎたから茶番劇許せない

恋人を泣かせた道に来てしまふ

恋人が帰っていった各駅停車

年が明けたら一度寺詣りをしよう

鳥取市

石上悦子

母さんはゴリラとゴジラごっちゃやませ

保険屋さん何回来ても無駄ですよ

好きなのは待つ時間だという土筆

赤子ならこの場はワッと泣けるのに

モノクロの写真しかない泣きばくろ

悪夢ならリセットボタン押せばいい

米子市

驚見正子

片方の乳房に冬の日本海

外孫は父内孫は母に似る

ポストから老母の囁く声がする

寝て疲れ起きて疲れる冬の旅

金持ちの人ほど金を慈しむ

子を産まぬ娘が家を買うと言う

富田林市

片岡智恵子

混沌の世に諦めの上手下手

想い出を掻き消す冬の能登荒れる

真逆さまに落ちる爪から見える意地

毛糸針動いて母の小さくなる

煮こごりの角からとけてくる無口

言いきった後の重たい挫折感

和歌山市 川上大輪

本日快晴告別式がある
焼香の列で涙が出て来ない
夕焼けに溶けてみるのも久しぶり
長いこと口笛吹いた事がない
真剣にうんこの話聞いている
ありがとうやっぱり僕の負けだった

和歌山市 川上富湖

細長い切符と旅をしています
いじわるな坂でだんだんきつくなる
両方を削れば鉛筆も凶器
調律が少し狂ってます心
外気よりあったか冬の冷蔵庫
人脈を掴んで蔓薔薇が伸びる

東大阪市 森下愛論

あいまいな笑いの羅漢何を見て
酔うほどにバカげた顔が並んでる
酒チビりまだ安全圏の内であり
弥陀の手の上で盃受けないな
首枷が取れて飲もうよ鬼ほとけ
盃を重ねる度に過去埋まる

枚方市 前たもつ

父親の威厳を嘆く鬼瓦
サッカ―の鬼たてがみ染めている
捕まれば気の弱そうな鬼である

厚底の靴に鬼道あけている
妻逝って後追う鬼に角がない
楽天和頑固の鬼で五十年

三田市 北野哲男

負け犬で結構 私家族です
聞き流す小言は正座早く済む
永生きをさすと虐待する如く
大丈夫悪人正機説がある
地獄極楽まん中辺にある我が家
一合で二人蕩けて猫も邪魔

大阪市 清水絹子

雨つづき独りで食べる残り物
残さぬときめても浮ぶ孫の顔
捨てるのに又ひろげてる残りぎれ
二人して登ればなんだこんな坂
寡婦同士あしたはあした京めぐり
日向ばこ少しもすこし周五郎

西宮市 門谷たず子

陽が昇る赤穂の海の今むかし
桜咲く春の子約もして帰る
異国から帰る子待つ煮ころがし
愛も憎も臍おぼろに月の暈
倅せのまん中へんの水たまり
まあまあの暮しが見える万華鏡

西宮市 亀岡哲子

草紅葉真つ赤更地はまだ売れぬ

杖拾うその手助けを喜ばれ

裸婦像の胸天へ張り若かりし

お散歩の白い神馬と出逢う森

瓦礫の下で今もアラーム鳴り続け

野鳩ほろほろ白の一羽の孤独なり

西宮市 山本義子

貧乏神掃除機の中押しこめる

ご免なさい教会のぞく気まぐれを

法螺ばなしたまにはいい空高し

流れ星よ地球はとも荒れてます

すこし眺め鰯のあたま丸かじり

友達に借金せぬと決めている

伊丹市 山崎君子

お酒屋さん初孫見せて御用きく

紅葉に招かれ出あうまねきあげ

路地深く匂い残して焼きいもや

北国なまりほり深い顔旅のつれ

わたし雨やさしい雨よワサビ畑

連風に願いをこめる龍の文字

松山市 宮尾みのり

全力を出す不器用の息が切れ

納得もするがうっとうしい理屈

銘柄の自信なるほど冷ご飯

せつなくて娘の白髪見ていたり

外観のよさは手抜きと覚らせず

客用の茶碗息子の家で食べ

大和郡山市 坊農柳弘

素晴らしい樹氷仕掛けた森の精

窓際でしんみり義理チョコ舐めている

美人よりべっぴんがええ福娘

寒椿 春誘い出す紅の彩

花手桶春の走りの寒ぼたん

成人式連休好きの国の策

羽曳野市 三好専平

ブランコにのって宇宙のはてを見る

悪人になれず善人にもなれず

三面鏡使ったことがないワイフ

古本のにおいが消えた古本屋

二上が枯れて怨念丸くなり

ひたすらにお札を刷っている政府

倉吉市 野口節子

憎まれるほどの力は持っていない

歪でも自作でとれたサクランボ

惚けた惚けぬと判定つかぬ老い二人

サングラス近場の良さを見失う

墓地作るまで待つてくださいい闇魔様

持ち駒を抱いてゆとりの懷手

鳥取市 徳田ひろこ

カーテンの彩も変つて去年今年
七彩の風船チャンスくれますか
茶筌から拵がつてゆく小宇宙
晩学に爪先立つて雪の中
頰杖を窓に喋つた過去未来
お互いに茶渋まみれでいる齡

鳥取市 岸本宏章

定年の港も高い波が寄せ
どう咲いてみても寂しい秋の花
世話好きへ金の相談だけがない
下戸という終身刑が重すぎる
赤字国債僕も連帯保証人
捨ててきた故郷へ舵が向いてくる

鳥取市 倉益一瑤

焚火してひとりで暖をとっている
なあ影よわたしは泣いているのです
血の絆ときどきめんどくさくなり
神様がブレーキ踏んだ曲がり角
みそ汁の香りにもらうエネルギー
長い爪して赤ちゃんを抱かないで

竹原市 森井菁居

毒茸の目立つ衣装に騙される
望郷の歌アメリカの短歌集
無垢になれなれよとボンボン船がゆく

徒党組むカラスが或る日恐くなる

その昔スナメリが居た海濁る
人工の入江が何故か他人めく

倉吉市 最上和枝

妻と言う舵が男の背にある

激論の海に舵取る名司会

七癖の一つわたし爪を噛む

包みから転がつて出る不相応

茶の湯気に試行錯誤が揺れている

補聴器を外してわかる温い声

鳥取県 林露杖

薄雲のヴェール大山冠雪す

木洩れ日の嵩む落葉に沈み坐す

貧老に退屈する日更に無く

時々笑い袋の紐を解く

新世紀無心の老いを享受せむ

可も不可もなべて明けぬる二千年

鳥取県 岩崎みさ江

ツノ有れば男もツノで闘うか

戦好きDNAのせいかなあ

そう言えば甲冑着けていた埴輪

戦する異なる神を戴いて

神仏を同居させても喧嘩せず

戦無い世紀へ夢の橋をかけ

鳥取県 権代康女

知らぬ者同士の旅のおつきあい
天気よし煙高らか桜島

機げんよく西郷さんと初対面

ワシントンヤシの高さに空仰ぐ

武家屋敷主の面影しのびいる

退院日花の香りもさわやかに

青森県 西谷大吾

ジクジクと奥歯が痛む年の暮れ

新しいページに白い鳩を描く

肩寄せて明日へ生きる福寿草

この先はレールが切れて走れません

ラーメンをすすって明日の策を練る

借金で回らぬ首にサロンパス

大阪府 米澤俣子

豊かさに溺れご恩を忘れてる

機器は最新 医者いまいちと言う噂

何かいいこと見たかとおんぴが笛を吹く

両手首数珠巻く茶髪何念ず

おくびにも出さぬ芸大看板屋

快い汗出しつくすボランテИА

大阪府 田中節子

身に沁むや女人高野に紅葉降る

死語になる鬼の居ぬ間の洗濯よ

骨肉の包囲の遺産鬼ばかり

格言を読み生かさず暦果て

窓際も通過した上リストラに

園児にも好みのタイプ バレンタイン

岡山県 富坂志重

惚けのきた影と喜劇をつづけてる

ペン先が今日も割れてる淋しい日

一夏のつかれをいやす山のいろ

針持てば昔の勤がさえて来る

悪口に笑顔返してガラス越し

ていねいに歩いて足を強くする

島根県 松本文子

スフィックスの瞳の中で眠りたい

ダンボールまさかの時に積んである

お茶を頂く魚の匂いする指で

こんな酒くらいで酔うたりはしない

この世の名残りのように落葉を掃いている

泥の舟これがわたしの運命だ

横浜市 菱田満秋

立ち読みのための書店の照明度

国籍を訊きたい茶髪鼻ピアス

正直に生きて時効を認めない

首かしげたのを患者は見逃さぬ

花好きが薔のうちに花を伐り

看てくれる人と七十手を繋ぎ

砂川市 大橋政良

一片の夢を拾って風になる
雑踏にまぎれ師走のメガネ拭く
道草をする地下街のいきい
汚れた手洗うにきれいきる水
厚い胸身の上話買ってやる

弘前市 一戸ツネ

まんだらに覗く世紀の昇り龍
まんだらに合縁奇縁おもしろい
シャンソンにまんだらの唄生き生きと
まんだらの空間に座す磨崖仏
春ですな曼陀羅絵図に菊匂う

弘前市 今愁女

成るように成るさと樂觀二〇〇〇年
世も末と言うなかれ明日陽が昇る
動物のそれぞれ足して龍生まれ
名シェフは土を管め芽を噛んでみる
冬の陽にバズルのように鉢移動

弘前市 中山雅城

イヤリング福耳からは嫌われる
ニーハオでタラップ降りるフルムーン
アンツーカー土の匂いが欲しくなる
ラブレター青いインクの匂いする
バンカーで無心に打ったチップイン

弘前市 相馬銀波

軒先の氷柱とやつと年を越す
約束を忘れぬために握手する
捨て石は重さ軽さを演技せず
バランスに拘泥る人事政治劇
誘惑は焼鳥でした休肝日

弘前市 蒔苗果林

笹舟で秋から春へ航(ゆ)きましよう
好きな事やってて楽し出来は次
もがり笛うまく奏く樹に凭れ居る
髪に降る雪咲く花と見る恋か
春の牛の瞳の奥光り吾が眸濡れ

弘前市 高瀬霜石

旧道にぼつぼつとある骸
見送ればボールだったと他人は言う
飼い主に似て番犬にならぬ犬
父さんも宇多田ヒカルは知ってるぞ
夕焼けをたらふく食べる観覧車

弘前市 櫻庭順風

祝叙勲 教え子の積む胡蝶蘭
タイムカプセル教師冥利に尽きている
夜中までエロスを放つ胡蝶蘭
その日から華やぐ一家胡蝶蘭
教え子は理博医博で教区長

弘前市 須郷井蛙

ワタクシでいいならバンクへ皆寄贈
お守りも絵馬も応援してたのに
妻と母ボクは中和のマヨネーズ
今の子は心の栄養不調症
外国の不潔を土産パスポート

弘前市 小寺花峯

怒る日も一日笑う日も一日
饒舌な男は軽い石になる
身の処し方を考えているブランコ
赤信号直立不動の顔並ぶ
青春を引きずり出した三次会

弘前市 福士慕情

悲しみの手紙まとめた落葉の火
海峡の風で磨いた頬被り
鶏も風邪声で鳴く雪の朝
悠久の神話零れるしばれ空
わたくしの遺影を探す笑顔から

弘前市 高橋岳水

人恋いの祈りで初春が始動する
試験管ペビーの好きな電子音
見返りの坂で喪失感を抱く
ボケに効く薬などなし備忘録
子に孫に転ぶ姿も見せておく

弘前市 岡本花匠

明日の縁良い展開へ米を研ぐ
妻正装しばらくぶりに神さびる
新風をこなせぬ試着に眉ひそめ
捨て石を読み切れなくて迷い駄馬
成る程と膝乗り出して聞く法話

十和田市 阿部進

掴まえて見れば現職警察官
ゆっくりと見て居られないバスツアー
すさんだ心いやしてくれる屋台酒
夕暮れ時揺れて居るのは風見鶏
女心めらめら燃える油紙

十和田市 小笠原敏人

鉢植えの冬の住処が定まらない
熱爛の抗菌作用を信じてる
熱爛が喉の悶えを溶かしてく
忘年会清濁併せ飲む修業
古傷を掠りながらの忘年会

黒石市 相馬一花

凍死するほどは飲めない不況風
梯子酒止めて病院巡りする
適量をはつきり言わぬ聴診器
自分より重い患者を目で探す
ママさんが眉を顰める下戸が来る

八戸市 島田昭治

忌明けにカステラまで付けてくる
いい人が早く死ぬとは昔から
余も老いかテレビなど見て涙する
もの忘れボケの始めかうろうろす
平成の忠臣蔵に手を叩き

仙台市 川村映輝

狭い日本に余っているのは田圃だけ
駐車した後へ空かん置土産
かき 鮑 帆立貝など届く暮れ
二千年迎え先ざき不安なり
二千年九十六の干支最後

大宮市 八田敏

病む妻へもみじ葉集め秋運ぶ
爺さんの惣菜何故か孫に受け
演歌だけ番組一致する夫婦
今日はどの医者へ行く日か手帳繰る
介護法期待一杯春を待つ

東京都 後藤早智

新旧が混って街が脱皮する
秋暮れる植物園にちぢみ蝶
落葉舞う風が身に沁む一葉忌
心字池巡って秋を独り占め
燃え盛る銀杏黄と天を仰ぎ見る

町田市 竹内紫鏡

女学校跡にも近く母ねむる
年忌あり亡母の短歌をワープロで
夏は夜明け冬は日和を万歩計
優先席の会話 兵舎の跡を指す
回覧を届けて褒めるアマチュア画

八王子市 播本充子

力負けさせない母の握り飯
札状を溜めないように書いている
豚汁が待ってる坂道のペダル
素っ気なくされても罪に気付かない
実直を選び女系が恙ない

千葉県 吉田笑女

三匹の犬に退院迎えられ
尾をふつとびつく犬をだきしめる
朝夕の犬の散歩もひと仕事
早朝から犬が起こしに来てくれる
四本の手足洗って夕ごはん

横浜市 清水潮華

冬越しの蚊と連れになる暖房車
目に合わぬ眼鏡に五感まで狂う
新聞を開くと猫が乗っている
木枯しを忘れていない指の荒れ
万病に効くと言うから躊躇する

余生などいわぬ好奇の虫でいる

横浜市 小野 句多留

鍵忘れ貴方を駅でお待ちする

石鹼の泡に女がこぼれ落ち

ローン済み家は半値の息をする

病窓に冬の日和の頼りなき

横浜市 山下 省子

今晚の手順を朝のティールーム

心までリフレッシュする衣替え

この指に誰も止らぬ吹雪く街

合鍵に私の心見られてる

脱線の妻を少しは放し飼ひ

横浜市 菊地 政勝

ゆっくりと飛んできましたコウノトリ

お互いが我慢強くて良い夫婦

初雪を顔で受けてははしやく妻

貧困に恐れるものは何もない

頑張れと言わずにそつと肩を押し

川崎市 和泉 あかり

里がえりどちらも幸せごっこする

エプロンをつけた娘に主婦を見る

対茶碗割れたら思いあたること

ふんぎりの悪い雫が胸にある

骨とって猫と夫へやる魚

近道を選び蹟く余命表

人生の折返し点白髪塚

それぞれに子等の抱いてる玉手箱

ブレーキを踏むこと多い老いの坂

朝茶飲む夫婦の絆縊りあわせ

富士宮市 渥美 弧秀

訃報しばしば師走の暮し侘しくて

ご近所の顔も揃ってバーベキュー

湯豆腐が富士の寒さを和らげる

六根清浄 富士のお山は茜色

柳友ら揃い雪見の吟行会

静岡県 蘭田 漠 杏

基地見学こいつが空を守るのか

すつと立ち何か企む爺の背

孫の絵は花にも猫が添えてある

あと一枚何事もなきカレンダー

金の要る予定ばかりのカレンダー

愛知県 早川 盛夫

禁煙の挙動不審を咎められ

恥ずかしいことに正座ができません

リストラへ忤んだ道だフライパン

長グツを穿くと言葉も粗くなり

誰にでも書いて書けない〇一字

富山市 舟渡杏花

なにもなかったよう 包丁のリズミカル

遠回りしてじれつたい自己弁護

冬園のベンチできくもがり笛

帰巢本能どこで落したホームレス

ゼニ勘定好きな頑固な鼻めがね

富山市 島 ひかる

木枯しと対話で春を待つ梢

ふる里が好き人が好き国訛り

山川を一緒に越えたペンダント

美しく老いる望みを失わず

胸さわぎ主人も同じ胸騒ぎ

富山市 酒井 輝

待っていたように札所で連れになる

遺伝子の核があなたを好きにする

子にクルマ貸すと自分で買ってくる

老いのオペこんな姿を恥とせず

忘れると決めた事だけよく憶え

富山県 増田 紗弓

ばあちゃんは達者と少し強がりも

トップへの夢で群舞のトーションズ

夢ふつと行方不明になる不安

燃えた炎を消そう消そうともみじ散る

外は雪喧嘩へチョンと柝が入る

奈良市 天正千梢

平穩に生きて四恩のありがたし

辻説法生きた言葉が伝わって

休耕地コスモス咲かし村おこし

稲刈り機ひびいてせわし散歩道

秋深し墨の香りに酔うている

奈良市 米田 恭昌

紙婚までもたぬ二人のすき間風

肥満体のキョンシー歩いているプール

凝視する子の目に竦むトランプ芸

本四橋橋脚だけの小さい島

新世紀見据え女鹿の輝く目(市女子薬会にて)

大和高田市 岸 本 豊平次

桃太郎もねんねんころりも出来ぬ母

妻よりは早く目が覚めパン食に

長生きはしたいが恐い気もしてる

ステレオで軍歌聞いている窓閉めて

竹馬を思い出させる靴がゆく

生駒市 故北 山 悟郎

襟正し過去振り返る十二月

幾度か浮沈を偲ぶ十二月

永らえて息切れしてる十二月

忍耐の汗輝いて陽のまぶし

地に足つけひたむきに前に向く

香芝市

大内朝子

和歌山市

牛尾緑良

ばかばかのゆず湯いたたく仕舞風呂
ごめんねの辺りでとけるわだかまり
さばさばと男らしいと誉められる
越せばまた山がまつてる苦労性
鎮魂へピュアな光よルミナリエ

京都市

都倉求芽

和歌山市

福本英子

豆撒きや鬼も遺伝子組み換える
道路工事ああ税金がダダダダ
金額だけで行先のない切符
掘りごたつ冷えたビールも熱燗も
一人で生きた迷惑かけぬそれが夢

京都市

小西未佐子

和歌山市

桜井千秀

悠然と一羽で飛ばう初春の空
拓本に取れぬ仏の歴史かな
南瓜には戻らぬ車に手を上げる
乗車券買う気遣いのないカード
紅葉燃ゆ常寂光寺吾が浄土

京都市

稲葉冬葉

和歌山市

垂井千寿子

政治家のご都合介護保険案
母と娘のいくさでしようか針供養
啓蟄は哀しい殺虫剤を撒く
秋を楽しむ菊の根を買ってくる
内ポケットは根っからの悪でない

舌を出す前にお口のエチケット
二〇〇〇年 神も仏もひとつ老け
怠けたくないのにリストラの知らせ
万馬券息子を買ってみようか
誰に会いますか手鏡持ち出して

年越えて残したくない傷を消す

二千年の消印欲しい賀状急ぐ

いい加減聞き厭きました事故 不倫

追伸でハガキの裏へ続く愚痴

斜めから写し御機嫌とっておく

こころの穴埋める笑顔を振り撒こう

小売りする知識はテレビから拾う

よく食べてよく寝てポケぬよう敬具

すらすらと婚家の姓で名乗る孫

富士山が見えなくなつて眠り込む(新幹線車中にて)

星掴みたい靴底を高くする

世紀末などと言わせぬ昇り龍

今一番の贅沢閑という余裕

本物の出世は一段ずつ登る

日の丸の底に溜めてる義理人情

和歌山市 玉置 当代

還暦の祝い戴く古都の庭
花もよし秋も風情の吉野山
落葉踏む吉野の山のまた山で
ひと休みのれんくぐった葛湯茶屋
街の灯がとても恋しくなって冬

和歌山市 楠見 章子

二千年迎える鶴を折っている
青い馬にまたがつていく二千年
鏡餅小さいながらうちの春
ストープの部屋で始まりだした孵化
道化師の影に背中を叩かれる

和歌山市 福井 桂香

目が乾くころ渴いてくる詩人
この壺を割れば小言が溢れ出る
携帯電話しつぽみたいにくら下げて
銀行も生きのびてるね寒雀
病にも勝って迎える二〇〇〇年

和歌山市 青枝 鉄治

政界を目指すつもりか腰低い
肩書きの多い会議で抄らず
魚拓にはなれぬ雑魚だが夢は持つ
匿名にするからペンははしやぎ出す
ロボットも休みとらせる不況風

和歌山市 榎原 公子

アイロンの折り目正しき朝の駅
黒髪が重たくなった冬日和
セクハラを言うて女を廃らせる
試されているのかお茶が苦すぎる
ペンを持つ手からぼちぼち脱いでゆく

和歌山市 堀畑 靖子

特筆をする技もなし冬ごもり
暖冬に浮かぬ顔した招き猫
勢いを削がれてしまふ冬の雨
二千年こそと意気込む肩パット
和も洋も詰めて私流おせち

和歌山市 古久保 和子

電飾の街に流れるニニロツソ
地下室は無いがいも穴なら有った
厚底の靴に踏まれている悪夢
大根の首のあたりへ試し切り
わたくしの耳に収集癖がある

和歌山市 山根 めぐみ

勝手呆けパフォーマン스가巧くなる
西高東低 午後から晴れてくる私
外反母趾 母に背いちゃいけません
芋掘りに野性の羽根をふくらませ
終章までのしい未知のひとり旅

和歌山市 池 永 正 嗣

海南市 三 宅 保 州

野の草に野道の幅を狭まれる
見事散るのに落葉とはかわいそう

流人悲話千年杉が知っている
(隠岐島など 5句)
風除けの港に旨い酒がある

関白とかかあ天下が同居する

土産買わず写真も撮らぬ二人づれ

石段でようやく知った年の数

絵葉書の位置に写真屋待ち構え

毒舌は自分のことを忘れてる

地図にない島知っている渡り鳥

和歌山市 山 口 三 千 子

海南市 谷 口 義 男

気を抜けば倒れるペダル踏んでいる

真実が刷り変えられて居る活字

女偏捨てて行きたい遍路笠

賀状来る筈の友から来た計報

渡り鳥北のドラマをくり返す

介護法出来て孝行せぬ世代

日の丸の裏に悲劇のドラマ秘め

外孫が髭剃る歳になっていた

進歩した化学も恐い世紀末

金婚式までは生きたい共白髪

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山県 中 後 清 史

忙中閑介護保険を読み返す

早春のはしり大売り出しの旗

一本のバラが噂をまき散らす

リストラの話聞いている紙コップ

大切にされすぎました弱かった

どうしても収まりません蟹の泡

モシモシの向こうに素顔の君がいる

誤解から握手をされてうろたえる

熊野三山会えない人に会えそう

ガス灯のよう不景気な街明かり

和歌山市 田 中 み ね

大阪市 杉 澤 汀

教育ママで無いのが救い娘がふたり

たわむれる蟹も棲めなくなった浜

お隣の柿いまが食べ頃だと思ふ

ネンネコに包まれ春を待つ蘇鉄

約束を平気で破るから凄

千両の朱実万両より高価

パーティーへ先ずは何着よ女です

会席の焼物なしでいくらです

骨壺も笑い転げる形見分け

一合は体に良いと二合飲む

大阪市 榊 本 落 児

赤と黄に空二分して富士の立つ

尾道は終日晴れて水澄めり

ウクレレを弾くや裸のキューピッド

灯台へつづく道には花が咲く

夢二の絵 心かよつておりまする

大阪市 西 出 楓 楽

正月が年々厭になつてくる

ヨレヨレに見えるがお金かけた服

ウォーキング長生きしたらどうしよう

願ひみなかなえばつまらないだろう

自然体自然体とてよく眠る

大阪市 川 久 保 睦 子

辻地藏女の痛み聞いている

言いすぎた一言冴えて眠れない

軽く言う老父の言葉にある温み

心から労う文に励まされ

淋しくて誰かの声を待っている

大阪市 稻 本 凡 子

独り居も師走の風に巻きこまれ

喜寿過ぎて儲け話は聞き流す

難聴でぬれぎぬにあうことばかり

粗大ゴミ私の全部捨てたい日

すっかり白髪染めたら私見失う

大阪市 川 原 章 久

賭け一石投じて試す春のくじ

外人がわかった顔で石の庭

播重のスキの看板見てるだけ

手を通す父の羽織も年一度

八百万神に祈つて孫入社

大阪市 本 間 満 津 子

賽銭箱よっしやよっしやと受けて置く

入れ歯の機嫌とりつつお餅もう一つ

見えぬゴールへ走り続ける生きる道

どうしてもせんならんことだけで暮れ

近づくピーポー一人の風呂で耳澄ます

大阪市 神 夏 磯 典 子

ときどきは油をさして小走り

信念を持つて走れば味方出来

留守電がもの足りなくて走る妻

催促に走りみじめになつてくる

ときどきは止つて位置を確かめる

大阪市 板 東 倫 子

数の子も蟹もあふれて何故不況

山姥が蛸焼食べてる戎橋

銀行はユダの味方をするところ

行間に注目介護の記事を読む

寒椿 邪恋 現在進行形

大阪市 渡部 さと美

倒産がつづいてこれがあの跡地

それとなく自慢聞かせに來たらしい

大雪へやつと安堵と豪雪地

ビデオレター家族届けてくれる嫁

血圧をふーんと鼻で聴いてくれ

大阪市 井上 白峰

無意識に真似をしていた父の癖

脇役に徹してドラマ盛りあげる

肩の荷を下ろした後の虚脱感

ここだけと言えば広がる話の輪

例えばの影に本音が見え隠れ

大阪市 河井 庸佑

立春へ故郷の野趣を懐かしむ

子に託す希望だんだん小さくなる

耳学問役に立つて話の輪

平行線どちらも曲げる意思はない

思うよう動けるひとり旅が好き

大阪市 玉置 英子

仙骨と腰の故障で知りました

釣銭は笑顔を添えて手渡され

ガラスの花ガラスはやはり脆かった

ほっとする明日暖かという予報

駅弁会今日も買うのはますのすし

大阪市 町田 達子

あれこれと洋画好きだった亡夫おmoi

マタハリをふつと致死量のあの美貌

愚かなり宗教に因る殺し合い

恐いニュースはいらないやがて二千年

二千年の初春を家族揃って祝う幸

大阪市 松尾 柳右子

くつろげばすぐ寝てしまふパパの酒

月一度くつろぎ貰う理容椅子

店番にランの成長飽かず見る

老舗とて不況にめげず新装し

店番は退屈しない作句する

大阪市 安達 はじめ

野辺に咲く梅は吹雪に耐えている

洋酒瓶一輪挿しに返り咲く

面影が浮かんで消える虹の橋

常識も世代違えば非常識

仕送りの苦勞を知ったバイト料

大阪市 川端 一步

六十で歳だと言つて叱られる

友の句はいつもはだかの美しさ

歳月は楽しおかめが好きになる

花屋さん増えて平和の証なり

てにをはのことは言うまい孫の文

大阪市 中田 あい子

二〇〇〇年どんな色してあけるやら

プライドが邪魔して今も娘です

介護法わからぬままに新世紀

気むつかしい舅が孫に百面相

ルミナリエ神戸がつげるクリスマス

大阪市 北 勝美

十二月反省しても遅すぎる

さりげなく米寿を越した龍の春

仕事趣味言うた昔の負け憎しみ

無表情と申ってた臉に光るもの

五人目の生れた曾孫見ないまま

大阪市 岡本 久峰

ひよどりのはばたき我を迎えけり

立ち小便がき大将に咎められ

ド根性忘れ税金あてにする

死に損ない生き様みせて菜っ葉服

いくばくの余命か年賀かきなぐる

大阪市 辻川 慶子

心配はどこさんもある言わぬだけ

この歳になっても祈る事多し

会釈されマスクの顔がわからない

夢追って鏡の中にいるわたし

本題に入るとおおよそ眠い椅子

大阪市 清水 利武

天の声裏を返せば欲の声

脱税の見本見せてる元税務

またしても甘い言葉に金を出す

北風に下戸も屋台に首を入れ

商魂は年が明けたら雛人形

大阪市 小林 周信

鬼の目にも人の世界は恐ろしい

階段を一つ登って視野変える

打たせ湯に肩凝り解す紅葉宿

水琴窟一滴落ちて冬の音

行く人の言葉少ない街師走

大阪市 鶴田 遠野

孫の顔出張予定に組み込まれ

左遷地へ手柄話は過去にして

流行が下火になってやっを買う

神だけを頼りきってる子の受験

ひとり旅手酌が友を探してる

大阪市 津守 柳伸

目覚しをセット初夢せわしない

二〇〇〇年心機一新大欠伸

郷に入り郷に従う事勿れ

気休めはよして大器晩成の六十路

霜の朝ガーデニングも小休止

大阪市 鈴木 トヨ子

べったんこ掛声まるく路地の餅
幸せ一パイ春風と行くフルムーン
母ひとり残して嫁ぐ祝い唄
老いの趣味鈍行なれど日々楽し
御利益と炎の釈迦堂大根炊き

大阪市 津村 志華子

押し車わたしの背なへ花の風
のほほんと明日へ余生重ねて
丹後路の舟屋の里へ亡夫も連れ
亡母を思い故郷も恋しいつるし柿
ことわざを孫に教える掘り炬燵

大阪市 川内 叭笑

ご懐妊皆商売に結び付け
無理に貸し無理に取り立て無茶を言う
系列を越えた合併骨抜きに
流れ星明日の晩まで待つとくれ
お世辞とは知りつ遂々頼ゆるむ

大阪市 寺井 東雲

逃げ馬に二枚の腰があるらしい
同期会年々の輪が小さくなり
見る方もバンジージャンプふるえてる
梅の木に鳥の来るのを待つカメラ
満腹に血を吸った蚊と寝ています

堺市 河内 月子

神経のほそい楽道家もいます
裕福と聞いていたけど荒れた庭
離婚していつちきれいになった女
電話口元気な母にはげまされ
暖冬の庭にりんごの小さい花

堺市 柿花 紀美女

一年が加速度つけて老い攻める
コンピューター苦手で鉛筆はなさない
昨日 今日 明日を思いて灯り消し
雑踏のひとりになって師走行く
ショーウインドー横目に急ぐ米売り場

堺市 神原 文

赤いばら咲いてもうじき母となる
枯れてなお翔べる我が身を愛おしむ
ユトリロの路地裏ぶらりふたり連れ
年だねと老いたかわせみ高笑い
夫の顔色どんな色年の暮れ

堺市 志田 千代

負け馬をなだめすかすは一苦勞
君の味一番というほめ言葉
奥様は二合の酒で鬼退治
父に似て母にも似てる唐茄子よ
生返事やっぱり聞き返してきたよ

点滴にふと夫の顔娘の顔が

堺市 黒田 真砂

賀状書く心算になった朝の冷え

成人の孫頼もしい肩の幅

ごみ袋暮しのわかるごみの嵩

老いて尚趣味を楽しむ日々早し

堺市 宮本 かりん

毛細管空に這わせて冬木立

ころころころ心と弾むボールペン

意志強く伝える太い大きな字

ケツトルも叫ぶ議論沸騰中

胸の中つきぬけ冬の風通る

高石市 浅野 房子

なにも無いが盆正月はやってくる

確執が解けると温い音がする

大切に使っています涙金

同病が温泉行きを決めてくる

風邪三日そろそろ飽きてきたふとん

貝塚市 池田 寿美子

生かされてほどの夢二千年

敏感に反応したいあすの貌

喜寿過ぎてドラマの中に置換える

一人往く落葉にこころ遊ばせる

旅立ちのドレスにハープしのばせる

三権の分立こと暴き合い

多数派の工作成れば後はちやら

どこもここも優勝しそうキャンブイン

遊ぶにはよろし住むには辛い雪

降って湧いた轍の列や一の午

和泉市 西岡 洛醉

蟹鍋にどっぷり浸る冬の宿

一桁の昭和都会に住み着いて

小春日の部屋を囲った老いの背な

北風に向かう男に職があり

雑学の男で凡夫抜けられず

泉佐野市 山本 蛙城

ひげもじやの顔になるほどグル流行る

老人を人柱に世のまつりごと

公園に子は居ずりストラマンの昼

間違い電話みな聞いてから違います

にゅつと佇つ托鉢今朝も地下通路

岸和田市 高須賀 金太

短日や二の矢つがえぬまま暮れる

憎いほど君のすらりと伸びた足

白黒の映画に色彩が見える

権力に刃向かう鉛筆は失る

スケッチをしよう春色鉛筆で

岸和田市 岩佐ダン吉

冬の空私は変えぬ色を持つ

星条旗ほんに世話やきなんだなあ

奥の手を出して寂しくなっている

四日が好きで夢まで熱っぽい

言い勝って包まれていたことを知る

岸和田市 原 さよ子

人間の欲の袋に底はない

格安の旅でもたのし湯があふれ

美人湯へばあちゃんばかり賑やかに

話しながら歩けば駅まで近かった

念入りの打診へ不安ふとよぎる

岸和田市 原 苑子

心強いケイタイが居て夜の道

気がかりは静かな時のうるさ型

竹竿に昨日の元氣かけてある

こま切れの脳みそ絞る趣味多忙

美しい笑顔の写真あったとて

岸和田市 井 齋 一 齋

ひとり旅天女気分露天風呂

蛍の光半分塾に残しとく

重税と文句言う程儲けたい

法よりも上司が裁く署の事件

熱爛で風邪を直すと今日も酒

岸和田市 井伊東吉

小さな袋になったサンタさん

孫話す大人ことばにハツとする

FAの行使迷わす不況風

馬拉ソンとラグビー受けてる冬茶の間

プロ意識力問われるサラリーマン

岸和田市 田 中文 時

空論を繰り返しては先送り

ウイスキーなみなみと注ぐ下戸の酌

妻と言うより保母と言う存在で

さなきだに不況二月のもがり笛

ルス電にして昼酒を呷っている

岸和田市 藪 野 けい子

ばあちゃんの絵手紙に書く絵のうまさ

岸和田のだんじりが出るロケーション

奥の手を出す氣を計る妻の顔

奥の手を残して使う時逃し

鉛筆で半生綴る放浪記

八尾市 吉 村 一 風

年寄りのくせに毎日寝坊する

廃線の噂知らない野菊たち

盛りたてる妻におそわる笑い方

やっぱりどこか穴があいてる嫁がせて

無理をして若いお医者さんに叱られる

八尾市 宮崎 シマ子

思うままの初春です命大切に
直角の角には真綿巻いておく
その後に種が落ちてたとは知らず
どっち見ても老老病傷だらけ
職人の仕事は明日へ残さない

八尾市 高橋 夕花

柘榴はぜ不安重なる世紀末
裸木がはにかみそうな月光よ
久しぶり硯ぬらしたお書初め
風花に百人一首透きとおる
余生まだ女の傘を大切に

八尾市 内海 幸生

浮かれてる訳でないのに二十年
雁の列去んでぽかんと月一つ
夢に來る亡妻は叱言へ笑うだけ
亡妻よりも上手い料理で味が無い
地獄絵の真ん中にいるギックリ腰

八尾市 宮西 弥生

すじ一本通すマドンナひとの母
沢山のウソ吐き出してかれて秋
一円を上手に使うのも師走
穴あいたハートにおうシクラメン
家中の明りを灯す探しもの

八尾市 村上 剛治

ライバルに隠した涙バネにする
満腹になると反省ふと忘れ
おしゃべりな風が内緒を聞きたがり
水仙の香り美人の佇まい
走りながら考えている年の暮れ

八尾市 村上 ミツ子

へそくりがそろそろ旅に出るという
伴走の妻の息切れ見えてしまう
自分と遊ぶとても気が合うから気楽
代筆のうれしい呼名聞いている
冬の扉の向こうに雪が降りつもる

八尾市 神原 まさと

着ぶかれて向かいの犬に吠えられる
日が落ちて寒さがどつと膝に來る
参観日ママも通うた幼稚園
御無沙汰はあなたの邪魔をしないため
我関せず焉とテレビを切る一歳

八尾市 生嶋 ますみ

指揮棒の魔法のような静と動
診察室移り香残し去る美人
脱ぎ捨てて土の香がする夫のシャツ
靴音に犬の親子が耳を立て
旅土産訛りふくんではいる土鈴

八尾市 長谷川 春 蘭

趣味に生き老人らしき昨日今日

六十年交友訃報のあつけなさ

年輪の千年杉に明日はある

的外れても心の傷は深かった

難聴に妻の言葉の荒くなり

藤井寺市 高 田 美代子

ジングルベルが不協和音となる不況

親展でキミが好きだと言ってくれ

病葉がはらり無心を装って

二〇〇〇年ひたすら前を見つめおり

赤い薔薇百本独りのパースデー

藤井寺市 中 島 志 洋

ラーメンの汁の中から竜の顔

マスコミに洗い出された艶ばなし

七人の敵を味方に変える酒

平凡な殺し文句に酔う女

目の前にある幸せに気が付かず

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

張りつめて歩き続けてくれた影

鬼ごっこ手の回らない樹があった

寒寒と身辺整理してゐる鬼

人妻にイエローカードついた恋

私の続きもやはりまた明日

藤井寺市 太 田 扶美代

露天風呂の中かながめる世間さま

美しい汗の結果が気にかかる

急いだら忘れてしまう自尊心

定年のバスから降りた影法師

冗談にするには愛が深すぎる

藤井寺市 楠 昭 子

だんだんと鏡も皺に馴染み出た

指輪のあと残る女で強く生き

母さんが座ればそこがあたたかい

もうだんご歌もだんごも売れ残り

手を貸せばきつと倒れるかも知れず

羽曳野市 吉 川 寿 美

陽が昇る足どり軽く古希の坂

間尺には合わない母の受け皿よ

削るだけ削ってわたし居なくなる

往く人か帰る人かな佇つホーム

幾つもの夢と溺死をした布団

羽曳野市 酒 井 一 壺

テレビ見て作ったおかず硬かった

携帯で晩のおかずを決めている

今朝おかず何だったのかもう忘れ

残された命を知らず金のこと

付きのない私にあった残り福

羽曳野市 福田満州

薬細工も昇り龍にと願ひ込め

ルミナリエ見たいが行けぬ膝頭

クリスマスも黒豆ごまめ 数の子で

マンネリのおかずにあきれてるお皿

主語抜いて話さんと思つても

羽曳野市 徳山みつこ

改札機私も通る狭き門

暖冬の漬け物大根だるそうな

ご懐妊まだそつとしてそつとして

一流の人だ自慢はまずしない

福は内亡母と甘酒飲んでる

羽曳野市 西村りつえ

カレンダー豪華さ競い夢をもり

一族も願ひは違ふ初詣で

二千年に耳そばだてる風見鶏

リヤカーで豆腐売つてる京の町

行く末はとばけあいつつ凭れあい

松原市 小池しげお

剥製に冬がとまって動かない

天高しさつきと同じあくびする

喜寿近し渾名のようになっている

鈴振つてときどき自分振り返る

望み通りに柿は落ちたに違いない

富田林市 松本今日子

立話思ひ出せないまま別れ

早く寝て夜中に本を読んでいる

ウフ：携帯電話不気味なり

ボケたふりしたげているの気づかない

居眠りをおこすパトカー授業中

河内長野市 加島由一

良妻で賢母蟹座はよく尽くす

母さんが笑う父さんには内緒

クラス会やたら名刺を配る人

少年へ母の三三七拍子

神様もライフブランを練り直す

河内長野市 井上喜酔

マンネリの時計へ嬉しい新世紀

やりすぎて敵のカプトを取り忘れ

陰にいて蓄のままでいる不運

本心を聞いてどうする酒を注ぎ

本堂を立派に見せる仁王の眼

河内長野市 植村喜代

古稀過ぎて孫と一から歳を取る

年重ね重ねて重き歳の数

説明の出来ない人が売っている

食べることつづいて秋の夜のテレビ

三食を毎日運んで喜ばず

吹田市 古川 喜美子

春を待つ春が過ぎれば秋をまつ

失意の日満ち足りた日も端の椅子

牙も義齒金棒重うなった鬼

うつむいてゐるのにげんこつ飛んでくる

落ちこぼれの風が一番よくあがる

吹田市 大谷 篤子

孫からか差し出し人のないハガキ

さりげなくする大切な人だから

わたくしとわたし折り合いつける術

地球儀を静かにまわす月と星

雨乞いは洗車をするときすぐ叶う

吹田市 山本 希久子

背伸びしていたもとの背丈に戻らねば

山茶花ハラハラ初心忘れておりました

少しずつ老いを認めて母無口

冬の絵はやさしみかん盛ってある

広場よりコンピニ少年の足が向く

吹田市 瀬戸 まさよ

歩きすぎ冷えた膝に冬至の湯

清朗な心に風邪も遠慮する

感動に沈黙のときはずむとき

高すぎる踵が流行るすぐ廃る

夕食の要らぬ一日の解放感

吹田市 石原 靖巳

老けたとは言われたくない派手を着る

残ってる筈と飲ん兵衛酔ってない

句読点ない自分史に悔いがある

キリストが度胆抜かれたルミナリエ

始まりに買い溜めありき二千年

吹田市 野下 之男

ミレニアム神に願ひも天こ盛り

神棚に宝くじまで置き忘れ

待ち人は来ずにライバル肩並べ

お月様知る筈がないこの孤独

厚底で世間を少し低く見る

東大阪市 指宿 千枝子

古くなった我が家に少し化粧して

これがまあ終の住み処とひとり言

奈良公園紅葉降るふる鹿の背へ

鹿センベイ私も食べてみたくなり

外出が続いて食事雑になり

東大阪市 谷口 義

黙ってる母にいつでも負けている

ぜいたくはしたことがない寒の月

あわててもあわてなくてもあわて者

日本語で言うたらわからないらしい

後篇で登場人物入れ替り

東大阪市 北村賢子

青春のドラマが憩うまなうらに
憎んだら顔もころも歪んじやう
憎らしい好きと知りつつ知らんぶり
わが人生子も孫も見たありがと
2000年災い招く鬼は外

東大阪市 安永春

力入れ試合する身になるテレビ
へちやむくれ笑顔美人で嫁に行く
あおられず舞い上がらずに紅葉散る
青い目の富士に歓声あげパチリ
天仰ぐ大樹に恵みもろてくる

大東市 児玉蛙

適切と言えぬ助言にのつてみる
妻の留守広い厨の隅で待つ
気まぐれにのつた話にしばらく
表札に見守られてる寡婦暮し
出かかった一言控え輪にとける

茨木市 藤井正雄

鬼門へは残りの豆をみんな撒く
行き先が余程嬉しい赤い靴
春の小川いじめなどないメダカたち
珠玉集心に味のつく夜長
横着とジंकス混ぜて剃らぬ髭

茨木市 井上森生

恭喜恭喜ベビー香港の孫娘
孫祝う瓶に生姜煮の黒卵
あの頃の顔で昔を語り合う
椎の実を噛んで昔の里の秋
去年今年こころを開くミレニアム

茨木市 堀良江

日曜日クレインの首の所在無げ
三日月に深々と空晴れわたる
木枯し一号 柿色づきをせかされる
もう少し木に置いておこ光る柿
いずもやのまむしは亡父へおみやげに

高槻市 傍島克治

太閤の湯殿まぶしき有馬の湯
古稀過ぎて少し歪になった夢
メモにない菓子買ってくる子の使い
わが身改めて妻子を戒める
わが家の与党妻が党主で子が党員

高槻市 井上照子

夕暮れに乙女の祈り聞くマンション
ワインレッドまだ許される靴の色
幼なじみ絶えぬ話で日が変わる
名門校地獄極楽くぐり抜け
つき合った一杯の酒温まる

守口市 結城君子

アラジンのランプ各戸に灯る夢

下界は難儀じやのうと亡兄の声

仏さま手作り山茶花にて候

朝日歌壇 田舎の暮し羨まし

影法師しつかりしてて体調が悪い

枚方市 寺川弘一

やみくもに掌からジャンプをしたがる子

同じ辞書違うページを読む親子

楽屋の隅のしかめっ面がピエロです

ロボットは壊れた時にだけ休む

一カ月迷ったあげく粗大ごみ

枚方市 栗林光夫

能面の手に表情が見えている

泥を食い泥を吐き着く古希の関

花を見て華が見えない目の曇り

今日何もしないと決めたころよさ

ト音記号はちいさなクリスマスツリー

枚方市 鈴木政子

朝もやのビルの屋上カモメ舞う

揺れる船 人種を越えて庇い合う

官庁街黒リス芝生で戯れる

境界なき芝生と家と乾し物と

滝口の青さ目に染むロープウエー

(カナタ紀行)
(ナイヤガラ滝)
(トロント市)
(ケベック)
(モンモランシーの滝)

枚方市 森本節子

緩慢なモノレールから観る紅葉

満月の夜に産卵するという珊瑚

追っても追っても虹の下ぐぐれない

おいくつと夢の中でも歳きかれ

右見ても左を見ても虚構の世

枚方市 海老池洋

原発へ続くと見せぬルミナリエ

色鉛筆 私の色が欠けている

鉛筆の芯 一本の筋通す

除けられた像にもあった除幕式

賀状一枚 細く続いている絆

枚方市 二宮山久

いっこうに上向き加減のない不況

ふる里の味覚ふるまう両隣

嫁がせた娘の転勤身を案じ

子育てもすんで夫婦の鍋料理

うまい酒害と知りつつまたも飲む

寝屋川市 森茜

巨大煙突 目隠しされて消えました

働き手のいびき豪快とも哀し

お豆さんことと乗りの良いリズム

火付け役して雌猫が逃げてくる

風景が止まる夕暮れの目の前

寝屋川市 高田博泉

割勘で吞める相手をよつてゐる
足跡にくつきり嘘が書いてある
同窓会妻には見せぬ男意氣
命令をしている犬に引きずられ
波風を治めてくれた世間体

寝屋川市 堀江光子

この方もおやそんな年老眼鏡
遠い日の祖母の優しい鼻眼鏡
点滴の沈黙に居る外は雪
心労をストレス等と軽く言う
生き抜いた世紀と共に逝つた君

寝屋川市 岸野あやめ

平凡でこれで満足孫九人
にんげんに生まれたことも賭けみたい
もうめんどくさいと辞書を枕にし
羽子板の重さ少女の手に余り
ああ言うた通りなさいと金のこと

寝屋川市 籠島恵子

いざ使い出すと携帯うつとし
器用不器用おんなじような指なのに
ストレスを甘くみていた太つ腹
向い風少し強めを好む足
人恋し植物園の十二月

寝屋川市 北岡波留吉

ひび割れがあつたかいなと金婚日
帆とエンジン巧みに使う父の舟
手をかざせば人の情けが見える村
素晴らしい友情が待つユーターン
愛込めて奇跡を祈る百度石

寝屋川市 富山ルイ子

スタンスの違い尊重して議論
大会のおさそい北から南から
始めてのバイト挨拶躰けられ
口数が少なく皆に頼られる
携帯の方が安いのだそう

寝屋川市 江口度

空席に憎まれ役として座る
人為ミスだけは科学も防げない
愛一途こだまの返る日を信じ
どうしても身内のスパイ防げない
善人の胸に手ぶらの小さな罪

寝屋川市 平松かすみ

ミスコンに出よう生まれ変わったら
セールの口は奥様連呼する
親知らずむずむずわたし困らせる
痛い歯があつていいねと言われたり
民生のアンテナ役も無事にすみ(十五年)

寝屋川市 柴 田 英壬子

二〇〇〇年をきぎむ点滅ツリーの灯

残高のメモなど憂いがないように

雅子さまの記者会見はありません

判りやすさにすっかりはまる手話ニュース

われ関せずポインセチアの赤燃える

寝屋川市 酒 井 勇太郎

四世代揃って祝う二〇〇〇年

勤め止めティッシュペーパー買っている

鍋奉行 主の威信取り戻す

痴漢はせぬがセクハラはしてるかも

怖いほど充実してる古希過ぎて

寝屋川市 坂 上 高 栄

能面の喜怒哀楽を秘めた恋

一枚岩唯ただ威圧されました

古座川より生えた一枚岩の景

秋晴の銀波まぶしい枯木灘

鳥賊すだれ魚網にまみれ老い二人

寝屋川市 太 田 とし子

冬眠の虫がむさぼる本がある

進学の娘を思い金おもい

空財布鈴の音だけ澄んでいる

点滴が忙しそうにおちている

日の丸の旗で迎えた二千年

豊中市 田 中 正 坊

生ジューズ作り我が家が始動する

目標は一〇〇冊読みに読みまくる

紅と白カニサボテンが花ざかり

OBのプレスがつどうカニの宿(ゲルメツァー)

岩を撃つ波音あらし香住浜

豊中市 安 藤 寿美子

お茶湯して今日は罰あてなはんや

街道をいゆきもとおり菜の花忌

植木屋もうちもつき合い三代目

石燈籠しぐれて景色深うなる

私にやさしい三夫婦孫五人

豊中市 湯 浅 馬 洗

豪放な龍に息呑む泉涌寺

わが余生龍頭蛇尾で終れない

風雪に耐えて彩ます龍のひげ

階を枕に臥龍故宮の庭

天安門空に昇るか龍の風

豊中市 吉 田 あずき

第九聴く今更感ずシラーの詩

カウントダウンしても残っている仕事

この蓋を開けたら乱がおこるかも

夢のない花から先に枯れてゆく

虹かかるきつと伴せ来てる街

豊中市 松岡 久留美

暗闇で光みつけた安堵感

何事も胸におさめた老母の知恵

離婚した妻へ未練がのこる日び

華やかな生涯終えて詫びずまい

出稼ぎのストレスいやす縄のれん

豊中市 滝北 博史

目を病んで犬のようです耳と鼻

リストラでフジバカマだけ狭い庭

たくましいマユバケオモト姉に似る

川柳の醍醐味を聴く文化の日

新世紀へ四百日だ寒椿

豊中市 井上 直次

如才ない医者に希望与えられ

お喋りに嘘のブレンドまた楽し

番茶でも妻がいれたら別の味

聞き上手他人の知識をブットイン

自画自賛自分の策に溺れてる

豊中市 岸田 知香子

晩秋の山里映える柿すだれ

七十の手習い賀状で総仕上げ

地下出れば方向音痴逆の道

老い姿変りようなく御機嫌さん

カレンダー仕残しつめて幕閉じる

箕面市 出口 セツ子

装飾と嘘をはずすと消えました

情け希薄変な宗教よく流行る

クリスマス雑踏で孤独深くなる

煩惱があるから楽し除夜の鐘

勝敗の土俵に牙が落ちている

箕面市 椎江 清芳

汗知らぬ稼ぎマルサがかぎつける

嫌なこと忘れなさいと酒を注ぐ

極限へ静かに耐える寒椿

慶弔の包みの中の浮き沈み

応待が下手でひたすらお辞儀する

箕面市 岩津 ようじ

天然の面だましいを見せる鮎

国会という良心の火消し壺

病院へ行くため生きているような

冬ひと日一本抜けた自前の歯

セールの生活かかる偽笑い

池田市 岡本 吉太郎

またこけた恥ずかしいやら痛いやら

革命と言う文明は人に死を

視界から彼女が消えて恋終る

泥かぶり現実知って夢終る

古傷が痛み互いになめ合って

池田市 栗田久子

雪だより大きなニュースない平和

流れ雲行方不明になったきり

鬼やらい去年の鬼がまた来てる

鍋は蟹しばし寡黙の人となる

梅だより抱いた仔猫に話しかけ

池田市 藤井計光

大和撫子四季ある国で磨かれる

キルギスは夏から冬へ名を残す

命乞い忘れ血を吸う冬の蚊よ

半世紀小鉢の鈴亡母思う

真如寺の紅葉シャワーに気を貰う

大阪府 榎山隆盛

堅くかたく束ねる母の観世経り

てっちりの味が恋しくなる風だ

養生訓守る人生味気なし

サラ金と商工ローンどう違う

洋画より低い鼻でも下手なキス

神戸市 中村ゆきを

われ怒る故に我在りとも思う

入歯人生ああカタ焼きを舐めながら

駅裏の二坪ほどのようはやり

避けられぬ道豁然と般若経

校則反対デイベートなどと吐かしおり

神戸市 山口美穂

おせち料理の本楽しんで見えています

天国から見えますか友よルミナリエ

昨日のこと昔のことも曖昧で

笑ってるからどんな話か気にかかる

日本の冬は楽しい鍋囲む

神戸市 木村貴代子

始業式あのドキドキは忘れない

枯れたのかいつもニコニコしてござる

ソロバンの合わぬ年金かけている

叱っても時代を生きる子の茶髪

紫外線毒といえども日向ぼこ

神戸市 池田善守

ダイヤモンドダストのように落葉舞う

料理する人の顔付き味に出る

妻の声今日は調子が良さそうだ

警察の上に警察いる時代

苦手とは試合の前に勝負つき

尼崎市 春城武庫坊

ちよつと頼馬でいつも重たい荷を担ぐ

ご配慮は無用年齢伏せておく

京都大阪しゃべり続けたおばあちゃん

外出に妻の子報がよくあたる

政治家の仕草も所詮紙芝居

尼崎市 春城年代

地下鉄の入口冬が真つ逆様
みかん風呂にするよと夫の声元氣
胸の底に死という文字の浮き沈み
出番なく古びてしまふイヤリング
気まぐれな季節に迷う衣桁かな

尼崎市 長浜澄子

たくましく女が生きる世紀末
白菜を漬け越年へ用意ドン
継ぎ接ぎの辞書だが妙に手離せぬ
巧妙な罫かもスイングするグラス
柵を断つとすつきりする夕陽

尼崎市 田辺鹿太

脇見せず歩く新世紀へ向けて
歳かなあムカつく事が多過ぎる
ひねくれているのか此の国が好きだ
その昔賀状をくれたのは質屋
キープした故人の酒をのむ暗さ

尼崎市 的場十四郎

子に任せ気軽に乗った老いの旅
赤とんぼ追えば古里道になる
なにかある妻が熱燗酌をする
言い合つて解けてだんまり夫婦部屋
警察の報告誤字で読みとれぬ

芦屋市 黒田能子

節分は姿かくしていたい鬼
チヨコレート食べてやさしい鬼となり
以下同文続きの中にいるわたし
バラよりも小菊の好きな仏さま
青い鳥わたしの胸で孵化させる

伊丹市 小熊江美

サービス料ぬけめなく取る請求書
駅の鳩やさしい人のそばに来る
せめて名を聞けば良かった逢えぬ人
名が売れて居るので見栄を張っている
車内にも叱りたい子が居て困る

西宮市 林はつ絵

生きてたかむずむずと出る本の虫
有無言えず小ギヤルの肩に乗る日本
同類を見つけて少しまるくなる
座ぶとんの厚さへ座り方がある
夢の中杖を忘れて飛び跳ねる

西宮市 西口いわゑ

歳月が愛憎までも白くする
誰とでもなごやかになる酒の瓶
木枯しへ石仏の目の定かなり
花道はないがわたしに二人の子
除夜の鐘ゆるり今年を脱いでゆく

西宮市 奥田みつ子

西宮市 菊池トミエ

嫁と歩く神戸また佳し紛雪舞う
大きな目くりくりケーキ頬張って

墓参りなどと優しく気を遣う

いい人を選んだ息子褒めておく

わが愚かさじつと見詰めている窓辺

西宮市 秋元てる

ハイテクの器具より温いナースの手（入院日記から）

寄書きを貰いあの声あの笑顔

姑入院いい嫁さんの出番です

次々に変わるベッドの人模様

急所衝く言葉で一本取って置く

西宮市 牧淵富喜子

日々変る木の息づかい冬近し

落葉に西窓の家近づきぬ

五分五分と子は冷静な事を言う

十二月八日の朝は霰だった

二階から時計のように降りてくる

西宮市 井上松煙

青雲を紅葉しても見つめてる

訳もなく鬼も修羅場を好むまい

あなただけ私の過去を話します

木枯しの手をポケットに長い列

クラス会やあと始まりまたとなる

いい話聞いて安堵の深く寝る

夢の中枯野にひとり迷ってる

競い合いソロバン弾く日もあった

回り道昔の夢を探しつつ

一期一会旅の情けもアルバムに

西宮市 長谷川 淳

億万を海の藻屑に富める国

初めからやり直しては新幹線

小世界蟻が踏まれて死んでいる

三億円夢でいいから当らぬか

コンピュータ―自業自得の二〇〇〇年

西宮市 緒方美津子

陰膳のもう十五歳鬼やんま

二人居で湯呑みばかり大きくなり

干し芋を出すと無口になる夫

日向ぼこ似合う夫を見てしまい

母のメモ時々詩が書かれてた

西宮市 刈田泰司

眼鏡拭きながら聞いているいい話

眼鏡外した顔を写した奴がいる

川柳のお陰明るく妻の守り

病院のベッドで座右の銘を撰る

病院のミスは有り得るそう思う

宝塚市 嵯峨根 保子

瀬戸わたるみな花嫁になれる身で

旅の絵にすいと露風の赤とんぼ

塵ひとつ残さぬ家へ犬を連れ

男同士のはなしに耳を立てている

さがし続けて森をみつけたコウノトリ

宝塚市 黒台 伊佐武

二月はや冬と春とのせめぎ合い

寒稽古石の畳に汗が飛ぶ

寒^{さむ}簾生簀の中で鬼の顔

髪白く芒も白し風もまた

見つとも無い恋々とした名誉欲

川西市 松本 ただし

軍艦マーチリズムまだ持つ脳の奥

妻の持つミサイルかわす空艇

年輪の程には伸びぬ庭の松

お開きの時間をそつと突く仲居

十二月八日を知らぬブーツの娘

加古川市 吐田 公一

失望と期待が交じる世紀末

働けば何とか食えるありがたさ

ひとり旅ロス満喫の孫娘

ミレニアム俺も教祖になれそうな

好きな娘へヤボ用作り会いにゆく

相生市 中塚 礎石

乳を飲む目が訴えている心

研ぎ汁を吸うた茄子の花が咲き

金魚鉢殺生を悔い小屋の隅

握り飯孫は小さな方を取る

古希の坂また一人逝く年賀状

姫路市 古川 奮水

風吹いて未練は山を越え消える

タレントの貌見せたがる店の壁

脚色が過ぎて真実裏になる

マリッジブルー成田に着いたペアルック

新聞の活字に距離をおいて読む

兵庫県 大谷 幸次郎

寒椿蓄ふくらみ雪を待つ

賽銭をまかぬ祈りが忘れられ

黄泉へ立つ友に気付かぬ擦れ違い

艶やかな花が気付かぬうしろ指

ヘイタイと一緒にススミ哭いた旗

鳥取市 岸本 孝子

老いの身の腹にやさしい大根炊く

大根の白さに負けているところ

留守番をたのまれ夫がはずんでる

欲張ってどれも未完のまま暮れる

好物をしぶしぶ残しダイエット

鳥取市 西村 黙光

盃が大きな声で僕叱る

追伸へ眠っておった正義感

一杯の酒が空気を入れ替える

ペン一揆地域文化へ火矢放つ

このままでいいのか風が温過ぎる

鳥取市 上田 宣子

返り花ポツリ言い訳するように

舵を握っていつも激突してしまふ

押し入力で息を殺している包み

どれほどのショック水平線は呑み

彩りもアップテンポに雪月花

鳥取市 岩原 喬水

老化した同窓会の酒余り

老妻はもてぬ歳だと妬きもせず

焼鳥は酔って吐く愚痴みんな聞き

老化した脳も穴場は忘れない

国宝にされても仏知らぬ顔

鳥取市 植田 一京

エンピツと仲良くなってきた机

思い出を美化して辿る癖があり

遠慮している間に風は向きを変え

よい景色見るまで走りつづけよう

子守唄やすらぐ古代からの声

鳥取市 近藤 佳子

上出来だ有給休暇案山子にも

幸せな鏡は愚痴を映さない

年の瀬が人百態にいそがせる

落着かぬ男へ七味とうがらし

終の日はのどかに花野行くように

鳥取市 両川 洋々

禪がゆるむと核が目を覚ます

夢碎く手形いちまい手に重い

世紀末地球の老化止めてくれ

セクハラを笑いとばして女傑です

これっきり悪魔よ話し掛けしないで

鳥取市 武田 帆雀

穴を出て奇奇妙妙の笛を吹く

青虫のように山葵を搾り出す

石鹼のニユーを差し出す妥協線

上品に走って女真っ盛り

勝負より碁盤と碁笥を自慢する

鳥取市 富山 檳榔樹

初夢は龍に跨り宇宙旅

過去追えば厚顔無恥で飾ってた

喜寿の足老いの街道闊歩する

進退を知っている術老いの道

老いてなお街道一の遣り手です

鳥取市 春木圭一郎

碁敵と初打ち心晴れてくる

布石ではリードなかなか勝ち切れぬ

ライバルと盤上忘我至福なり

ジゴ勝負思わずのぞくひぎの下

情実もべんちゃらもない碁の世界

鳥取市 福田登美

暮れかかる脳裏放電ばかりする

進んでる機器は私を寄せつけぬ

ひと呼吸すれば言葉の角がとれ

進めてる時計に何故か安堵する

口程に動かぬ老いも理想もつ

鳥取市 美田旋風

デュエットも女性リードで波に乗る

介護の世急に娘が欲しくなる

他国へはとても気前のいい日本

刺のないバラから声をかけられる

釣り橋を渡りときどき血を燃やす

鳥取市 前田一枝

不意の客俄に忙し台所

わら一本すがり助かるすじがある

何ぼにも人に話せぬ夢だった

喪のはがき年賀はがきとすれちがい

じわじわと母の年金ヒザせめる

鳥取市 坂田和歌子

褒めことば少し省略しておこう

温い手を郵便受けに当ててみる

しぶちんと言いたいけれどありがとう

効き目ない健康食品のローン

お家ではどんな色白衣の天使

鳥取市 杉本孝男

行けるうちゆこうとツアー誘われる

酒の味わかる医者だが辞めという

につこりと美女の暗示がまだ解けぬ

身に余る叙勲へ亡父の照れ笑い

手を貸すも突き放すのも親のエゴ

倉吉市 米田幸子

一豊の妻も普通のおんなです

私の胸に土足であがりこむ

野次られる位でひるむ妻じゃない

秘め事を語るに部屋が明る過ぎ

亡母の辞書ご生大事にとっておく

倉吉市 淡路ゆり子

生きざまを眉間に寄せて男の譜

ブランコに揺れて明日の倅せさぐる

冷蔵庫どっさり詰めて賞味切れ

バタバタと暮れる間に要注意

蓑虫も安全地帯確保する

倉吉市 山中 康子

暖冬の子報にすきをついた雪
賞仰ぐ私は宙に浮いている
胃に合やす精一杯の飯よそう
接点を見出すまでの意思さかん
寒かろう六人分の氣を配る

倉吉市 山本 玲子

目測がおかしくなった銀世界
グルメ旅たった一夜のお大臣
新旧が交差するとショートする
胃を切った分税金を還付され
あんみつ姫は大の男を手古摺らす

倉吉市 松本 よしえ

言にくい事は手紙に書いて出す
採算も取れぬ先祖からの山
針山に母が残した木綿糸
待ち針に守らせているテリトリ―
昇天のペットにお寺さんと呼ぶ

米子市 林 瑞枝

絵画展スペインの旅した気分
続編もおんなほど野に遊ぶ
幻は律気で枕もとに立つ
どんぐりも老いて元気な生き字引
熟年の登頂めざす汗を拭く

米子市 野坂 なみ

父さんを囲むレールの汽車ごっこ
リハビリに胡桃と遊ぶおじいさん
西郷どんも青く震える酸性雨
二〇〇海里の魚は殊に仲よしだ
埋み火がいたずら風を呼びとめる

米子市 門脇 晶子

耐えること教えてくれた母の膝
和を乱すカラスに足を洗わせる
竹とんぼ自慢の腕をみせる父
掃きよせた落葉に土があたたかい
子が巢立ちやがて私の振り出しに

米子市 木村 春枝

どこまでも虚像を追って日を送る
二〇〇〇年のぞみを托すおもちゃ箱
借景が効いて美人に写ってる
ボツボツ 鉄道員の本貸したまま帰らない
枕木はがっちりレール支え生き

米子市 青戸 田鶴

遠く住む子がやさしさを少しずつ
母の声聞きわけている赤ちゃんだ
うるわしきみ仏あまた西明寺(湖東三山)
友と来てもみじ 甘酒 金剛輪寺
鐘つけばお腹にひびく百済寺

米子市 白根ふみ

治療院こんな時間のすごし方

とき止まり人の情けをかみしめる

冬野菜洗うおんなの手が撓う

解禁までロシアの蟹を食べていた

甘酒に生姜 即席ものばかり

米子市 光井玲子

春そこに心ひたひた湧いてくる

組み立ててみよう我が家の未来像

とっておきの玩具母には古ミシン

ここからは父に手を貸す役目だな

時々言葉かけよう飾り棚

米子市 茂理高代

幸せの扉開くの重かった

苦しいが満天の星味方なり

幸せを呼ぶかの如く水引草

安らぎと輝きくれる芒の穂

過去未来考えながら柿をむく

米子市 木村富美子

雪が降る傷つきやすい北の窓

爪をかむじんと涙が湧いて来る

孫の爪切るのにとても気を遣う

じいちゃんが死んだ焚火はもうしない

突然の舵取りとても恐い海

米子市 神庭詩郎

約束を忘れ言訳考える

五百羅漢ばくに似たのが中にあり

意見聞くだけ結論は決めている

会葬の列で遺産の値踏みする

病院で生まれ病院で死ぬ世相

米子市 本吉宗光

非生産としよりばかり増える国

カラオケで忘年会とドラマばり

声枯れて東海林太郎は唄えない

吾が里にいつ降りてくる山の雪

三人の娘に遺すもの選ぶ

米子市 中井ゆき

晩秋の夕焼け火のよう水のよう

正月も来ぬのに花の春を待つ

ダルマにはなれず二本の足を出す

大好きな傘あの人にだけは貸す

最後にはありがとさんと言えよう

米子市 永井三津子

深呼吸 故郷の風に逢いたくて

引き算も足し算もない母の胸

ジャンケンポン姑が負けて茶を入れる

開発に消されビデオで生きる森

政治家も親も子供も皆勝手

鳥取県 奥谷彩子

この指止まれ母さんの指あかぎれに
草千里みどりに染まる影二つ
欠け茶碗間抜けな会話ちよつと盛り
冬の陽にホコホコわだかまりも融け
灯消ししみじみ夫の寢息聴く

鳥取県 山本正光

花回廊四季の大山背に入れる
香焚いて経読む刻に洗われる
親族の絆深めたお正月

酔うまでは敬語酔ったらだらしな
思い出の亡妻と旅した宿に寝る

鳥取県 土橋はるお

税金の要らぬ谷川水を飲む
淡白な夫婦げんかはするがよい
様々なことを考えている机
どうでもいい人に流れてゆくお金
孫の進路に一切口出しをしない

鳥取県 田村きみ子

コンタクト外しゆつくり食事する
スパイスを省略してる病み上がり
春に咲く花とりあえず蒔いて見た
共通の悩みで握手する少女
かす汁でも作っておこう雪バラリ

鳥取県 土橋睦子

ご正忌のおまいり今日も有漏の身で
寒椿肩叩かれて逢いに行く
格好よく決めた私の古稀の春
言い訳を並べて咳に噎せている
苦も楽もオーバーに書き日記閉ず

鳥取県 原みさを

ひとり芝居演じ自分史暮れなずむ
二十世紀重い時間が暮れてゆく
山頭火笠のうちから暮れてゆく
片減りの靴につめたい暮れの風
ゴム長で不況の風に耐えている

鳥取県 谷口次男

深海に別荘建てて暮らせたら
兵隊の言葉を真似るロボットだ
悪口は言うまいここは墓地である
毒味する勇氣はないが腹は減る
メダカ絶えいよいよ来たぞ世紀末

鳥取県 西原艶子

火になって走ろう余生あとわずかしあわせもほどほどいいこの辺り
姑背負う小さな姑の重いこと
若者の流行外れ過ぎている
今年まだ花になれそう夢を追う

鳥取県 吉田 孔美子

担任の風呂敷包み核に見え

レットイットビーを聞いている模試前だ

真夜中にちぎな煙にしてしまう

ログハウス大黒柱なぞはない

住所氏名年齢女みんな嘘

鳥取県 塔 寛子

二千年目やっぱりヒトのまもらしい

無心の笑顔老いの恐れを見ぬいてる(七ヶ月の孫と住む)

私一人へくれた笑顔を抱きしめる

二〇〇〇年を歩み始める孫の笑み

孫の嫁見たい余生を延ばそうか

鳥取県 村上 信子

年末に暇もてあます友が来る

足枷の重さに馴れて定年期

友達が捨てた男に口説かれる

来年の干支の強さに賭けてみる

どうみても本気で走る馬でない

鳥取県 上田 俊路

カムバック笑顔に皺が増えてから

ありったけご在位記念硬貨買っ

孫の声聞きたく送る柿を採る

献金は頂きません勝つまでは

年越しそば食えばいいよ二千年

鳥取県 津村 八重子

すばらしい吟声秋の山ゆする(吟行会)

山の娘の便りもみじの色もそえ

えとの辰景気回復祈られる

手話一つおぼえつぶらな目にふれる

ジョンガラ節が北の島から春告げる

鳥取県 西川 和子

確認をしあい物忘れを凌ぐ

静かだとそうと風呂を覗かれる

包み込んだボロをほじくりまわされる

すぐ首を振るから誤解されやすい

一ランク下げて気楽な余生かな

鳥取県 乾 喜与志

淡い世を想ってしまう独りごと

火を吐いた竜の熱弁など想う

仏縁に包んで有難く暮らし

慈しむ光で包みこむ白寿

お浄土を望んで淡い浮き世なり

鳥取県 さえき やえ

二千年迎える子らと松かざり(けんた・こんた 2句)

かなくぎ流はじめて書いた年賀状

波一度おさめ出方を考える

佐治谷ばなし子の瞳きらきら燃えている

冬の陽をあびておくてが芽を伸ばす

鳥取県 橋 本 多哥由

定退のたのしい旅に靴が鳴り
老いらくの恋に若さを保つて
本心を明かさず心豊かなり
恋人のために誤解を解いてやる
証明に頼り切つては損をする

鳥取県 乾 隆 風

うぐいすよ雑木林が待つて
ていねいに四足の竜で来る賀状
賀状からウフフと笑う竜の顔
面白い漫画や竜の天下り
雪が降る祝入宮が遠くなり

鳥取県 羽津川 公 乃

バリバリと仕事に欲しい力こぶ
アワダチ草その内国の花になる
茶三昧ガン予防から呆け封じ
超音波くねくね脂肪目に余る
GOT GPTに赤信号

鳥取県 黒 田 くに子

海峡が荒れて便りがとどかない
竹トンボ雲にさらわれ戻らない
雲つかむ公約でした嘘でした
嘘ついてそれから前へ進めない
それからは呼んでも戻らない

鳥取県 石 尾 かつ乃
いい汗を拭いてくつろぐティータイム
どのめわたしの目には青い鳥

あの人の視界の中に居る安堵
会えばまた気が晴れてくる友を待つ
存分にたのしんで来た二人旅

鳥取県 石 谷 美恵子

海の幸溢れる里が本籍地
知り過ぎて心の扉厚くなり
人間も猿も褒めるとはりきれる
玩具箱開けると過去の子が遊ぶ
投書箱から火柱が立っている

鳥取県 幸 家 単 車

気の合ったナース身の上話する
シナリオの通り驚く顔をする
人生の落ち目驚く程早い
寝た振りで嫌なナースを避けて居る
釘打って心の扉閉めて置く

鳥取県 國 森 武 子

おひねりが一つ混じって祠 春
茶菓子などいらぬ一人の茶を今日も
火の神を祭ったお札古い家
池渡るなれた手つきの棹さばき
つるし柿冬が来たたと話し合い

鳥取県 近藤春恵

孫曾孫抱く幸せに感謝する
雑草の意地ぐんぐんと野菜越え
木枯しに散った落葉の私語を聞く
人生の終り笑顔でしめくくる
最後まで意志貫いた土根性

松江市 川本 畔

哀しみを黙って掃いている広場
おはじきのように遊んで飲む薬
謝っておこう汚した貸衣装
お座敷の鯛の目玉に海がある
白魚は透けた心を見せている

松江市 浦辺 静江

片隅で美しく咲く菊の花
コスモスが優しい風に散り出した
夕焼けを背景にした枯すすき
可愛い子睨み付けても憎めない
待ったなし夫の早足追いつけぬ

松江市 佐野木 みえ

部屋ごとの時計気ままに動いてる
しみじみと最北の島想い出す
凡人がある日ある時旗を振る
二世帯の味は上手に妥協する
氷点になれば私も変わるかも

松江市 安食 友子

定めです避けて通れないおんぼろ
口蓋垂あたりに我慢虫がいる
慈しむ虫の姿を顕微鏡
ポリスマンの怒髪天を衝くニュース
病葉になりたくないよ命乞い

出雲市 竹治 ちかし

振り出しに戻って初心にはなれず
自由業週休二日もない自由
想い出を少し温めにして浸る
死を賛美して長生きをしています
天才は凡人よりも気がきかず

出雲市 石倉 芙佐子

男と女のドラマが続く雪の夜
きさらぎの振り向くことは許されぬ
人を突く刃言葉の先にある
ゲレンデの笑顔昔のままなれど
大きい方の葛籠を選ぶ男たち

出雲市 久谷 まこと

留守番が居る安心も気が付かぬ
耐えて来た手をかざしてる焚火の輪
年寄りのもったいないで片付かぬ
つけ足しの笑顔に温みもらわれぬ
幸せに慣れて入れない募金箱

出雲市 板垣夢醉

白墨を持つとゆうべの酔いも覚め

家計簿のあらしを夫知らぬふり

聞き上手おほめ上手にいいしゃべり

深海魚波が恐くて潜るのみ

冷蔵庫鯛でもあきる三日の夜

出雲市 小玉満江

貯金箱 銭に一言しゃべらせる

どん底で笑った人はきつと勝つ

忘れぐせ自慢のように言いふらす

考えを変えたらいい風吹いてきた

ゆうブラザ子供になった水しぶき

出雲市 吉岡きみえ

どこにでも不器用がいるうまが合い

近頃は無口になって人嫌い

軽率な笑いを恥じて口ふさぐ

炎つくすラストスパートすごいなあ

電池切れ池の鯉が浮かばない

出雲市 園山多賀子

感情の起伏宥めて桐一葉

五十音いろは順でも大差ない

自作自演生きる体操しています

生き甲斐を見付けた風がノックする

生きざまが同じ引け目に仲が良い

出雲市 富田蘭水

神等志^{カサデ}出の神事も無事に^サ出雲冬

思い出し安心してはまた忘れ

あと一步まん丸今日も暮れていく

フェリー砕き渦も制した大架橋

腹八ぶ余生のり切る術として

出雲市 小白金房子

一年の早さ賀状の墨をする

追加した酒が人生語り出す

ポーナスはないが生ませる牛の声

晩学へ新刊図書を買に行く

外灯も淡く旅立つ母の駅

出雲市 岸桂子

日めくりをめくる一つのさようなら

真心を詰めた器は崩れない

傷ついた流木がある朝の浜

一人来た海は心の画布となる

充たされるまま一日が暮れてゆく

島根県 堀江正朗

眠れぬ夜神話の山河点滅す

ひとことを褒めていただき頑張るぞ

盃と分らぬ今の世を論じ

人は人 耐えねばならぬ我が人生

戦盲の幸 歳いだいていただいて

二度童子 障子に穴の鍵やかさ
島根県 堀江芳子

呆けたなら呆けた心境書けるかな
ニトロ貼りかえて静かに目をつむり
足並みの揃わぬ時もああ夫婦
思うことすらすら出来ぬからよろし

島根県 森茂美

囀りが森をこぼれる秋日和
草もみじつけて愛猫帰る朝
厚底を履いてよちよち千鳥足
冬囲いして陋屋は雪を待つ
仕事着の塵を払えば除夜の鐘

島根県 伊藤寿美

整理した時覚えてた仕舞い場所
忘れ物忘れたままで十二月
わたしの影を積み忘れてた冬の駅
年に一度阿国お練りが続く街
石段を登れば続く神の道

岡山市 井上柳五郎

初春に見るものすべて光り映え
お元気のもととは聞けば吞むしぐさ
童顔の孫の夫が髭のばし
よく吠える犬は無駄とは思ってない
チテチテタラッパを真似て散歩道

折上げの格天井にした仏間
岡山県 小林妻子

遠からず縛につくのも無常観
本音など言えぬ見舞へ行ってくる
墨差しが割れたら大工さんになる
虚飾症どうせ竹光だと思ふ

岡山県 大石あすなろ

窓あけて風のアダムと戯れる
極彩色で女きれいに過去埋める
一か八か明日は俎上の鯉になる
おしゃれた余白に一首書いてある
ひたむきな亀が勝利の旗を振る

岡山県 矢内寿恵子

土に生き無禄の里で永らえる
脱ぎ捨てて今日一日の置き処
まだ老母の語録の中で生きつづけ
浅学の老母の手垢に重い辞書
重ね来た月日をはいでいく暦

岡山県 福原辰江

開拓地こんなに青い空がある
快活な動作うれしい孫といて
開拓の器自分の殻を脱ぎ
冷凍は嫌だと言えぬ魚たち
介護法まだ想像の枠にいる

入学へ快活な孫につい涙

岡山県 福原悦子

これだけの手塩他人に譲れない

小さな風の跡がある古日記

冬のバラ一つの思案つらぬいて

揺れている縁をつなぐ父の忌に

岡山県 山本玉恵

トンネルをいくつ抜ければ極楽か

捨てて来た想い心の底を這う

本当のバラ一輪をあの人に

マニキュアの指からこぼる物語

普段着の母が光っている安堵

岡山県 荻野 鮫虎狼

順番の無い結婚が慌てさせ

節分の鬼も言い訳して帰り

介護する父母長命の有難さ

昇天の辰に振り向く暇がない

奔流に乗れず華を愛す顔

広島市 森田 文

雷神も観音さまも窺を出る

もみじ狩り連れは絵ばかり描いている

誘われて来賓席にいる寒さ

ふるさとの川湧き水の香りする

クローンのように並んでいる雀

生き方の違いで松と杉育つ

竹原市 時広一路

一丁の豆腐が見せる四季の顔

折角と言う語を捨ててフリーター

鶴百羽ほどの願いでよさそうな

生きている証だ理髪店に行く

竹原市 古谷 節夫

出直しのチャンスを狙う二〇〇〇年

政治家の賞味期限が闇に生き

ライバルに見せてはならぬ薬包紙

修羅場越え穂先も丸くなった槍

糸電話妻のでっかい声がする

竹原市 三宅 不朽

どの顔も騙されそうな日向ぼこ

定住漂泊俺の目刺しが小さいぞ

鈴の鳴る抽斗軋むままでよい

泉ふくふく雪あたたかく肺に降る

幻の父現れる瀧の口

竹原市 岩本 笑子

冬の陽を集めて車椅子ゆるり

十五日賀状を出してから掃除

ふく餅をついて今年を締め直し

蝶結びいつ解いてもいいのんよ

祝箸朝から飲んで昼から飲んで

広島県 藤解静風

雁首を揃えて詫びる絵に飽きる

エゾに来てマリモの詩を聞きもらす（北海道旅行）

幸せになれるホクロも歳をとり

亡父に似た五百羅漢の顔さがす

月とすっぱん妻が月だと申します

宇部市 平田実男

癌告知から口数も食も減り

うしろ指 指されたところへ溜まるウツ

反抗期らしい時タイレギュラー

自己弁護ばかりリーダーにはなれぬ

酒も飲み煙草も喫っている白寿

美祿市 安平次弘道

聞き捨てにするには金がかかりすぎ

一日がほんとに長い休肝日

優先席あるから腹が立ってくる

図体はでかいが足らぬ基礎知識

言い訳をするから腕が上がらない

香川県 池内かおり

大波小波いっしょに跳んでくれますか

気が付かぬ振りする友のアデランス

五人部屋九十一の誕生日

九十一息子の自慢娘の自慢

あと一歩ああ遮断機が降りて来た

香川県 川崎ひかり

秋深くとなりは何もしない人

無色透明毒か薬か目をこらす

時として正解になる嘘もある

無に還る時まで回す万華鏡

愛失くし恐れるものはなにもない

香川県 山地マツエ

ネクタイをゆるめ本音と向い合う

明けて初春夫婦笑顔で屠蘇祝う

波風が立つ一言を耐えている

泣き顔は似合わないよと野の仏

取り残したみかんに冬日あたたかい

香川県 成重放任

変なことするな天気が変わるかも

待ちわびて吐息ばかりが相手する

にこやかに話しかけたが別の人

世の中を腹で笑っている布袋

駅弁に両手合せて老母の旅

香川県 神保坊太郎

二ごころなき腸を日に曝す

ここからが急行になる縄電車

躰きながら九十年の刑了えんとす

望郷の胸に祭りのさんざめき

薬屋は大和を自慢してかえり

松山市 丹下美津子

盃伏せて明日は大事な客が来る

玉子酒ゆつくり回る帰り道

異分子が一人サークルかき回す

舞の海わたしもファン数の中

若い娘に交じって今日は針供養

今治市 野村京子

善人の看板時にうら返す

ゆらゆらと迷いがあつてシャボン玉

ニンニクの入浴剤だきつと効く

落ち葉舞う祈ることのみ掌に残す

自惚れもルージュも嘘も底をつき

高知市 北川竹萌

枕辺のスタンド灯し春の詩

健やかに迎え米寿の花の種

三〇〇の年賀発送するポスト

久しぶり会って覗くは縄のれん

運転を止めて不便になる米寿

高知県 赤川菊野

会うだけで心にオアシスくれる人

会いにゆくびつくり箱をふところに

新世紀やはり私は一人だな

気まぐれな小指が起こす乱気流

ひよっとこの面を外せば下は夜叉

北九州市 梅田宣司

落葉舞う俺の過去をば消すように

世渡りに慣れて鬼人と手を結ぶ

粥が炊けたぞ少し甘えて妻が病む

診察券五枚生きるも楽じゃない

酒と餅医者に止められ年を越す

唐津市 山門幸夫

紅葉せず枯葉で散った今年の庭

みかん挿す今年もメジロきつと来る

生命ある花を描けたと老妻を褒め

老友はよろけて共に笑い合い

出陣のセピアの列にある孤独

唐津市 山門タミ

怒鳴ってた亡き親友の子が泣きに来た

春よこい孫の合格生きる糧

ワイン飲み美味しい一品二人膳

玉せせり湯気ふき出して男衆(箱崎宮)

たまに出る街こんな店あったかな

唐津市 宗水笑

手始めにオーイを省く均等法

ジョギングで着いているのが亭主です

冬牡蠣に吾が内臓を覗き見る

五分五分の不運と夫婦笑い合い

鄭重な間違い電に聞き惚れる

唐津市 樋口輝夫

まさかとは思うが遺言書いてみる

断腸の思い麻酔で消えてゆき

終点はもつと遠くにあったはず

冥途道むかし通ったことがある

生還の俺をみんなが何故笑う

唐津市 井上勝視

一億が夢をかけます昇り竜

齧られて見たい曾孫に歯が見える

不作などと言わせぬ妻の裏帳簿

不肖な子遺産の目安だけは持ち

山頭火あこがれる日が多くなる

唐津市 市丸晴翠

澄んだ空あれは極楽かも知れぬ

クローン家族 飼犬までがお人好し

傷ついて迷路を抜けた子に笑顔

人生の午後に二人のティータイム

小兵だが技を極めて舞い納め

唐津市 久保正剣

ドナーカード畢竟臓器進呈券

隠しごと今日から始まるハネムーン

竹筥で探る太古のラブロマン

愛人も携帯電話も持たず古い

女一人過去を脚色して生きる

唐津市 仁部四郎

受験子は希望参加の寒稽古

ぜんざいの係は寒い寒稽古

町内の計報子細を追いつめぬ

町内に密謀夜が騒がしい

町内の会議手だけは上げてきた

唐津市 山口高明

親善の使者に紛れる亡命者

紳士録めくる詐欺師は赤い爪

国の為なんて気概は三分ほど

コチコチに硬く成つて燕尾服

見あげれば空青々と大師像

熊本市 永田俊子

枯芦の声をふと聞く歳になり

葉牡丹の思い轟く紅の渦

薄氷静かに踏んでまだ童女

妥協知らぬ怒濤いつまで打ち合うて

宇宙船神がハイジャックしたかもよ

熊本県 高野宵草

停電の闇で悔んだ整理下手

職さがす足へ付き添う昼の月

パチンコにゆく右折車に待たされる

天二物与えず健康貧乏だ

陽の恵みメガネはずして日向ボコ

(岩切康子さんの句は87ページに掲載してあります)

この句 この人

橘 高 薫 風

始めに買い溜めありき二千年

石原 靖巳

ミレニアムのスタートのY2Kに関して、目立った混乱はなくて何よりであった。備えあればの成果である。結果から見ると一体何だったのだらうとなるが、「買い溜めありき」が端的に言っているすべてなのである。今少し早く川柳界に登場されていたらと思う紳士、私の身近な相談役の一人である。

綿雲のひとつが残る古日記 小野 克枝
美空ひばりの歌う「花笠道中」に「ぽっかり浮かんだ白い雲」という詞があり、何やらさみしい旅の空」と続く。この句にも「いとし殿御のこころの中は」というふうな哀愁を感じさせる。戦後満洲から引き上げた苦勞人、家庭的なやさしさに女丈夫の一面も兼ね備えた頼りになる人である。

好きなのは待つ時間だという土筆
石上 悦子
春の日永のうらかな日差しが実感出来る句である。土筆坊を据えた手柄であらう。

「しなびても土筆袴はつけて居た 一瓢」の句とは違って、一冊の文庫本を持った若若しい人物像も見える。川柳会梨花で活躍、物静かだが真面目なしっかり者、坂田和歌子さんと表裏一体の両輪で会は伸びている。

世話好きへ金の相談だけがない

岸本 宏章

小さな会の司会から葬儀委員長まで、あの人に任せたら大船に乗った気でいられるという人物はいるけれど、金銭に関することは全く別なのである。鳥取県には川柳塔だけでなく好作家が薈めいているので、おのずから句のレベルは高い。その環境での驚愕作家の存在は、ほんとうに羨ましく感じられる。

客用の茶碗息子の家で食べ 宮尾みのり
民主主義は寂しい。殊に年を取ると心理的にも近くに突っかい棒が欲しいものなのだ。

会社の転勤のように余儀ない事情もなく、核家族的別居の子を訪ねての感懐がストレートに伝わる。ふあうすと川柳社同人中野千秋さんの妹さんで、お二人ともに賢母型。とは

いえ印象はふつくらとした容姿が温かい。

風花に百人一首透きとおる 高橋 夕花

「鬼灯は母よ母よと赤くなる」の句以来、

感性豊かな作者の印象を持つが、この句も風花をちたつかせて和歌の抒情を透徹させたのは見事だと思ふ。「由良の門をわたる舟人か

ちをたへ行くへも知らぬ恋のみちかな 曽根好忠」あたり、この句にふさわしかろう。

実家が画廊を営んでおられたと聞くと、感性のことに納得のいく気がする。

水槽で鯛がにんまり笑ったよ

澤田 千春

動物園の孔雀や水族館のスターたちには、見られているとの意識が育つのではなからうか。鯛も悠々と泳いでいて、くるりと向きを変えるとき、ファッションモデルめいた笑顔を見せた気が作者には感じられた。同感だ。

千春さんの踊り好き、芝居上手に接しても何年になるだろうか。今に童女のたすまだであるが、芯があるので私には怖い姉上だ。

眠れぬ夜神話の山河点滅す 堀江 正朗

「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに」記紀歌謡の国の作者は、戦で失明するまでに接した

簸川周辺の山河を慕う。健康者には推察の域を越えた絶唱と思える。昨年末寿の祝盃を挙げられたが、作品もなお饗饗として。

自選集

小西雄々

金井文秋

貸した金もどらず重い背なの雪
般若心経 鶴は命の炎を運ぶ
弔旗背に隣家で舞った揚羽蝶
胸の炎は近所に隠す化粧する
ブライドを包む筵を編みいそぐ

正本水客

越智一水

お先にと言つて優位をにじませる
迷惑な顔で靴をはきながら
さりげない言葉に反感持ちつつけ
言い訳をだまって聞いていてくれる
足もとの影と話して独りぼち

弘津柳慶

黒川紫香

宴席のオドケ姿にシャッター押し
ハンカチがまだ振られてる汽車の窓
悲しみを抱けば海も悲しんで
周囲から忙しくさせた十二月
やけ気味の見合相手に気にいらぬ

百まで生かされる覚悟もしておこう
不況の風へ寒い話は乗せないで
もうあかんなどと自分に負けるなよ
賞味期限切れた夫婦で仲がよい
これで謎解けるでしょうと出土品
立春の光へきりと立ち向う
金はなくとも縁側はありがたい
六根清浄 願いをこめてドッコイショ
おしゃべりが上手で顔をカバーする
皇室の本だけ本屋高くおき
一人また逝きて京都の冷えを知る(杜的さん逝く)
何かあるご近所の灯がまだ明かい
冬空へ調子合わせて犬が吠え
医者へ行く少し気弱になつて行く
暮れんうち帰りははれと言われても

北風が唸る師走の沓岐対馬
太閤の野望掘り出す名護屋城
宝くじ一枚で乗る飛龍の背
龍の絵が這入ると締まる壁の軸
御節おせちと明治は首を横に振る

田口虹汀

西村早苗

怒りともこな雪音をたてて降り
春の雪生きる足跡遊ばせる
うまのあうお人だ少しおだてるか
冷たい手つないで春の街さがす
春の対話へ角瓶と酒の瓶

高杉鬼遊

阿萬萬的

ふるさとは雪かお墓も浄められ
杜撰やなバケツとヒシヤク何をする
長いこと貧乏したが孫もでき
視聴臭味触しずかにひとを抱く
フレディの葉っぱに雪がふっている

石川侃流洞

二宗吟平

前かがみに歩くな老人臭くなる
頼られた辞書が手垢で弱ってる
仏壇のお供えゴキブリ目が早い
コンビューターの年休伺いミレニアム
種あかししてから奥の手の手品

藤村ノ女

宮口笛生

仏像の御名は知らず掌を合わす
石地藏誰の祈りか餅供え
水やって花の笑顔と対話する
なごやかな日々が流れて老い忘れ
大根の切干し亡母の匂いする

コンビニの深夜ポツリポツリ客
一人でも行く駅前縄のれん
血だらけに鰯の首をはねる妻
賞味期限来てる大正生れです
温泉とカニに一泊恵まれる

舟木与根一

親も子も短くなつた導火線
姑のおもちゃを嫁が用意する
六法を確かめて軒下を貸す
寒行の僧の背中も雪催い
遺言を夜つびて残しポチは逝く

板尾岳人

梅匂う母もわたしも茶を淹れる
うぐいすも迂闊に啼けぬ寒の中
梅林で打ち明け話彷徨いて
大阪城見上げる梅にある嫉妬
どの梅も恋をしている風の乱

土橋 螢

大きな声でありがとうございます
彼岸から昭和一桁募集中
太陽に照らされ影のあるいのち
歎きなどせぬ不死鳥の雄である
大山に雪とりあえず飯を食う

芳 地 狸 村

落日の借景映える瀬戸の橋(五色台休暇村 2句)
大橋を見下ろす朝のバイキング
故郷の詫間の海がひとまたぎ(与島 3句)
大橋に筆を走らすスケッチ帳
丁髷が生きていそうな咸臨丸

小 砂 白 汀

二千年問題抱えたままで年を越え
赦されて友はあの世へ旅立ちぬ
来る春をかざる気でいる冬木立
旅の宿からポストンバッグに夜逃げされ
仲間から外れて飛んだ流れ星

川 島 諷 云 児

無官でも僕には大樹だった父
笑顔だけ忘れぬようにポケットに
肩書が泣けぬ男にしてみよう
前向きに生きたし過去は過去として
同居する嫁は娘よりも深い縁

田 辺 灸 六

子を産めと龍のおとしごから年賀
ひとり娘で孫三人は殊勲甲
寿命さえあれば渡れるいのち川
気取らずに年を重ねた喜寿の坂
句姿の一本杉を飾らない

榎 本 吐 来

名と顔がびつたり来ない賀状書く
喧嘩するうちが花よという悟り
二〇〇〇年の庭じつくりとひとり酒
渋柿の小粒が落ちる刻を待つ
手ぶらでは行けぬ誘いを持て余す

林 荒 介

足跡を辿って春を見に行こう
シャッターが切り取っている梅さくら
沖からの手紙を今日も読み返す
結び目を解いて旅を見届ける
棚を吊る其処がわたしの指定席

堀 端 三 男

することは無いが気忙しい年の暮れ
生かされる余得新たな出会いあり
ありがとう忘年会の梯子する
灯明を消しても愚痴が続いてる
二千年へ続く孤高の木守り柿

木 村 あ き ら

瑞雲がたなびき鳳 空に舞う
目立たない処で効いてる母の釘
押花の便り熱い思いを乗せてくる
境内に悪魔は入れぬ仁王門
背伸びして冷たい風に当てられる

恒 松 町 紅

子育てが下手で玩具に聞いている
飲めるうち華だと言って飲んでいる
その続き明日にしよう鉄の汗
戦友の分まで命もらってる
長続きしない道具が置いてある

遠 山 可 住

もう牛はいない夕陽へ草を焼く
子も孫も忘れ尽して白寿とや
深夜トラック消えた静けさ雪しんしん
検査入院まだ一合は飲んでよし
二本足で立ってヒト科が森を出る

野 田 素 身 郎

招かれて薬持参の祝い酒
退院へまず美容院女です
来年も聞けるだろうか除夜の鐘
大晦日朝から時計ばかり見る
御利益半減テレビですます初詣で

波 多 野 五 楽 庵

尊厳死 神に委ねるだけのこと
故郷の涙がほしい雪螢
掛け布団顔まで上げて泣く夜かな
いたわりの言葉で包むありがたさ
地吹雪や阿吽も口を閉じたまま

小 林 由 多 香

家中の知恵を集める茶の間の灯
渋滞の中でトイレも水もない
菓子箱を提げた相談には注意
回転の早い頭でどじも踏む
火葬場に長らく行ったことがない

月原宵明

皇太子妃目出度い兆候二千年
怒つて携帯電話とすれ違ふ
方言で喋る鈍行だから好き
一喝を考えていて眼鏡拭く
美しく老いたなどほとんど欲な

斉藤 晶

献上のりんご津軽の情を込め
出稼ぎが立つと白鳥舞い降りる
木枯しの音に馴染んでいく散歩
ボジョレヌーボーほんのりとしつとりと
裸木になり二千年を迎える

八木 千代

頃合いの箱に納めるはずの像
作っては壊して像が短くなる
死ぬるまで匿い通す像の貌
目立たないように置き場所考える
残像のラインを何度でも刻む

工藤 吟笑

竹鎗で勝つと思つた遠い過去
石垣の島に眠つた鉄かぶと
七勝七敗全てを明日に賭けている
踏まれてもスマイレしぶとく花咲かす
菜の花が咲いて遍路の笠揺れる

藤井明朗

二〇〇〇年を迎え夢よありがとう
ぬくもりのふれあい広がる夢もう
空を舞うなつかしそくに渡り鳥
うぐいすの初鳴き早春ゆるやかに
新春へ貧乏閑なしが向きを変え

西田柳宏子

食卓の祈りを孫がリードする
一応の遠慮そのまま受取られ
駆け引きと知らずホイホイ乗せられる
鍋奉行父の忙しい箸さばき
七癖の中の一つは家伝です

河内天笑

大阪労災病院の窓より
寒風に雲走らされ走らされ
冬の面構え連ねて雲渡る
蒼天をひつじの群れが埋め尽くし
落し蓋みたいに雲が垂れ下がり
カテゴリー昼がいちばん短い日(心臓冠動脈の拡張工事)

橘高薫風

初光り木伊乃の金も二〇〇〇年
もつと光をもつと空気をお元日
おおらかに僕も初湯のジベタリアン
お年玉きったかたくちゃん待つてたホイ
除夜の鐘俊平星を磨いとる

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(109)

橘 高 薫 風

神様と行違った話

路郎生

旧冬は随分と忙しかった。明けても暮れても川柳々々で暮らして、つくづく感じたことはその事に没頭すればするほど、ますますよいよい忙しくなるといふことだった。

実は僕は今年は五十になるので、五十になつたら少しく落ちついて「川・雑」の仕事はすべて誰かに譲つて僕自身は川柳の象牙の塔に閉じこもつて、思うがままに書いたり読んだりしたいと思つていたが、それも昨年の改組からどうにも手を引く訳に行かず、私の考へていた事は当分実現しそうにもない。しかし何れにしても川柳のために働くことにかわりはないので、もう一度フンドシを締め直して大いにやつて見たいと思つている。

私の元氣はこの年になつてもなかなか落ちない。むしろ、より以上に旺々であると言いたい。が肉体的の方はそうはいかぬ。それでひそかに警戒はしていたが、暮の二十四日だったか、玉出の街路上にこれという原因もないのに、木を切り倒したように物の見事にブツ仆

れた。それがために、その夜の堂ビルの忘年会は出席を約してあつたが失礼した。しかし尼崎の親友会の忘年川柳会は責任上出掛けることにしたが、これは家族が案じるので、機見女の護衛つきで出掛け辛うじて責をふさいだ。私は今でもなぜ仆れたかその原因を知らない。矢張りもう元氣だけではないかぬ年になつたのだろうか。そう考えたと私が柳界のために働いて置きたいと思つている仕事は、いよいよよいよいそがねばならない。

私の家族が、私の仆れたことについて、非常な衝撃を受けたのも無理はない。私の父も大阪の北区の大火のあつた直後、九月に脳溢血で亡くなつたし、葎乃の父の蘆村翁も矢張り笠置でもんどり打つてブツ仆れて二年後、やはり脳溢血で亡くなつたという前例がある。

殊に健康そのものだった葎乃が昨年の七月に突然仆れて病臥三ヶ月、まだ充分に健康体にはなつていない時であるから萬一のことがあつたらという考え方が子供達の頭に浮かんだらしい。

葎乃が私の仕事場へ出て来ての話を「澤田先生がお茶を喫みに来やはつたので、あんなの仆れたことを話したら『そんなことはよくありますな。田舎では、神様と行き違つたのだと言います』と言やはんね。先生はお医者はんやから、そろ血圧でも計つて置けと言やはるかと思つてたら、まるで見当違いの返事をしやはつたので、矢張りあんたが川柳々々で暮してるように、民俗学の事はかり考へてはるのやなア」という。

「アハハハ、そいつは面白い。それでえのや。澤田博士は民俗学で生きるように生れてゐるのや。エスベラントのザメンホフ博士も元は歯医者だったが、寝ても覚めてもエスベラントで門前雀羅だつたといふことだし、そんな例は古今東西にある事だ。僕だって、親爺は商売人にするつもりで高商にまで入れてくれたが、矢張り川柳家の方が板についたのか、遂々自分で川柳業をはじめてしまつたやないか。人間の仕事は何処に待ち伏せしているのか判つたものではない。まあ、そう心配するな。それよりも暮の忙しいのに神様と行き違つた方がよっぽど面白いやないか」。

路郎先生は五十歳、私は七十三歳、よう似ている。違ふのは先生は川柳界規模、私は川柳塔規模、行き違いも格が違つたのである。

川柳太平記 (261)

川柳の群像

工藤安亭

東野大八

「工藤甲吉先生を筆頭に、従兄の波多野五楽庵も川柳界にあつて、活躍をしておりますだけに、さぞや泉下の親父殿も切齒扼腕してゐるであらうなあ……と思いつつ、なかなか仕事が進まず……云々」

と筆書きも派手な一書をはさみ込んだ一冊の本が、ジャングル化した書棚の片隅から現れた。

その一冊を確かめるとB5布張のボール箱入りの金文字の表は『安亭追悼句集・親父からの伝言』著者工藤守彦・私家版百余頁の瀟洒な出来栄の本だった。日附を見ると平成二年九月とある。

(ははん、これは工藤安亭先生の追悼号だな)

とこちら立ち所に合点がいった。『川柳の群

像』も目下タネ切れとあつて今回はこの人物をとりあげることに立ち所に決めた。

手控えのメモに拠るとつぎの通りである。

「本名・工藤守邦・明治36年3月19日青森県生れ。歯科医師、「口をアー」とあいて……という職業柄、安亭なる柳号をつけた。肩書は三江省歯科医師会長。敗戦により満洲国から引揚後、津軽郡平内町で開業し、三郎・幸坊らとひらなり吟社を創立。各吟社と交流し津軽地方の柳界振興に寄与し、長男に翠亭、次男に桐亭の柳号をつける熱心さで、昭和44年1月29日没、享年65、邦光院安亭通悟居士が戒名。

ここで出てくる三江省医師会長の肩書だが三江省の省都は佳木斯である。この安亭記にふれるキツカケは、この開拓地の本拠であり

その名も佳木斯とは、筆者とは切っても切れぬ因縁もあったからだ。

というのは、この掘立小屋の軒続きみたいな佳木斯の街中でヒョククリ出会ったのが、齢も同じ頃の加藤敬という男。

「新京の弘報処でブラブラしてたのがいなくなつたと思つたらこんなとこに居たのか」と挨拶すると、ニヤツとヒゲ面を柔らかくして、モソモソと懐から名刺をとり出していきなり「新京のしがない新聞係が今は社長だ」とイパツた。みると三江新聞社長の肩書の活字なのは仰天した。

「新聞はタブロイドの一枚刷りで、隔日版だがね、社長は社長さ」

と改めて威張つたあと、今日はいいいカモが来た、と早速手近の店へ飛び込み電話。

「今日は君の大歓迎会だ。相手は日の丸、ケンカ到一大佐だよ。カクゴしろよ」

とそそくさと「おれの社へ来て待つてろ」とどこかへ行つてしまった。

かくて彼に伴われて佳木斯司令部と小さい木札のある官舎らしき大きな建物の中へ肩を並べて連れ込まれたのがヒル頃だ。

ケンカ到——こと佐々木到一は、関東軍切つての荒武者で知られた大兵の金筋組で、陸士四十期生あたりのいいオッサンだ。

「やあ、来たか来たか。お前んところの城島舟礼は元氣かい。それはよかった」と荒っぽく握手のあと、この海坊主みたいな北辺の司令官？は相好を崩しつ放し。

「まずは雄子料理だな。この辺はこいつが蹴つますくほどウウヨいるよ」

かくて昼日中から酒池肉林の大宴会となり加藤敬も心得たもので、地元の花たち二、三人も如才なく華やかに現れた。

酒席中、口あけの話の中で小指をつき出し「コレが歯痛が持病のところ、なんとそれを三日で癒した中デブの歯医者が居たよ。ナントカ言ったが、名医だよ三日で癒しおつた」どうやらそれが工藤安亭先生だったようだ。話が十分横道に外れてしまったので「親父の伝言」なる本に還そう。

川柳作品は凡々、三百余句が載っているが、ところどころに親父のゴシップが数行宛ある。「相撲は狂の字がつくほど大好き、若い頃は自らもマワシをつけて土俵に上った人。場所が始まると診察の手が留守になるほど熱中して若貴兄弟の働きをどんな思いで見ていることか、酔えば必ず相撲甚句がオハコ……」

「生まれ故郷の津軽をこよなく愛し、岩木山を愛し、平野の青を愛し、女房を大切にし、子ばんのうであり、一生懸命に働き津軽の土

にかえって行ったオヤジ。菩提寺の緑濃い墓地に香華を手向けるとき、いつもフツと思うのです。

この匂い、セミの声、弘前独得の暑さ、そして汗：額に汗して不自由な右目もなんのその：壮烈に生きた父は、今が一番偉せなのかもしれない……と：父母兄弟の眠る代々の墓地、コケむした墓石が：おう、よく来てくれた、ありがとう……そう呼びかけてくれるように思うのは、気のせいでしょうか、弘前市(茂森)三十三ヶ寺の名刹蘭庭院に眠っております」著者守彦の書簡の短文は、あまり巧いものではないが、どこか弘前の土の匂いがする。

「土筆の玉子とじ、鮎の塩焼、うるか、塩辛、クサヤ、ホヤ等々美味、珍味に目のない人でした。一日の疲れを晩酌でいやし、そして握り飯でしめる。そんな姿がホウフツとして浮んで来ます。食いしん坊、かくいう私も父ゆずり」この本の最後に「著者略歴」というのがあるが、父安亭と著者自身のことかふれてある。「工藤守邦(安亭)父道生、母マネの三男として生れるが、上二人は幼い頃無くして、歯科医道の跡取りの道へ進む。満洲へ渡り開業、大成功するが終戦となり青森県蟹田町で一時開業。その後、青森県東津軽郡平内町小湊へ移り、生涯をこの土地で過す。趣味は川

柳一途であった。傍線は著者の注」

工藤守彦(この本の著者)

昭和22年5月13日生れ。守邦の三男だが、父同様二人の兄を失い、長男として育つ。青森一高→明治大学→サンケイアトムズと野球の道を歩むが肩を痛め退団。父の死後、単身上京、格闘技へ第二の人生を求め、メキシコ・アメリカを転戦。六十二年廃業。現在健康食品会社代表取締役。

以上を見ると、この著者は若年の頃は野球選手で鳴らし晩年はプロレスラーだったらしい。故安亭先生も頼みの息子が変った人生を送った反証もあつて相撲マニアに打ち込んだらしい。

凍てついた大陸の屯夢にみる 安亭
がこの本の巻頭のトッパンになっているが、この句に筆者も大陸郷愁の夢をそそられてならない一句である。以下安亭作品をこの本の中から拾いあげて並べておく。

取的の涙に映る雲の峰 安亭

夜相撲へ父も浴衣を脱ぎ捨てると

かまくらの灯が雪子子の夢誘う

ぬくもりにかまくらの唄弾む夜

悩みごと弥陀は胡坐で聞いてくれ

山唄へ昔を憶うコケシの瞳

ぬかずけは恩顔浮かぶ謝恩の碑

▼次号は「本田恵二朗」

俳風柳多留二四篇研究 14

大野 秀二・小栗 清吾
橋本 秀信・粕谷 長生
山田 昭夫・伊吹 和男

清 博美・佐藤 要人

98 茶一斤だけまゝ母ハ馳走する

伊吹 茶の重量や価格については省略するが、茶一斤は継母としてはかなりの散財である。

継子の妻奉公の手土産として、茶一斤だけ持参させて、あとは何も持たせなかったということか。

大野 お茶だけは十分に出したが、食事は出さないことか。

山田 「茶一斤」または「一斤茶」がキーワードで、関係すると思われる句に次のようなものがある

壹斤茶あけて小娘おもひ出し
うきく〜と十六日の茶一斤

宝十二仁5

菊丈 明元・十二・25

一斤の茶を淀舟の仮枕

一枝冬30

しかし、これでも判然としない。

清 わからず。「茶一斤」は「茶にする」の利かせでもあろうか。

佐藤 未考。継母・継子の説話は説教にも御伽草子にも結構多いからそれらからの句かも知れない。ただし、調査行き届かず現在不明。

99 言いわけをしたが間男おちどなり

大野 間男をして見付かった時の状況と解した。間男はしていないとか、相手の女が誘ったのだなどと言訳をしたのが落度であった。悪事が発覚するといひ、自分を正当化して言訳したくなるものである。落度から大金の内済料を支払うはめになったのであろう。

いひわけをして間男ハしかられる 八8
小栗 賛。言訳をしないでしらはつくればよかったのか。

伊吹 語るに落ちるという状態。

清 亭主は間男を知らなかった。間男はそうとも知らず、てっきりバレているものと考えて、言い訳をした。これを聞いて、亭主は間男を知る。とんだやぶ蛇、そ知らぬ顔をしていれば、間男はバレなかったのに、言わでもいい言い訳をした。これが落度なのである。こゝ解さないと、少しも面白くない句である。

佐藤 同右。

100 寺の門番役徳にしきみ売り

大野 檜売は、仏前に供える檜をつる人。

寺の門番をしているため、寺参りの人に売る檜の商いができる。ほんのわずかな収入であるが、寺の門番としての役得である。

役得で門番貳百受納する

一九ス7

橋本 賛。今でもよくあること。結局割高なものを買わされる、独占販売。

伊吹 同。割高まで言及するのは如何なものか。

清 同。こういう商売は、意外に実入りが多いものである。

佐藤 同。

101 風の糸のびをしひく売て遣り

大野 風の糸を売るのは糸の長さを計る必要がある。両手で一尋、二尋と長さを計って売ってやる。あたかも伸びをしているようにある。雑貨屋の商売風景の一齣である。

伸をしひく売て遣る風の糸く 五六三
清・佐藤 賛。

102 かるやきを賣に他宗ハ通りぬけ

大野 軽焼は、「軽焼煎餅の略称。浅草誓願寺門前、茗荷屋九兵衛と云ふ者が、京都丸山の製を模して焼き始めたもので、軽しという語を縁起に、専ら抱瘡の見舞い品として用いられた」(『川柳大辞典』)。

浄土宗以外の他の宗徒も、東本願寺境内を通り抜けて、誓願寺前の茗荷屋へ軽焼煎餅を買いに行く、という句。

大手は甘酒からめてはかるやき

三〇一三

小栗 賛。東本願寺の北側が誓願寺。地図で見る限り通り抜けてもさほど便利そうにも思えぬが、他宗の門徒に対する気持が「通り抜け」ということか。

清 「通り抜け」は近道をする意ではない。他の宗徒の者も「やむを得ずそこを通つて」の意ならん。

佐藤 同右。それでも通り抜けでしょう。

103 大坂で市の男をおしいこと

大野 市の男は片桐市正且元の異称。

豊臣秀吉に仕えていた片桐市正且元が徳川方と通じているとみられ、淀君に疎んぜられて、「大坂の陣」の前に大坂城を退去してしまつた。

豊臣方は片桐を使つて徳川との交渉を持ち、一大名として過せば長らえることができたのに「大坂の陣」の時、絶滅してしまつた。片桐市正且元を充分に活用できなかったことが惜しいことになる。

市の男たにこうしつ氣にいらす 天七天二

片桐か為ハにちやくのつはね也 二四二

橋本 賛。蛇足ながら「第一番の忠臣」の意も懸つていと思つ。

佐藤 賛。坪内逍遙の『桐一葉』『杳手鳥狐城落月』に、忠臣片桐且元が活写されている。

104 尤もな事うがいをござハ病み

大野 古川柳では労咳は息子や娘がかかる病氣として詠まれていることが多い。贅女は盲目なので相手となる男もいないゆえ、性欲抑制による神経衰弱症による労咳となるのも当然である。

らつかひにきけハたれでもいい、とい、

安八礼10

清・佐藤 賛。

105 女房に負るものとたわけ者

大野 女房が間男をしている。俺も負けずに間男をやるぞと言っている馬鹿者の亭主。

女房のむなくらをとるたわけもの 一六二

うぬが女房と思つてゐたわけ者 四五二〇

伊吹 鑑賞の問題かも知れませんが、礎稿の場合は近代から現代にかけての感覚ではないかと思われる。近世はあくまでも、立前は一般的に男上位の世界だから、間男など論外で、どんな些細な事でも、女房に負けるものと、女房を競争相手とする亭主自体がたわけ者であるのではないか？

清 「拾遺」では雑部に配置されている。とすれば、間男・女郎買は行き過ぎならん。伊

吹説あたりが無難か。

佐藤 伊吹説賛。

秀句鑑賞

同人吟 桑原道夫

—1月号から—

ふもとからゆつくり暮れるみかん山

板垣 草丘

かやぶきの屋根に小さな秋の風

小玉 満江

白鷺と目線が合うた寒い朝

石倉 美佐子

日本海紺碧に風ぎ漁船撒き

林 露杖

朝の画廊に秋の空気が正座する

春城 武庫坊

いずれの句も描写力の確かな安定した句で、情景がありありと目に浮かぶ。情景が思い浮かぶだけでなく、空気の冷たさや厚味、光線の具合を体感することができる。それには、措辞はもちろんのこと、心地よいリズムを生み出す基の、音の使われ方も大いに影響している。例えば、三句目。S音の多用が、凜と引きしまった「寒い朝」とびったり合っている。四句目。撥音とi音・k音の多用が、「日本海」を、まるで神のように眺めているこの句の情景にふさわしい。

ガードレールが途切れ滝へ下る道

岩本 笑子

「途切れて」でなく、「途切れ」となっているところがよい。一音足りないことが、「途切れ」ている感じをよく表しており、想像力をかきたててくれるのだ。「滝へ下る道」のごつごつとした地肌や、道を覆わんばかりに生えている雑草までが目に浮かぶ。

日溜りに昔話の数も減り

中村 ゆきを

この句の手柄は、「日溜り」という具体的なものを上五に置いた点にある。そのため、「昔話の数も減」ったという感懐が、概念にとどまることなく実在化した。二十世紀末になり、昔話が消えていくはかなさとなつたしさを、同時に噛みしめている作者の姿が見える。

プラトニックラブを包んだ鰯雲

高野 宵草

「プラトニックラブ」と「鰯雲」との取合わせがよい。入道雲だと、プラトニックラ

ブにはならない。「プラトニックラブ」だからこそ、あの鱗状の「鰯雲」でも包みこめるのだろう。一時のことかもしれないが、打てばびびくものを失くした木の葉髪

永田 俊子

髪は年中抜け落ちるものだが、秋の抜け毛は、冬に向かう植物の落葉という季節感も合わせて感じてしまうせいかな、よりいっそう、はかなく感じられる。それを、「打てばびびくものを失くした」という感覚で、表現された。

いないいないばあ三回したら泣けてくる

松本文子

「泣けてくる」のは、赤ん坊（子ども）ではなくて、もちろん、親（大人）の方である。「いないいないばあ」を「三回」しても、赤ん坊は、目をくりくりと動かしているばかり、そのような情景がまず浮かぶ。その目の、何ものをも疑つてもいない、恐れてもいない、きらきらと輝く美しさに、思わず、涙が滲んできたのかもしれない。深読みをしようとするれば、いろいろな解釈が成り立つ楽しい句である。

覇氣のない咳を上手にしています

坂田 和歌子

咳をしている人物を、「私」ととるか、「第

三者」ととるか、解釈の分れる句である。古川柳ならば、「第三者」だろう。現代の川柳界においては、おそらく「私」ととる人の方が多いだろう。咳をしている「私」を、もう一人の「私」が客観化して眺めているのだ、というように。私(評者)はどうかというと、どちらでもよいと思う。いずれにしても、句の眼目が、「覇気のない咳」という措辞の発見にあることは変わらないだろう。

よろこびを大きく回す観覧車

野坂 なみ

「観覧車」を詠んだ句は、過去にもたくさんあっただろうが、このように、「観覧車」の「よろこび」を、真正面から詠んだスケールの大きい句には、今まで出会ったことがないような気がする。

口に出してみると空しい冬の虹

長浜 澄子

「冬の虹」は、本来、他の季節の虹と比べて空しさを感じさせるものだが、「フユノニジ。フユノニジ」と、つぶやいてみると、なるほど、「冬の虹」の空しさが確認できるのだ。

宴酣私の席にいる狸

川上 大輪

日ごろお世話になっている人への挨拶もす

ませて、自分の席に戻ろうとしたところ、いつのまにか「私の席」に居座ってしまったて、当然のような顔をしている「狸」のような人。いやいや、本物の「狸」だと思っておこうか。別に、腹を立てているのではないのだが、そろそろ気がついてほしいと、「私」は思うのです。

「恩返し」が果たせないまま木守柿

木本 朱夏

枝の高いところに、ぼつんと残された柿の実一つ。まるで、恩人を亡くして虚脱感に陥っている「私」のようだ。永遠に「恩返し」が果たせない」のはわかっていながらも、来年もよく実がつくようにと枝に残された「木守柿」に、我が身を重ね合わせて祈るしかないのである。

ころがったとこでころがる笑い声

和泉 あかり

確かに、こういうことがある。口からこぼれ落ちた「笑い声」がボールのように固まって、あれよあれよと見ているうちに、ころころと転がって止まる。手を伸ばせば届きそうなところにあるのだが、茫然としている「私」は、「笑い声」が笑いころがっているのを、ただただ見ているばかり。そのようなことが、確かにある。

金太郎飴の中から母の傘

千葉 風樹

切っても切っても切り口に現れる金太郎の顔に、私(評者)も何となく物足りなさを感じていた。何か欠けているのである。それが、「母の傘」だと知らされて、十分に納得がいった。これで、あの茫洋とした金太郎の顔も、きりと引きしめることだろう。

鏡の裏の鬼が時どき舌を出す

門谷 たす子

「鏡の裏」に棲んでいる「鬼」を自分の心の化身だととらえて、その「鬼」が自分自身に向かつて、「時どき舌を出す」のだという解釈も成立するだろうが、それでは、おもしろくない。こは、自分とはちがう、文字どおりの「鬼」ととった方がおもしろい。その「鬼」が「時どき」、自己主張するように、べろりと「鏡」を突き破って「舌を出す」のである。

お芝居はしてないラッコ親子なり

山本 義子

そのとおり。「ラッコ親子」が、体を上下に入れかえながら戯れているように見えるのは、決して「お芝居」ではないのだ。そうだとわかっていながらも、人間には、どうしても「お芝居」に見えてしまうのである。

水煙抄

河内天笑選

堺市村上玄也

声だけで顔をイメージしてしまふ

懐が軽くて開かぬ自動ドア

無愛想な売り子に世辞を言うて買う

軒かく度に女房足で蹴り

猪口あける仕草で飲み誘われる

横浜市三村八重子

スランプで言訳だけはうまくなる

捨ててきた故郷の訛が離れない

口下手の反論はただ笑うのみ

ジングルベルわたしの財布あけにくる

歳月や息子から来た年賀状

愛媛県中居善信

いつときの命であつた冬の虹

新品の軍手で挑む二度の職

刺の無いバラには興味など持たぬ

逃げ足の早い男を笑えない

石一つ動かしたい意思を持つ

鳥取市福永ひかり

新しいことに気後れする齡

化粧して自分に元氣足してやる

散歩にも少しお金を持って出る

スローモーションいつからこんな我が動き

長生きのコツを長生きから盗む

秋田県湊修水

灯を消してテレビを消して窓の雪

雪の夜しんみり酔えるひとり酒

少子化の樹にとしよりがすがりつく

無理をせず楽しむことで妥協する

長生きをすればいいことありそうで

和歌山市木村親路

FAを妻に宣言されそうな

潤滑油孫がときどきさしにくる

老後の不安私だけではないらしい

クラス会タイヤの指を見せたがり

学校で教えぬことをすぐ覚え

三重県 佐々木 森 哉

わたしも枯葉ひらひらとあの世まで

落葉を踏むと私の老いの音がする

松明の火の粉は屹度父祖と亡父

モカ二杯過ぎし恋など飲んでいる

私を殺す 罌が潜んでいる薬

富田林市 大橋 鐘 造

月あかりみんな美人にしてくれる

上り坂味方も敵も増えてくる

影武者のままで終った父の汗

物見ればすぐに値を聞く嫌な癖

鳴き砂に泣かれ進めぬ足の裏

岡山市 大森 純 子

年金で文学少女しています

カタカナ語増えて日本語軽くなる

絵ハガキの椿を部屋のアちこちに

行く度に採血ばくはカモかしら

名画でも波長合うもの合わせもの

堺市 和田 つづや

がむしゃらに來たから戻り道知らぬ

青春に戻る人で電話する

俺の灰汁抜けぬどれほど晒しても

正論を吐いたら下駄を預けられ

鼻の先ちゃんと春風すぎてった

兵庫県 広瀬 房 江

義援箱後戻りして気持だけ

お隣で叱られているうちの猫

葉ばたんに淋しい庭が生き返る

嫁からの餞別に胸ホツカホカ

祝宴の計画を練る夫の喜寿

宝塚市 飯 西 ミサヲ

まだ八十遅くはないと言いつ聞かせ

大が出たただそれだけが今日の幸

達者だと一行だけの年賀状

泣き上戸慰め合って派手に泣き

退院を一人で祝う寝正月

大阪市 中澤 伽 羅

病院の都合に合わせ入院す

病院を探検して一日目

病院のうす味持つて退院す

缶詰と水買い溜める変な暮れ

免許証身元保証のために持つ

鳥取市 有 沢 せつ子

工場が煙を吐いている安堵

住所録書き足してゆく上り坂

健康はいいな八十路を畑が待つ

日向ぼこ互いの長寿褒めながら

その時の都合で耳が遠くなる

大阪市 一本勇太

事忽れ主義へオブジェが決まらない
リサイクルショップに私の首をおく

枯野残照まだ生臭き血を愛す

軟弱な男を攻める唐辛子

生も死も美学と思う青い刻

大阪市 奥村五月

舞の海 技売りつくし店しまい

大阪府笑いの知事に泣く赤字

ゆけむりの桶に浮べた酒を酌む

三姉妹母の介護を譲り合い

古希の母少し口紅赤すぎる

大阪市 辻川咲

音だけの見ないテレビを付けている

ぎんなんが元気に歩くと肩に落ち

親子酒もつれた糸が解け始め

恋の灯をチョッピリともし老いの坂

娘からまごころ貰い暮してる

堺市 喜多美波

レッツゴー日課の足に気合掛け

樹林抜け溢れる酸素独り占め

庭柿と大根もらい柿なます

骨量はたっぷりですといい答え

ワクチンを打って新年恙なく

堺市 大橋 錦

胃カメラに看護婦さんの温い声
損しても口一杯は言わんとこ

物言わぬ機械がお辞儀チェックイン

孫に似たこけしみやげについ買った

寺参り会釈した人誰だっけ

八尾市 田中トシエ

金運がつくと一円でも拾う

念仏を唱える割に不親切

七草粥の由来に祖母の出番くる

嫁姑違った色の白髪染め

気がつけば漢方薬の好きな歳

寝屋川市 井上すみれ

うれしきはハートのクイン引いたほど

八十年活けてうれしい松竹梅

玄関の寄せ植え優しい女誘う

あの頃は足のやりばの無いコタツ

おせっかい今度は誰が呆けたとか

吹田市 後藤 志津香

赤い服で周りを騙したのは昔

ジャンボくじ当りの多い場所で購入

あかんでも何でも挑む好奇心

曲り角 肌の手入れに金が必要

懐が寒くなりますクリスマス

交野市 森 本 益 弘

人の子は受かつて欲しくない受験
銀杏を拾う人ない御堂筋

表札に亡父が残した字も薄れ

カレンダーまた新しい美女が来る

独り旅旨い地酒に誘われて

豊中市 み き わきみ

日の丸をたてるぞわが家は一戸建

半世紀過ぎたか君が代日章旗

新聞の標題だけを読む日々か

一合で足りる日々なり八十路なる

民事だからと和解をすすめられ

富田林市 中 井 ア キ

大根の好きな男の真正直

蹴りあげた石と昨日を消してゆく

自我の芽は育ててやろう花ばさみ

あの日から指輪ひとつに縛られる

冬晴れと遊ぶひとりのカレンダー

富田林市 中 崎 深 雪

野の菊があいさつしてる散歩道

店員のすすめる服に老いを知り

秋風は葉の色かえる手品師だ

愛犬のしぐさ家族の笑みをよび

さくさくと落ち葉踏みしめ秋深し

岸和田市 不 破 仁 緑

去年より三枚減った賀状書く

都市砂漠脂肪太りの人と犬

人間が神になるからややこしい

弱者の血吸うて最高何ぬかす

百八つ間違ひ無しに鳴るやろか

羽曳野市 川 口 信 子

アルバムに貼られぬ人をふと思つ

冬の朝吹きこぼれてる奈良の粥

売り出しの特賞くじに期待する

成人の日一日すこすパチンコや

初詣で行くのに犬を連れてゆく

和泉市 横 山 捷 也

初採りの大根予約が多すぎる

納得はせぬまま握手してしまふ

動くから柱時計は捨てられず

歩を緩め妻とウインドショッピング

バラ色を深追いしてる長電話

岡山市 清 水 金 太 郎

金婚を祝ってくれた新聞社

人間が作った利器になやまされ

来年もお願ひしますと医院出る

また一つ歳を取るのが早く来る

人事のように思つた歳になり

倉敷市 撰 喜 子

いびきかく友と同室夜が白む
種袋の絵と似て非なる花が咲き
黒梓の葉書届いてうつな暮れ
大きい箱選ぶ私を笑う夫
大掃除なくしたものにめぐり合う

岡山県 土 居 ひでの

二千年夢満載の陽が昇る
喪中につきの葉書ばかりが積る暮れ
開運グズ争うように売れている
元祖がんそと開拓の旗揺れている
真っ先に仏間へ走る栗御飯

米子市 森 脇 麗

わたくしを磨いて強くなる私
近すぎて夫の偉大さ気付かない
ごっつい手ネイルカラーで華やかに
火傷してきずの深さに論される
かりんとうになつてしまったパンの耳

鳥取市 福 島 庸 二

かがり火に揺れる能面固唾のむ
好不調練り返す波乗り越える
初孫の百面相に時忘れ
子育てに忘れ去ったか愛のムチ
ひらめきが二人の愛を永久にする

鳥取市 山 口 千代子

神よ地球に平和の塩を蒔いてくれ
腹も立てずにひ孫が破る障子はり
健康で節目を越した世が見たい
年金を戴く月の有難さ
此の一年を静かに偲ぶ長い夜

鳥取県 西 垣 美知子

時々自分をそっとほめてやる
リハビリの再起妻の手ありがとう
節々が注意の音を出してくる
香たいて亡母と対話の部屋に居る
喜びもかなしみもある駅に立つ

鳥取県 山 内 芳 江

真実を攪乱させるデマ流れ
偏差値を追って出る芽を摘み取られ
ほどほどの雪に旨味を出す野菜
信頼の友にもあった嫉妬心
怖いもの知らずが壁にぶち当たる

鳥取県 鳥 羽 玲 子

お年玉貰う身となり面映ゆい
気まぐれの脳は冴えたりしぼんだり
愛情をぎしぎし詰めて荷が重い
高速船泳げぬ不安忘れさせ
準備してひそかに待っていた計報

今治市 渡邊 伊津志

安来市 原 煩惱児

引き潮に力加わり鳥渡る

今咲いた花を表わす裸体の絵

海鳴りが遠い記憶を呼び戻す

ラッキーな男すんなり波に乗り

テトラポット海の怒りを宥め切る

愛媛県 安野 案山子

親の臍かじって恋もないもんだ

観光を兼ねて呑気な遍路旅

受付けに四角四面のいる役所

愛妻へ踏絵のようなテレコール

テレビから貰い泣きする癖が付く

出雲市 佐藤 治代

継ぎ足しの命は恋も酒も好き

老春の恋は喜劇にして終わる

尻尾ふる芸は案外むずかしい

悶悶と眠れぬ夜の古時計

時どきはひとり暮しに憧れる

出雲市 城 多喜

五十年訛に馴染む出雲人

大阪弁のイントネーションとても好き

なけなしの年金算盤はなせない

女の子ばかりで嫁がいびれない

納得はせぬが謝まる事もある

神神を送り出雲は冬に入る

出雲弁が抜けぬ大臣だから好き

精魂の籠った祖父の有機米

アリゾナはジャップジャップと未だ戦

相部屋で終生の友見つけたり

益田市 岡田 たけを

検診に行く日必ず爪を切る

あの世への路銀内緒で蓄える

雑踏に押されて回るショッピング

ジングルベル遠くに聞いて住んでいる

死ぬまでは安定剤が放せない

兵庫県 安達 厚

インターネット知らんが強く生きてやる

もう少し生きていたくてカメラ飲む

父さんが困って母の出番です

思わくはみんな外れて除夜の鐘

前向きに生きると風が強くなる

兵庫県 久保田 千代

ここいらで時の流れに身を任す

世の中に新語あふれて老いを知る

この年になってじわじわ涌く希望

人生も残り少なく加速気味

ドアのノブ風邪ひきらしい帽子着せ

篠山市 円増純子

我が家にもやっと朗報ある兆し
外で呑むと本音すらすら出るらしい
寺巡り出来るゆとりをいただいて
忙しい人に多趣味のゆとりあり
決断を迫られ揺れるヤジロベー

和歌山市 吉村さち子

おっとりとした証が顔に出る
当然な事が意外と喜ばれ
お互いに急ぐ道ですゆずられぬ
こちよく酔わせてくれる美辞麗句
灰色の一週間はつらかった

和歌山県 村中悦男

元旦の日の丸まぶし二〇〇〇年
新世紀行方の知れぬ幕があく
長風呂を案じる妻の声を聞く
懸案の事解けてのむうまい酒
湯の華をかえて温泉めぐりする

京都市 高島啓子

し残した事が毎日ある暮し
おしゃべりと無口で馬が合っている
夫婦とも朝刊読むの長すぎる
二回目に行くとき大した店じやない
二人三脚妻は結び目解きたがる

京都府 前上英一

聞いて来た話とどこか違つてる
意地一つ捨てると周り見えてくる
了見のせまい話を聞く欠伸
糸屑に妻の紡いだ夢のあと
握手した温みの中にある謀反

綾部市 藤田芳郎

人溢れ物のあふれてみな孤独
薬とも毒とも瓶に書いてない
一打逆転妻のサインは待てばかり
どう見てもあんな一人の知恵やない
閉じ蓋も大分疲れてきたようだ

滋賀県 中宗明

不景気を乗り切る策が手間ぬるい
マイホーム記念の植樹背丈越す
病院の各科ジグザグ梯子する
言葉より指切りだけは信じたい
ギラギラと目を輝かせクジを引き

八王子市 井上京一郎

この顔に免じてと言う顔でなし
ガングロの娘に思い出すグッコちゃん
創刊に廃刊せわしない雑誌
あるときはペンも両刃の剣となり
かすり傷みたいに若い自己破産

静岡市 大村 正雄

新聞を読む度増えるカタカナ語

読みさしの本積み上げて除夜の鐘

おでんやで妙に気の合う人と会い

ピーポーの止った位置を噂する

帰省子に教えてもらう流行語

横浜市 平 達也

酷使したつけは古稀を過ぎてから

賢母より言われて見度いい女

外泊を許され吾が家の幸を知る

そろそろの散歩は杖とコルセット

もう一本箱に戻した自制心

横浜市 巖 田 かず枝

引越して来たのに宿にいる気分

絵心は無くても旅の美術館

嫌なことアハハと笑い飛ばしたい

愚痴こぼし自分の首をしめている

褒められたからには稽古さばれない

横浜市 芦 田 鈴 美

厚底の靴 階段を降りて来る

体調を整えてから検診へ

客人が来てとりあえず仲直り

じゃんけんに負けてこたつの腰をあげ

一泊の里のふとんは陽の匂い

横浜市 秋 元 和 可

お札状記念切手が連れて来る

異状なし以後は何でも美味しくて

二世代にわたった晴着七五三

娘に遺す私の彩が定まらず

暇人に重箱の隅つつかれる

横浜市 川 島 良 子

柳友がふえて雅号の年賀状

介護する牟寿に紅をさしてやり

マイペース強い女にされている

母健在わたしに帰る処がある

もう析ることしかできぬ癌転移

横浜市 山 梨 雅 子

体重計あればどこでも乗ってみる

好物を何時買ったのか冷蔵庫

聞き役に徹しストレス捨てさせる

浪人で就職難の外に居る

また一つ忘れ物して旅終る

尾張旭市 三 浦 き ぬ

七十歳若いですねと八十歳

念入りに梳るから薄くなり

赤い糸の先はあの世の亡夫の指

救援隊にご苦労様と合わせる手

浪費癖表彰状が貰えそう

来る年へ若くいようと髪染める
横浜市 近藤道子

冬を越す燃料とする皮下脂肪

いっぱしの画家の顔して美術館

柚子ひとつ風呂に浮かせて幸な夜

横浜市 伊藤ふみ

人生を愉しむ愛はエンドレス（満秋先生へ）

仕合せの芝居へ古稀も化粧する

お芝居へやっぱり和服着て行こう

祝杯のグラス嫉妬の泡あふれ

横浜市 金森徳三

地味葬でいい家には何も無い

昭和なら七十五年男

幸せはぐっすり眠ることに尽き

自動ドアほんにお前は素直過ぎ

横浜市 田中笑子

膝小僧泣いて笑って歳をとる

講釈もして鍋奉行かって出る

おむすびに憂さもしっかり握られる

指切りの温み残して子は寝息

横浜市 布山嘉信

文化の日発表会をはしごする

丹精に応えてくれた花の彩

散り際の美学山肌紅に染め

隠し味鍋と分け合う茶碗酒

新雪で心を洗う深呼吸

親切も素直に取れぬ見栄っ張り

ふるさとの山河に回る走馬灯

自惚れの例え話に出る欠伸

横浜市 長島亜希子

おはようと言って昼寝が受話器とる

我慢して我慢をさせて真珠婚

普段着の会へ着て行くものがない

老人を連れて小石を危ながり

横浜市 北沢街湖

次男坊ですと仲人繰り返す

付きのある内に買っとく宝くじ

辰ちゃんと呼ばれ想像つくお年

目の保養終えてデパート後にする

横浜市 鈴江純子

アルバムの十年前も同じ服

再会をあきらめさせる試着室

一病のお陰けんかをしなくなり

撮影に使われ村が活気づく

新潟県 高野不二

十円で何を願うかまだ拝む

転んだ子手出しする祖母しない母

年金が子の月給に追い越され

米余りなる程パンもうまいもの

札幌市 三浦 強 一

人前のキッスに老いの目のやり場
百円シヨップの衝動買いはたかが知れ
ここからは毒と知っても飲むお酒
リーダーの条件バカになれる人

青森県 福士 ト キ
嫁と娘にまだ頼られる御飯炊き
晩秋に一際映える干大根

大根も干せて冬眠近くなる
農に替えた指にピアノがなじまない

香川県 原 賢

多数決肩まで上げた掌に迷い
お人好し安請け合いに爪を噛む
ネクタイが取れ一本の矢を放つ
モシモシとお辞儀している妻であり

香川県 松村 輝夫

初詣で豊作祈る米余り
苦勞した話今頃馬鹿にされ
退院の母より父が嬉しそう
お茶出して無言でねだるお年玉

香川県 瀧井 勝

万一があるから思い断ち切れず
故郷の山は親父に似て温い
子を産まぬ僕いつまでも子供なり
嫁が来て厨の音が新しい

香川県 清川 玲子

吐息だけ残して帰る分譲地
角度チット変えてみるのも一計か
一本の薬にすがりに帰郷する
紅の色かえても夫は無関心

今治市 中村 好恵

一人旅ふと寄り道の途中下車
新しい鍋買う古希の台所
マニキュアの指でお米を研いでいる
リハビリに老人医療ありがたい

今治市 塩路 よしみ

髪型をかえて心もリフレッシュ
母の窓いつでも来なと言っている
ライバルの手のぬくもりにうろたえる
バーゲンのチラシに見事踊らされ

愛媛県 宮本 末子

淋しさに慣れて女の卵酒
リストラになった名刺はもう持てず
西国は詣で四国はまだ知らず
安いのが好きで大きなきゅうり買う

愛媛県 黒田 茂代

爪先が冷えて心が寒くなる
辛抱に一つ咲いてる冬のばら
海鳥にテトラポットの休憩所
写経してみても償い切れぬこと

高知県 百田 幸

若者に粘り欲しいと戦中派
モロヘイヤ オクラの粘りなじめない
上ばかり見て足元に気付かない
孫の代まで案ずるは止めとこう

高知県 近森 功

豊作と貧乏神が同居する
徘徊の付き添いをする万歩計
クラス会末座に未婚かしこまり
クラス会六十路の恋が実を結び

北九州市 岡田 幸生

新刊のサインに並ぶ紀伊国屋
雑兵の嘆きを知っているポトル
厨房に分担がある皿洗い
リストラの風に過労死するな子よ

福岡県 岩崎 和女

豊かさの中に不安な介護法
携帯に縛られている傘の中
聞き役になって一緒に出る涙
意地張って限界を知るひとり言

倉吉市 牧野 芳光

口開けて寝てる紛れもない親子
人間の言葉しばらく聞いてない
ずる休み通勤列車乗り過ごす
ドライフラワーもミイラも同じ色

倉吉市 大下 智子

お受験に母の祈りは通じない
誰のため咲くのか野菊美しい
一輪の花があるから温かい
寝る前に今日の元気に感謝する

鳥取市 谷岡 清子

目に見えぬ臨界怖い風が吹く
凡人も国愛するはひけとらぬ
ポツクリ寺で長生きを乞うおさい銭
お年玉子にもろてから孫にやる

鳥取県 竹森 富久江

月光り株の懺悔を包み込み
冬枯れの野に白い息はずんでる
吹雪いては人の絆を深くする
ひとひらの香が飛んできて岬春

鳥取県 西沖 彰雄

石に惚れ石道楽の名刺刷り
激流に石の戦う音がする
石友により見せる石隠す石
探石の成果の日記絵を添える

鳥取市 西尾 敬之介

癌と共 年越す手筈整える
白魚もワカサギもとれ地の冥利
吐く息に新漬けこうこの匂いさせ
赤札が不景気よそに客をよぶ

鳥取県 山下節子

念願の家は建てたが嫁がない
発芽した古代の米に命みる

泥沼の過去があるから頑張れる
自分史に消したい過去も少しある

鳥取県 鳥羽直市

敵しいが癌とふたりで生きてゆく
男料理慣れてそろそろ味が出る

自分史を書いて男の幕を引く
言い過ぎた心の音で眠れない

出雲市 伊藤玲子

柿すだれ夜なべの老母のまるい背な
ジングルベル兎のアンカー走り出す

良心を捨てた役人雇う国
忙しい私に人が用頼む

出雲市 梶ミツエ

はでな服七十坂で着てみよう
好きだから本音でしゃべるお友達

ばあちゃんの靴を揃える孫娘
鳥二羽木守柿まで皆たべた

松江市 銭山昌枝

続き柄まだ書く相手居てくれる
頭脳線とところどころが切れている

頭数足りなくなったクラス会
貸本は回し読みしてから返す

松江市 松浦登志子

カラコロと師走を走る不況風

二〇〇〇年まず燃やしたい体脂肪
セールスに説明をきくカタカナ語

元氣でる講座で知った笑い顔

鳥根県 福岡博利

百円で金槌もありネクタイも
梅千の湯割焼酎よく売れる

八時間しつかり寝たのにまた昼寝
子が去んでまず一服の渋いお茶

尼崎市 清水久美子

ネクタイのセンスがもてているらしい
相殺で切り抜けて来た夫婦愛

手を結ぶ互いが落ち目認め合い
からすの足跡から年齢を当てられる

尼崎市 軸丸勝巳

三億が怖くて買えぬ宝くじ
事件事故よけて生きてる十二月

新年を照らす電球入れ換える
診察券三枚連れて年を越す

尼崎市 尾宮弘治

車椅子の偶発陛下との握手
第九のリズム厨で口遊む

雨の日のひとりにテレビだけ喚く
厚底の靴で煙草はうちの孫

尼崎市 森 安 夢之助

低姿勢の挨拶うらがありそうだ
ありがとう孫からもろたお年玉
いいお人だが酒癖に女癖
人形と会話をしつつひとり膳

尼崎市 河 津 正 治

どの子にも夢がふくらむ子煩惱
検査結果待つ身に寒い神無月
善し悪しの区別を母は手厳しい
ルール説きすつきりさせる子の喧嘩

篠山市 西 山 八重子

あばたも笑くばなれど美人に程遠し
ほどほどの距離で小さな灯をともし
空青く職人さんのいい響き
後戻り出来ない朝の鏡見る

篠山市 谷 田 多美子

うさぎ年儲けられないままに除夜
肩書きがとれて稲刈る靴をはく
焼芋も蟹もおいしい十二月
レモンティーお砂糖抜きの愛想なし

川西市 田 中 喜 俊

美味いとして煮めほめ合う嫁姑
同居して嫁の腕前ほめたたえ
紅白も発表されて歳が増す
自画像に少し派手めの服を着せ

兵庫県 山 本 泰 子

一年の計画だけはちゃんと立て
中ボケで時々人の名を忘れ
百まではまだまだ間がある七十三
買物が好きな女の小旅行

兵庫県 倉 垣 恵 美

一周忌たたみ這う虫見ています
ぜんそくと言う診断を拝受する
この時間姑の愚痴聞くとときと定め
一呼吸置いて詫び言吞んでおく

和歌山市 上 地 忍

煮くずれるおじやがに貰う温い味
おせち料理老母に任してシヨッピング
絵心があればと思う山時雨
風邪引きのクシヤミに音符つけて見る

和歌山市 水 田 秀 男

七転八起しながら僕はまだ走る
進軍ラッパ今では金のために吹く
白紙撤回せねばならない原子力
日の丸で威嚇している街宣車

和歌山市 武 本 碧

幸せは人それぞれの満足度
味方にはなれぬが愚痴は聞いてやり
気短ですぐ細胞が熱くなる
ともすればサボル右脳に発破掛け

和歌山市 上地 登美代

ビポビポが走ると誰か泣いている
エレベーター鳴ると太った人を見る
占いの館 不安を口走る
没供養一番先に駆けつけな

和歌山県 坂東 和代

やはりよい表彰台の日の丸は
自分の晴着 割烹着縫うている
病名はお年ですなと内科外科
隠してもいつかはばれる袖の下

三重県 尾崎 勤

なぐさめは言えない至近距離にいる
ラーメンが好きです遠慮してません
寄せ植えの野趣も好みと手抜きする
地下街の出口詰まらず通り雨

京都市 三宅 満子

案じても仕方がないとただ祈る(息子骨折手術)
暖冬の師走野菜が育ちすぎ
改正案良い案だとは限らない
目が覚めてお肌しっとりウフフフ

大阪市 中村 叡子

ピカチュウが世界の子供魅了する
孫が来て童心になるシャボン玉
臨界の事故日本の大汚点
服装に合わないけれど楽な靴

大阪市 平井 露芳

休肝日一日増やし様子見る
えん歌にも不況の風が吹きつづく
半身浴ええと言うても寒いしな
活字離れ言うのに増えてる本屋さん

大阪市 榎本 舞夢

死ぬまでに道ならぬ恋するつもり
一流に交じって私磨いてる
美しい食器揃えて主婦たのし
梅だより届いて春の仕度する

大阪市 熊代 美智子

老いてなお一直線が好きな人
遮断機がおりるぞトンボあわてるな
年の暮れまた遺言をかきなおし
今日は今日 明日は明日ケセラセラ

大阪市 大川 道子

飽食の時代病だね拒食症
輪ゴム飛び必死にさがす鍋の中
イヤリング外してふつと軽い肩
泣き顔は母に見せない意地っ張り

堺市 梶本 哲平

妻旅に出てひとり身の不自由さ
一病を終生の友仲良うに
同じことまた言うてはる聞いてやる
年金のはがきわたくし生きてます

湯煙に仕事の鬼も恵比須顔
湯煙に童に戻る妻の幸
堺市 斎藤 さくら

ごめんねと素直に言えぬああ夫婦
ありがとうちよつと照れてる目が語る

堺市 見本 ちゃ子

カラフルな服でピエロの悲しい目

去ってから愛の深さを知った今

子と孫を思うて今朝もお灯明

孫元氣わたしベンチで一休み

堺市 田中 紫

寒い朝亡母を偲んで小豆がゆ

二歳児と指の動きで通じ合い

三世代喉競い合う日曜日

友の愚痴聞いて自分を慰める

八尾市 與田 明

金よりもほこりが溜まる共稼ぎ

使途不明赤字が嵩む年の暮れ

足の爪ぶちんと飛ばし睨まれる

痛い歯に舌がそろりとさわってる

八尾市 山本 至

好奇心強く道草ばかりする

夫婦げんか妻の涙で幕閉じる

おかげさまで返す言葉も年の功

無駄なもの神様つくる筈がない

街路樹も電飾まぶし眠られず
減量と言う難題とお正月
八尾市 中島 春江

添え書きに人柄しのお賀状です
仁王さま笑えばどんな顔かしら

羽曳野市 山本 たけし

袴を脱げば日溜り温かい

保証人拒み失う友ひとり

生き甲斐を求めて叩く趣味の門

落研に嵌り留年した息子

羽曳野市 安芸田 泰子

手を合わす時は神様信じきる

宅配便届き孤独が救われる

優しい目何で隠すかサングラス

植木屋のくしゃみが落ちる松の下

羽曳野市 森田 四三郎

地下出口痴漢の風が噴きあがる

介護掛金聞いた寝たきり起きあがり

県警が警察官を取り調べ

不況年ジャンボくじだけ夢くれる

高槻市 乙倉 武史

始めから巨人行く気の猿芝居

風邪気味と言うて欠席句わせる

四面楚歌セクハラ知事の嘆き節

明るさが取柄笑顔を決やさない

高槻市 生田 義一

七五三孫晴着着てVサイン
コンビニの地べたで茶髪弁当食べ
シルバーマーク付けパトカーを追越した
落葉焚く僧の背中に降るもみじ

高槻市 左右田 泰雄

白か黒しかネクタイ締めるときがない
踊り子のロマンを辿る伊豆の旅
フィナーレの余韻が胸にこだまする
大役を仰せつかったあぶら汗

吹田市 須磨 活恵

寒菊の芯の強さを学ばねば
作句する私が私であるために
悔しくて思いつ切りレモン丸かじり
無一物 親切だけはたとある

豊中市 江見 清

鍋の湯気まずい仲を和ませる
お茶会が済んで熟女は姦しい
環境の測定進み怖さ増す
家も身も補強修繕忙しい

泉佐野市 備後 三代子

行き合いて手を振り交わすこたつ舟
枕より浮かす聞く耳 目はとじて
クリスマスソング背にして厨事
好きな事好きなだけしてひと日暮れ

泉佐野市 稲葉 洋

本当に一年たってもう師走
除夜の鐘愚痴そこまでと鳴っている
回想の針は昭和を指している
衰えを認めながらも意地を張り

大阪狭山市 矢野 梓

そぐわないブランド品で身を飾り
清め塩盛って風水信じ切り
一列車ずらして座る朝の駅
言い勝って冷たい風が吹き抜ける

枚方市 二宮 紫鳳

温泉で今年の憂さを流す旅
肩書きの鎧をぬいで風邪をひき
デュエットで夫婦げんかの仲直り
仕事にも慣れたか息子でかく見え

藤井寺市 岸本 寿代

気配りのおかみ大好き足が向く
年とれば賢い子より優しい子
吹きながら温泉粥をすすする宿
病院のベッドで雲とにらめっこ

河内長野市 水谷 正子

だんだんと無欲になって好々爺
マドンナの消息謎の儘がよい
頑張ろう神戸を風化させぬよう
すくい取りしやもじから欲落ちてゆく

大阪市 榎 本 日 出

カーナビが教えてくれるカニの宿

補聴器が大事な話持ち帰り

反抗期赤信号が見えてない

大阪市 伊 藤 博 仁

本紙より妻折り込みに目を通し

櫛の歯の欠けていくよう住所録

嬰兒のニコニコに酔う若い母

大阪市 尾 崎 黄 紅

ヨシモトの景気笑いが止まらない

お人好しでして雑学博士です

さよならは後ろ姿の見えるまで

大阪市 小 泉 ひさ乃

ありがとこの涙残して孫嫁ぐ

姑を介護している娘を思い

友が逝き取り残されてゆく不安

吹田市 穴 吹 尚 士

三億は使い切れぬが買ってみる

味だけが自慢の店で無愛想

見てくれは悪いが味は家伝です

高槻市 西 谷 治三郎

国鉄の昔のトンネル強かった

飛び起きてゴミ捨てに行く仕事あり

おばさんの昼食割勘小銭いり

東大阪市 今 岡 貞 人

カルテ開示医療進歩の一步かも

満期日に金の笑顔もぎこちない

年金の行く末思う来世紀

八尾市 平 川 幸 枝

街の灯にさびしがりやが生き易し

マネキンの美しい嘘銀座街

ちよつと目を逸らせば雲のいい形

八尾市 鷺 見 章

菊活けてリハビリ室は静かなり

平行棒二三歩いて息が切れ

看護婦の手にのる柿は秋の色

河内長野市 大 西 文 次

謎を解く決め手となった靴の砂

欲張った願いを絵馬に箇条書

終点の駅で待ってる忘れ物

河内長野市 杉 谷 カズエ

重い綱すがってゆする神の鈴

思ひ出が一ぱいタルト有三時

耳遠い人がしつかり話する

河内長野市 木 太 久 正 一

アルバムで古都の紅葉を反芻し

豚汁の旨さ一入もう師走

十二月八日あの日中学四年生

羽曳野市 川 田 晋
シーズンになると律義に風邪をひく

単身の万年床に綿はこり
定年後妻に奪られた主導権

岸和田市 村 垣 鹿太郎

仲人の一言多くもつれだし

老夫婦の夕餉見ている冬の蠅

靴中妻子の知らぬ苦労秘め

富田林市 山 原 昭 水

わが家には地酒博士とそば名人

秀吉も呑んだ天野酒呑んでいる

葬式で儲け話を聞いてくる

泉佐野市 大 工 静 子

たった一人子で十人にふえた今

医者薬と駄羅助仲よくなあれ

故里は絶え生き残るわれ一人

大阪府 澤 田 和 重

パソコンに叱られている老いの指

じいちゃんの子守はらはらさせられる

ししのモデルだったならなれる妻

鳥取市 山 口 水 楊

羽搏く日を夢みて羽を休めない

髪を切る男はわけを聞きたがる

言わいでもしぐさが年を語りだす

鳥取市 河 田 のり代
一言に波立たねばと気を遣う

今日の無事沈む夕日にありがとう

ありがとう中々言わぬ子に育つ

鳥取市 山 本 益 子

豪傑笑い五臓六腑が浄化する

花言葉贈る目安に役立てる

真つ先に爪の色診る主治医持つ

米子市 猪 森 スミエ

ラッキョウの花だと知って二度惚れる

花鉢が緊急避難霜霜注意

金婚の味しみじみと赤い碗

鳥取県 橋 谷 静 江

甘えられ甘えて暮すなごやかさ

甘やかしすぎて言うこと聞かぬ猫

出来ないとわかってからの神頼み

鳥取県 藤 山 弘 子

快晴へ洗濯意欲沸いてくる

朝シャンはしても食事はせず出かけ

赤飯を炊いて祝いの華をそえ

鳥取県 澤 裕 子

役どころ悟りピエロを演じきる

はつきりと話して解けたわだかまり

手さぐりの中で掴んだ生きる知恵

鳥取県 平井栄翁

老いの身が介護保険の波に揺れ
大波をさざ波にする老いの知恵
定まらぬ介護保険に老いの愚痴

鳥取県 山岡久枝

包まれて金婚近い年になる
ふと思う命何時まであるだろう
どんぐりが肩よせ合って冬を越す

姫路市 服部一典

戻ること出来ぬ人生ケセラセラ
物憂げに少し疲れた君が好き
老い一人酒も肴もチン頼り

姫路市 北条てる代

泣きに來て泣かされている里帰り
不揃いのりんごにもある自己主張
遠い日へ心遊ばす里の駅

姫路市 勝間タツエ

長寿より健康祈る初詣で
野の花は嘆きを知らずピンク色
さまざまな風にあたって来た余生

尼崎市 内田美也子

紅葉を愛でる暇ないバスの旅
息子等に夫の影追う七回忌
独りでもやはり忙しい年のくれ

神戸市 木村忠義

妻とないのにママさんと腕を組み
パトロールみたいに行く人が増え
妻と歩くのは投票の時ぐらい

兵庫県 黒崎美紗子

ルーズソックス可愛い顔であぐらかき
デュエットで照れるしぐさの恋の唄
二次会の予定コースへついて行く

兵庫県 徳平毬子

笑み浮かべ鬼のかくらん咳をする
暖冬のニュースすぐ後寒波来る
クリスマスケーキ選びの親の群れ

出雲市 岡あきら

コンピューターこの世が暗くなる話
会葬の列でひそひそ嫁話
大晦日去年と同じ箸二膳

出雲市 川島和歌子

診察に呼ばれる前に深呼吸
ぼろくそに言ってもやはり憎めない
風に耳やっぱり洩れている内緒

松江市 山根邦代

休日のリズム静かに明け暮れる
ふるさととは友の笑顔が待っている
ショッピングお久し振りの顔に会う

松江市 小川 注 湖

茶柱に郵便受けを覗き行く

編棒の先を急かせる木枯しだ

日めくりの一枚眺めそばを食う

島根県 多々納 テル子

老化した足庇いつつ正座する

一角にネギ植えている花畠

空き部屋をアトリエにして夫の趣味

島根県 毛利 幸

顔が利く言われ皆から所望され

ネタ眺め決めかねている回り寿司

初孫を奪い合ってる老夫婦

倉敷市 森 本文子

秋深し生きた証のゆず植える

呼び掛けに答えて豆の蔓のびる

けむたいが大黒柱まだ元気

倉敷市 家 守 政 子

二千年の正月風の子がいらない

湯上がりになんと伸ばした初鏡

温室でファミコン遊び現代っ子

岡山県 国 米 きくゑ

人生の節目節目にかける夢

お袋の味を真空パックする

城守る母いきいきと割烹着

宇部市 高山 清子

歯に衣着せぬ親友居て恙なし

幼友 癖字の賀状安堵する

人生に余生等なし今も花

高知県 桑 名 孝 雄

賽銭で神は差別をしない筈

信心は二の次だった紅葉狩り

生れつきですよと医者には素っ気ない

鳴門市 八 木 芳 水

その先は意味深長な咳ばらい

嘘で出す涙も女用意する

在宅で介護が出来るうちが花

今治市 野 村 清 美

目立ちたがりやのイヤリング揺れている

いずれ要ると手摺りをつけた子に感謝

偏屈で味が自慢のたこ焼き屋

唐津市 岩 崎 實

日曜のひげそりだけは休もうか

老夫婦わしらの時代おわったね

歌い手の手のひらみんなを包み込む

和歌山市 土 屋 起世子

戦中を生きた知恵です飢えさせぬ

来世紀金婚式が待っている

低金利のお詫びに届くカレンダー

和歌山市 福 重 美 子

背伸びして世間の風も知る若さ

Uターン先祖の美田守り抜く

除草剤恐る恐るに新芽出す

和歌山県 中 村 君 枝

暗黙のルールがあつて家平和

間の悪さ夫の頓智にいやされる

つるし柿この掌に幸を受け止める

京都市 高 村 吉之助

幸せを掴みそこねた軍手干す

上向いて歩こうリストラ気にしない

介護法に包まれ新世紀を覗く

奈良市 上 村 季世恵

御馳走を食べてエステに通つて

登校の鞆携帯ぶら提げて

風邪引きにうどんの上の刻みねぎ

横浜市 生 坂 サト子

先生と相性合うが少し悪

無理をした賢母の皮を子が剥がす

夫に内緒臨時小遣い共犯者

横浜市 保 田 絹 子

即売の野菜に紅葉狩り忘れ

気にせんと言いつつ選ぶ大安日

低迷の打者麩りホームラン

横浜市 福 田 由美子

据え置いた価格に箱はSサイズ

アスファルト積もった枯葉ゴミと化す

ひとことの電話でかよう間柄

東京都 吉 田 土 風

町内の煩型では一寸知れ

さりげない親切をして通り過ぎ

挨拶の中にも気品感じられ

東京都 清 原 悦 子

スケッチにおいしい空気まで書けず

アイラブユー英語で言えば気も楽に

手作りのクッキー甘さをおさえて

静岡市 中 西 雅

かえでの黄賞でる間もなく庭を埋め

討入りの後は賀状の宛名書き

もみじ狩りテレビでがまんしています

浜松市 岡 本 ま ち

食文化昔の知恵に最敬礼

引き時を逃して足をすくわれる

やがて来る老いをすんなり受けとめる

日立市 加 藤 権 悟

団子屋の元祖茶髪の子が仕切り

しっかりと没句を溜めているノート

父さんの働くめしが噴いている

川西市 西内朋月
弁解へ眼鏡を拭いて取り合わず

肩書きがとれてネクタイしなくなり

伊丹市 慳谷郁子

棚田さえ生き方変えてハーブ園

宴会でリードする癖期待され

京都市 勝山美千代

二度童子テープのような独り言

七十路派手を着てます娘の下がり

奈良市 田中賢治

階段を元気に走る遅刻組

ポーズする南大門の鹿可愛

橿原市 西本保夫

お歳暮は夜の八時もやってくる

町会費留守番男金持たず

和歌山市 前岡健三郎

別荘も無人の儘で冬支度

楽しみが進む余白の一ページ

和歌山市 和田美寿子

観月に屋台酒呑む二人づれ

主人よりせめて一年長生きを

田辺市 大峠可動

二千年早速波浪注意報

吊し柿身に一片の闇を持ち

二次会で終りと幹事釘をさす
妹だけ美人に生んだ母も逝き

米子市 小塩智加恵

おし鳥で湯の町おいで皆なごむ

鳥取市 岡田信恵

ジグザグで踊る手足が定まらず

もしも総理庶民とつくに冷めてます

鳥取市 中村金祥

少子化へ三兄弟が光り出す

くすり漬老いのくらしも楽じやない

鳥取市 宮脇道子

淋しさと自由をもらい今一人

難しい質問をして試してる

鳥取市 夏目健一

潮時をわきまえながら波に乗る

真実は小説よりもややこしい

鳥取市 録沢風花

エルニーニョ四季の流れが乱れだす

年らしく老けて男の顔になる

鳥取市 田村邦昭

縄のれん冷やにすっかり愚痴を言い

初霜にしっこかけかけ犬駈ける

鳥取県 加藤公子

落胆を味わってなお宝くじ

頑固さを控え若さと暮す日々 英霊と民の犠牲の上に基地	鳥取県 高尾 京
職に就き見違える程男前 アクセント程度に赤い衿を出す	鳥取県 河本 照子
髪染めてなんだか少し若く見え セーターで行くか背広かまだ迷い	島根県 菅田 かつ子
お地藏さんまた沢山の花もらい 整理する亡夫の下着捨てられず	島根県 松本 聖子
脳味噌が減ったか体重軽くなり 子や孫が去んでリズムを取り戻し	島根県 武島 ちよえ
台風に温もり貰う子の電話 若い気で少しルーズな服えらぶ	出雲市 加藤 スズコ
川柳が取り持つ縁で生きられる 旅人と嘘の指切りして別れ	宇部市 中田 忠夫
食べ頃は指が教える吊し柿 初対面わたしの素顔見てもらう	愛媛県 山之内 八重美

ガムテープ備えてドロボー捉まえる 目に余る神の使いの金集め	高知市 澤村 哲史
取り立てにノルマ厳しい落し前 風邪予防ワクチン不足嗽する	千葉県 大川 晩翠
衣食住豊かになつて壁が出来 だんまりの武器で反抗続けてる	静岡市 増田 扶美
浮草も今旅終えて母の海 おでん屋の湯気の向こうに知った顔	東京都 井上 つよし
うっかりと金を見せたら使い込む 木つつきの音に平和が響く過疎	岸和田市 亀井 皎月
最後まで義理でつき合う苦い酒 爪に火を点し二人で冬ごもり	岸和田市 木村 正剛
大丈夫強運の星持つてはる ああうれし今夜独りじやない雑魚寝	岸和田市 宮野 みつ江
屋根ふきを見てるだけでも恐怖症 借金を山程かかえポツクリ死	八尾市 高橋 明子

八尾市 井 尻 民 子

たのまれてシャッターを押す古都の秋

ばらばらの風に積木が崩れだす

堺 市 丹 後 屋 肇

鮎跳ねて五重の塔が揺れ止まず

通勤路十人十色歩行癖

松原市 和 気 慶 一

高利貸物は言いよう商工ローン

足裏で取りも取ったり六百億

羽曳野市 永 田 章 司

暦には自然に生きる人の知恵

世話をしたはずが相手に煙たがれ

門真市 矢 阪 英 雄

老いと言う通行手形懷に

二千年問題にして利を稼ぐ

寝屋川市 岡 本 勲

メリットがあると思うからゴマをする

年金がお元気ですかとやってくる

枚方市 大 昇 隆 広

沢登り本当を見に源流へ

裏方は賛美無くても一途な目

高槻市 江 原 秀 夫

神様の筋書きなのかこの人生

金婚旅行何はともあれ二人きり

高槻市 執 行 稲 子

パースデーケーキ歳まで書いてある

カラス追うペットボトルの風車

守口市 井 上 桂

不景気に辰の年とは縁起よし

内申書公開になり嘘書けず

大阪市 中 井 正 秀

今の蚊は一寸吸ってはすぐ逃げる

年金へ儲け話がよくかかる

大阪市 三 浦 千 津 子

笑わして涙沈めているピエロ

満ち足りた日の土踏まず回り道

大阪市 筒 島 文 枝

世話になり世話になりつつ年重ね

初夢で懐かし人に逢えるかも

川 柳 塔 (つづき)

熊本県 岩 切 康 子

運勢の百歳までを占われ

菜の蝶を捕え花へ移したり

過去捨てて羽ばたく背なに応援し

早朝に枯木の整理する焚火

気にまかせ恩ある方の墓参り

愛染帖

波多野五楽庵選

人間のからみの中のヤジロベ

素っ気ない答の中に人が棲む

あきる野市

佐藤 季穎

煮くずれぬうちに生い立ち話そうか

ひきだしを半分あけて暮れの部屋

和歌山市

上地登美代

赤い靴履くと元気になる私

その先を聴くと傷口疼き出す

海南市

三宅 保州

諷めてくれる味方がありますか

本棚で背伸びしている本もある

岡山市

大森 純子

偏差値と平衡しない知恵袋

ほどほどを覚え胃ぐすり減りました

熊本県

高野 宵草

満腹をするほど薬飲みました

生まれ来てたまたも添いたい人とお

米子市

政岡日枝子

人間を捨てたか音のない声だ

神サマの背なで反抗してる足

倉吉市

野口 節子

俄か雨スーブの冷めぬ距離に降る

大阪市

本間満津子

ここまでおいでそのとききこえるなら

和歌山市

福井 桂香

髪に手を添えておんなの絵を降らす

鳥取県

土橋はるお

言い過ぎた口をポカンと開けたまま

堺市

志田 千代

芋大根とろ火の好きな歳になる

藍瓶にとっぷりつけてみたい人

西宮市

奥田みつ子

嘘をつく大人になってきたんだね

横濱市

川島 良子

各論の反対ゆえの鬼ごっこ

弘前市

相馬 銀波

亡き人の葉書一枚携える

鳥取県

西原 艶子

傘の雪妻と言う字を語らじ

羽曳野市

吉川 寿美

北風に哭く背の虫と海に行こ

弘前市

蒔苗 果林

グロテスクに砂漠の花は身を守り

堺市

小西 小雪

パンの耳落して疼くものがある

岸和田市

宮野みつ江

コンビニへ天気予報を買いに行く

和歌山市

川上 大輪

未だお逢いした事のない倦怠期

堺市

和田つづや

抽象画 私の死後の闇を描く

三重県

佐々木森哉

木綿豆腐のうまさかわかる歳になり

尼崎市

春城武庫坊

奥の手がありライバルを泳がせる

札幌市

三浦 強一

掴めそうな位置で幸せ届かない

和歌山市

吉村さち子

鍋底を出ない粗食という根っ子

鳥取市

上田 宣子

富田林市

池

森子

古雑巾絞ると知恵がこぼれ落ち

鱗はもうポロポロポロと無に還る

冬の隣でドライフラワーになった

和歌山市

古久保和子

あっちむいてホイみんなひとりで立ち上がる

シャボン玉はじけ私の現在地

大和高田市

鍛原 千里

冬の野に晒す私のしゃれこつべ

幕引きの下手な男がよく喋る

横濱市

菱田 満秋

抜くことを回転木馬まだ知らず

秀才といえども運がつきまとい

弘前市

斉藤 晶

木枯しに木の葉も僕も反り返り

そして冬墨絵が似合う北の画紙

岡山県

小林 妻子

風の便りは昨日と同じ脈搏よ

長い夫婦にテレビドラマが物足らず

大阪市

一本 勇太

卵割る罪の意識のないままに
弘前市 高橋 岳水

かごめの輪こっそり抜けて梅の下
岡山県 土居ひでの

相談して川の広さを知りました
大阪市 神夏磯典子

溜め息と一緒に福が洩れていく
横浜市 巖田かず枝

目の届く距離だししばらく見ていよう
島根県 伊藤 寿美

告げられぬ想い伏せ字で書く手紙
箕面市 出口セツ子

ふところが寒くて風邪をひきそう
寝屋川市 岸野あやめ

カルシウム不足の鬼の角が折れ
京都市 都倉 求芽

みんな来い噂ばなしの花咲かそ
尾崎県 田辺 鹿太

横の空席選ばれぬのは私
三重県 尾崎 勤

おんなの喪男結びに閉じこめる
大阪府 榎山 隆盛

空っぽの頭に帽子など要らぬ
愛知県 早川 盛夫

落ちこんでいるのに誰も茶をくれぬ
鳥取県 橋本多哥由

合掌札拝枯淡の色にほど遠し
綾部市 藤田 芳郎

罪ひとつ拾ってもちろた恩がある
富田林市 中井 アキ

頭数そろつて逆巻く波となる
米子市 野坂 なみ

跳び越える川に未練は残さな
米子市 木村富美子

ハードルの数だけ長生き出来そう
岡山県 矢内寿恵子

ライバルが昼寝している起きねば
富田林市 大橋 鐘造

その山が強く後ろ向きになる
鳥取県 西川 和子

燕雀でよろしい青春知つてます
三田市 北野 哲男

人生の帳尻合わぬままに暮れ
鳥取市 植田 一京

雪ふわふわ津軽の仏のみこまれ
弘前市 一戸 ツネ

ちぐはぐの記憶つないで人違い
岸和田市 井齋 一齋

病窓という一枠に春を待つ
泉佐野市 稲葉 洋

影ふみの影がなくなるまで歩く
米子市 白根 ふみ

君のことと割り切れる時切れぬ時
枚方市 海老池 洋

梅の香へ風のジョークは許せない
和歌山県 中後 清史

どてら着て趣味はなんですかと聞かれ
今治市 越智 一水

人間の足音がする怖い道
弘前市 富士 慕情

うそを言う女が好きでたまらない
松原市 小池しげお

責任のない毒舌が道を開け
鳴戸市 八木 芳水

肝臓の悲鳴コップに届かない
日立市 加藤 権悟

晩年を染める明るい色を選ぶ
出雲市 園山多賀子

斜めから見てもあなたの強い眉
大宮市 新井 朋子

水いろの卵を抱いているわたし
弘前市 佐治千加子

落葉同士カサコソ終の話など
高槻市 乙倉 武史

ブライドを千切りにする宮仕え
香川県 川崎ひかり

虫時雨秋の灯は佗びしくて
米子市 茂理 高代

春を待つ病妻へ真紅のシクラメン
大宮市 八田 敏

ざんげまで透視する気のレントゲン
東京都 後藤 早智

手を入れた植木が枯れてゆく寒さ
大阪市 稲本 凡子

とりあえず夫の指示に従おう
鳥取市 坂田和歌子

割切つて老いを生き抜く秋の風
大阪市 北 勝美

常識の間でいつくしむ十指
京都府 稲葉 冬葉

高知県 桑名 孝雄
足腰を騙し世紀を越して来た

弘前市 中山 雅城

江ノ島の木橋渡った頃の夏

羽曳野市 酒井 一壺

予約して行きたいほどの店でない

大阪市 三浦千津子

かじかんだ手に甘酒のおもてなし

美面市 椎江 清芳

千の手に千の約束ある仏

寝屋川市 太田とし子

キラリキラキラ ツリーに恋を光らせる

鳥取市 岸本 孝子

カラフルな喜怒哀楽をつめた城

和歌山市 青枝 鉄治

口下手の書いたコラムが的を射る

鳥取県 乾 喜与志

成仏をせよとサンマの煙吸う

鳥取市 武本 碧

反省の振りなら猿も巧く出来

大阪市 榎本 路児

絵の向こう何か蠢くものがある

鳥取市 徳田ひろこ

携帯の根っこにされているらしい

鳥取県 土橋 睦子

波しぶき受けて自分を取り戻す

倉吉市 淡路ゆり子

トンネルを抜けて大きな深呼吸

八尾市 高橋 夕花

女三人美味しい話をスタートに

今治市 野村 京子
接点遠く女の秋が深まりぬ

宇部市 平田 実男

酔っているもんかと呂律回らない

唐津市 山門 幸夫

初めての三途の川の旅仕度

愛媛県 中居 善信

テープ切るまでは油断のならぬ人

唐津市 宗 水笑

お歳暮に他所の指紋が付いている

鳥取市 録沢 風花

ひとつ波越えたら次の波に会う

弘前市 岡本 花匠

寂光の一輪挿しに掌を合わす

横浜市 田中 笑子

霜降りの肉が秤をくるわせる

青森県 西谷 大吾

網渡りが下手で象の足洗う

今治市 野村 清美

さざ波に心の揺れを見ぬかれる

海田市 谷口 義男

正論を吐けば五月蠅い奴にされ

横浜市 山梨 雅子

旧姓を呼ばれ故郷の温かみ

鳥取市 夏目 健一

ためらいの足がはつきり北を向く

堺市 河内 月子

仲間割れしたのは金のことらしい

富田林市 藤田 泰子

先読んで自給自足の準備など

寝屋川市 堀江 光子
リストラを決めたトップも消えて行き

寝屋川市 江口 度

一直線の恋にフェイントかけられる

大阪市 板東 倫子

淋しくてやたら握手をする男

西宮市 門谷たず子

不器用で男結びがまだ解けぬ

大阪市 小林 周信

かばかりの柿を吊して母偲ぶ

黒石市 相馬 一花

包装紙みたいに美女は隙がない

堺市 桜沢 千世

死語になり唐変木が生きている

倉敷市 小野 克枝

物指しの違う夫婦でにらめっこ

八尾市 高杉 千歩

正直な鏡が化粧やめなはれ

鳥取県 林 露杖

歓声は高く慟哭囁々と

横浜市 金森 徳三

中立で居るとするさい右左

横浜市 清水 潮華

歯に衣着せて禍根が残される

藤井寺市 高田美代子

とんがったままでは暮れぬ仲直り

枚方市 寺川 弘一

悪いけど君より酒を愛してる

鳥取県 田村きみ子

とりあえず腰巾着になって見る

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 1月号から

岩崎 みさ江

花一輪百のドラマを抱いて生き

今岡 貞人

野に咲く花、温室の花、目立たない花、華やかな花それぞれにある出会い。願わくば、幸せなドラマでありますように。

方言が乗るふる里はもう近い

軸丸 勝巳

懐かしい方言が聞え出して、窓外はいつも変らぬふる里への景色。各駅停車ならではを思わせる胸温まる句です。

リストラの風ぶらんこを揺すつてる

上地 登美代

厳しいリストラの風当りに、ふと通りかかった遊園地のブランコに腰を掛けて思案しているお父さんの姿か。

陽当りの良い縁側で物忘れ

田中 喜俊

きつといねむりでもなさったのでは？

田舎道渡るカマキリ恙なく

生田 義一

かまきりがぼくの話をしつと聞き

梶本 哲平

決して美しくも好ましくもないカマキリを詠んだ句。きつと優しい心の持主なのは。赤い糸結びなおして秋がゆく

熊代 美智子

うっかり緩ませてしまった赤い糸。ようやく結び直し、ほつとして辺りを見れば、もつ秋はさよならの佇まい。女らしい句です。

北の窓だつて月降る星も降る

武本 碧

胸を張って頑張っていれば、そのうち幸せが降ってくるかも。宇宙の普遍性を信じて、この家の喜怒哀楽を知る扉

澤 裕子

傍目には平和そのものの家庭にもきつと有るさまたまなドラマ。怒った時は「バタン」、午前様はそつと。嬉しさ哀しさ、扉はみんな知っています。

どの色にも染まりはしない菊の白

塩路 よしみ

競い合う色の引き立て役をこなしながら、凜として白を貫いている菊の姿が目に見えるようです。そう言う人に私もなりたいたい。

この椅子に座るといつも眠くなる

見本 ちや子

貴女もそうでしたか。実を言うと私も決して眠くなる椅子があるのです。どんな椅子かこれは秘密にしておきましょう。お互いに。寂しさと気楽さ同じ胸に住む

辻川 咲

今の境遇の中で、しみじみと感じていらっしやる感慨でしょう。賑やか||気苦労もどんなものでしょうか。与えられた境遇を精いっぱい生きるしかないようです。

よく書けた辞表で破るのが惜しい

尾宮 弘治

思わず笑ってしまいました。辞表の運命が気になります。まさか額に入れて飾ってあるのではないでしょうね。

廃船になつても海に首向ける

牧野 芳光

現役を退いて、きつぱり諦めてはいるものの、時には心が疼く日もある。そんな男の後ろ姿を思わせる句です。

骨までも愛されたいが粗糲症

坂東 和代

熨斗袋すこし吐息も入れておく

瀧井 勝

前二句、微笑笑を誘われました。

尚香のむ

宮西弥生選

チリメンジャコたつぷり貰う安堵感
吸うて吐くただそれだけの世に疲れ
ひらがなの姿のままで老いたしと
百円屋両手に夢を買いました
ほとけとの約束があるお仏飯
玉葱を晒し味方につけておく
油断の跡がみえるシクラメンの香り
命惜しまだまだ守るものがある
癒やしの曲みんな疲れているんだね
人よりも一つ多目に泣いた秋
ファイナレは薔薇一〇〇本と眠りたし
お金はないが千両万両の実があるよ
止り木の上で足踏みばかりする
叙熱から絆ぞろぞろ増えてくる
まわりくどい春だ手がかじかんでいる
捨てても捨てても湧いてくる玩具
四角四面の男にタコヤキ食べさそう
平穩に生命線が続いてる

貝塚市 池田寿美子
大和高田市 鍛原 千里
岡山県 矢内寿恵子
羽曳野市 徳山みつこ
西宮市 門谷たず子
和歌山市 川上 富湖
和歌山市 楠見 章子
吹田市 山本希久子
西宮市 奥田みつ子
藤井寺市 太田扶美代
富田林市 池 森子
熊本市 永田 俊子
倉敷市 小野 克枝
和歌山市 福本 英子
藤井寺市 高田美代子
米子市 政岡日枝子
八尾市 宮崎シマ子
芦屋市 黒田 能子

青春の鐘鳴らしつづけている余生
神経の痛みは誰も信じない
2000年大事な荷物積み残す
易の灯にこころ動いた旅の街
カジュアルに着たい私の彩がある
長いものにまかれていよう冬ごもり
イヤリング息子のお古借りていく
すんなりと息子の旗へついてゆく
占いが好きで魚座を拾い読み
不器用が剥いたリングの涙見る
明日の絵は誰も分からぬ白い画布
天と地の神は男と女かも
エプロンが似合う男にしてしまい
ひび割れて末梢神経こ枯しに
パンパンと叩きお太鼓出来上がり
賑やかな家で畳がすり切れる
二千年省略などはして生きぬ
気のあかん男が植える花の苗
すすきの穂ごめんさいが言えそうだ
謎解きをすれば傷つくのは私
わたしにわたしが銃口向けるとき
仕事せよせよ時計が打っている
かごめの輪お寺の鐘に散って行く
怖がらぬ鳩に豆やる花の駅
迷わずにおんなを捨てた母の道

八尾市 高橋 夕花
和歌山市 上地 忍
和歌山市 福井 桂香
鳥取県 岩崎みさ江
出雲市 園山多賀子
寝屋川市 籠島 恵子
寝屋川市 森 茜
今治市 塩路よしみ
八尾市 高杉 千歩
大阪市 川久保睦子
和歌山市 武本 碧
鳥取市 坂田和歌子
今治市 野村 京子
米子市 白根 ふみ
寝屋川市 平松かすみ
和泉市 中川 楓
鳥取県 さえきやえ
寝屋川市 岸野あやめ
横浜市 芦田 鈴美
大阪市 神夏磯典子
鳥取県 吉川 寿美
鳥取市 石谷美恵子
鳥取市 録沢 風花
米子市 林 瑞枝
香芝市 大内 朝子

弔辞ほど皆惜しんでいない人
秋茄子を嫁にもすすめ晴れ続く
何時の間に釦一つが取れていた
赤を着て年寄りくさいなど言われ
打たれない釦で毒にもくすりに
不整脈少し調子に乗りすぎた
ぬくもりの伝わる飯にありついた
似合ぬと自分できめている帽子
二〇〇〇年はどの辺だろう生命線
修復のきかぬ言葉に負の炎
ふと母の顔に戻して五目めし
姑様と呼ばれ嬉しい筈なのに
アルバムの子等は身勝手には見え
息切れのしない程度に飛んでいる
人間にもある読み捨ての週刊誌
靴底に夫の苦勞かいま見る
待つと書く指から彼へ血が通う
波立てるのも波を静めるのもわたし
良心の袋の底が抜けている
活きのよい刺身を選ぶ介護の日
今日のノラに幕を下ろして急ぎ足
ジャガールの絵から零れてくる飛沫
外堀も内堀も持つ妻の座よ
鈴鳴らし大師と連れの一人旅
切り抜きを溜めてわたしの知恵袋

寝屋川市 坂上 高栄
横浜市 田中 笑子
今治市 野村 清美
横浜市 山梨 雅子
和歌山市 吉村さち子
富田林市 藤田 泰子
倉吉市 米田 幸子
尼崎市 春城 年代
大阪市 板東 倫子
八尾市 井尻 民子
西宮市 牧渕富喜子
横浜市 保田 絹子
八王子市 播本 充子
鳥取県 土橋 睦子
鳥取市 長浜 澄子
尼崎市 北村 賢子
東大阪市 北村 賢子
米子市 鷺見 正子
八尾市 村上ミツ子
大阪府 米澤 俣子
横浜市 川島 良子
西宮市 西口いわゑ
和歌山市 榎原 公子
東大阪市 田中美弥子
八尾市 生嶋ますみ
和歌山市 桜井 千秀

プロセスの涙を知っている枕
イエスノーはつきりすれば角が立つ
この場では笑みを返して納めよう
長男の嫁で先祖とくらす母
机がきしみ疑い深い耳になる
横向いて歩く蟹にもわけがある
平安の雅を偲ぶ紅葉狩
大海の夢がせつない水溜まり
献立に迷ったあげく出前とる
太陽と母に無償の愛もらう
答などいらぬ歩幅が合うなれば

富田林市 中井 アキ
大阪市 津守 柳伸
鳥取県 西原 艶子
堺市 河内 月子
松江市 川本 畔
和歌山市 上地登美代
伊丹市 樫谷 郁子
愛媛県 黒田 茂代
川崎市 和泉あかり
鳥取市 植田 一京
岡山県 山本 玉恵

寿美子さんの句―生きてゆく私達のまわりに、うたい文句として健康食品の名前が躍り出ている。そして迷い惑わされている。作者は昔から「チリメンジャコ」が健康食品の原点で何よりもこれであると信じていられる。そして何よりも「チリメンジャコたつぷり」がとてもよく効いている。そして「たつぷり」と「安堵感」これ以上の幸福はないと。千里さんの句―ユーモアで、千里さんらしい句。「吸うて吐くただそれだけ」で彼女をここまで疲れさすのは何だろう。頑張つて、川柳塔社のためによろしくね。寿恵子さんの句―「ひらがなの姿のままで」これは非常に老後はむずかしい。老いてゆく姿を想像してまでさかではないが「ひらがな」は角のとれた、芯を表わす姿ではないかと思う。本当にむずかしい。みつこさんの句―町の百円屋さんがスーパ―やデパートまで進出。そして主婦たちのたまり場に発展で大ファイバーであると聞く。年商も億の桁が下らないという。そこで「両手に夢」とは、何と可愛い限りで、昨今の世相をおもしろおかしく詠んだ句。

梅

鴨谷瑠美子選



旧友と約束がある梅こよみ
 苔むした古梅風格老父に似る
 梅咲いて母の小窓が少し開く
 不揃いの梅でも母が漬けたもの
 梅の木よ禁酒するんでなかったなあ
 梅どころ梅にうるさい人がいる
 裏庭に一本梅の木を植える
 太宰府の梅に貰った書心の
 梅林に春の序曲が鳴りだした
 梅林を訪う若人ももの静か
 やさしさの色で咲いてる白い梅
 何となく許せる人と梅を見に
 雪国を発ち南国の梅に酔い
 越冬の梅の蕾は芯を抱く
 梅いちりん古い女を立てとおす
 梅におう坂で手を貸す車椅子
 年金へメニユーは梅と決めている
 盆梅を替めて実はと言う無心
 梅干しを顔中シワにして食べる
 梅咲いたあとは合格待つ桜
 絵馬ゆれる寒風に梅咲き始め
 また歳を重ねて賞でる梅の花

陶美代子

壽美子 寒梅に生きたる強さを教えられ
 哲子 紅梅の蕾に惚れて鉢を買
 保州 熱燗のポットを提げて梅林へ
 しげお 裏漉しの梅鮮やかに鰯料理
 重人 母の技ええ塩梅のタイミング
 剛治 早咲きの紅梅我が家に春を招ぶ
 雅城 茅葺きの庭にのんびり梅が咲き
 柳弘 春近し含み笑いをしる梅
 千里 メジロたち梅の蕾を手土産に
 朝子 梅一輪活けて部屋中春にする
 夕花 紅梅のぼうが雪にはよく似合う
 靖巳 梅の木の話庭師も学者なり
 志洋 松竹に花を添えてる鉢の梅
 シマ子 天
 能洋 梅干か梅酒か梅を賞でながら
 典子 蕾まだ固し焦らせる梅だより

紅梅の色香に迷う蜂の群れ
 手描きの梅匂わす帯で茶せん
 紅梅が別れた女の彩で咲く
 ミレニアム凜と咲きたい白い梅
 梅のころ太宰府へゆく厄落し
 梅漬けるこの楽しきは譲れない
 四面楚歌梅干しの種割ってみる
 梅薫る古刹にミニの厚靴

鐘造 一風

つ ま り

森 茂美選



松煙 神童とつたわれつまり只のひと
 セツ子 結局は酒で落ちつく打合せ
 正雄 次元の差つまりは姑が負けて勝つ
 弘一 考えておくと脈が無い証
 清芳 言いにくい事だがつまり払えない
 哲男 結局は老婆とふたりの小宇宙
 恭昌 泣いた数つまり笑った数である
 たもつ 長生きはずつまりお国の為ならず
 あすき 黄信号つまりは母の愛ほしく
 智加恵 つまりだす言葉を拾う老い二人
 幸夫 意地悪も所詮は愛の裏表
 あきら 大騒ぎしてお別れはつまり金
 螢 結局は父の背には追いつけぬ
 四郎 要するに辞めてほしいという左遷
 勝美 春曆きつりつまり老母達者
 婉曲に告白をするラブレター
 今年こそ今年こそはでいきづまり
 じゃあ何処へ行けばいいのとホームレス
 一度反対つまり私は天のじやく
 結局はサーブ権もつ妻次第
 企業秘密つまり老舗の隠し味
 柳 満秋
 陶美代子
 充子
 一風
 哲男
 章久

縷々書いてあるがつまりは無心だな
 みんなつてつまりクラスで五六人
 夫婦なんてつまりは他人と思う時
 夫自連合つまり選挙の胸算用
 やきもちもつまりは愛の裏がえし
 口下手でつまりつまりを繰り返す
 勝ち馬に乗るのはつまり生きる知恵
 つまりそのパビブベボだと逃げている
 父さんはつまり月給運搬機
 リストラはつまり首切る凶器です
 言い訳のつまりの色があせて来る
 少子化へつまり方程式を出す
 公的資金つまり税金使うのね
 合併のとのつまりは人減らし
 種を蒔くつまり味が欲しいから
 佳

毒舌はつまり上手が言えぬから
 男とはつまり単純脳細胞
 つまりそのうつむく医者も子の親で
 学歴がつまりのところ句読点
 臨界事故つまりクロン化したウラン
 人

理想論つまり私は空想家
 輪が丸いつまり誰かが耐えている
 天

尊厳死つまり最後のプライドだ
 軸

向い風つまり私は当て馬よ
 上田俊路

孝雄
 正子
 倫子
 煩悩児
 狸村
 周信
 彰雄
 正雄
 喜子
 健一
 日枝子
 隆風
 みつこ
 尚士
 吉之助
 しげお
 螢
 幸夫
 四郎
 正剣
 雄々
 鐘造
 上田俊路

頂 く

高橋岳水選



今朝もまた幸を頂く茶の香り
 手を合わせいただきますと言う候
 菜園をほめて頂く無農薬
 三拝をして頂いた妻である
 太陽にもらったぬくいふとん着る
 長生きに他人の知恵も頂いて
 朝日から頂く一日の元氣
 頂いてすぐにお返しする米寿
 忠告を頂き友の手を握り
 頂いた方は忘れる袖の下
 頂いたお酒の義理が果せない
 頂いてないから怖いものはない
 飽食が頂きますを死語にする
 頂きまーす孫の元氣を貰う朝
 頂いてそれから怖くなるお金
 ありがとう差して頂く赤い羽根
 戴帽へ胸ときめかす天使の灯
 頂点の驕り頂く事に馴れ
 戴いた桶に喋らす応接間
 頂いた壺の魔法にかけられる
 頂いた辞令に命削られる
 頂いた恩を山盛りして老いる

きみ子
 強一
 喜子
 善信
 一風
 洞庵
 充子
 一花
 宵明
 大輪
 ただし
 旋風
 勝巳
 慕情
 みね
 正雄
 碧
 彰雄
 清史
 アキ
 時弘
 めぐみ

頂いたまごころ返すものがない
 ちから水土依に覇気を漲らせ
 神妙に頂いている巫女の鈴
 孫たちにもらった赤いちゃんこ
 頂いた試練も加護も神の意志
 頂いた命大事に生きのびる
 頂いた花に妥協をしちゃう
 やすらぎを頂く朝の般若経
 頂いた臓器に神が宿ってる
 佳

万物のいのち頂き冬籠り
 名も知らぬドナーに命授けられ
 頂けるなら愛と時間をもう少し
 授かった命は無地にして返す
 一本の薬にいただいた恩がある
 人

読み終えて心の糧をいただきぬ
 地

頂いたところは惜しみなく与え
 天

高々と捧げてさがる感謝状
 軸

井上 勝視

故郷の山の峰から氣を貰う
 カリスマの嘘は頂かないように
 いただいた師の拳骨を忘れない
 法名を頂くこれも釈迦の弟子
 わけもなく頂くことは出来ません
 頂を目指す男の茨道

雅城
 和歌子
 省子
 花匠
 照子
 鉄治
 典子
 銀波
 剛治
 螢
 千里
 愁女
 たず子
 ツネ
 周信
 島
 あずま
 美代子
 芳郎
 しげお
 あずき
 健一

初歩教室

題 ー 流れる

吐^は田^だ公^{きん}一^{いち}

ときどき初歩教室の課題吟の中で、時事を詠まれるのをお見受けするが、時事吟に最も要請されるのはニュース性です。で、このニュース性が持続される時事吟であればいいのだが、一過性つまり泡沫的な時事を詠まれると、その句が発表される頃(当月十五日締め切り分が川柳塔誌に載るのは翌月末頃となる)には陳腐なものになってしまふ虞れがある。

先ず時事吟を創られる場合にはこのことを念頭に置かれるように。決して時事吟を創ってほならないというのではない。くどいようだが、その事件のニュース性が相当長期間に亘るものかどうかをよくご検討の上、ご投句下さるようお願いいたします。

添削句

○意地はって流れに逆らい左遷され
上下を入れ替へ中八を推敲する。

▽左遷地へ流れに乘れぬ意地つ張り

勲

○せせらぎも末は大河よ木葉舟 春江

原句では大河と木葉舟の関連が分りにくい荒波にもまれる人間の弱さをー

▽もまれつつ大河を下る木葉舟

○年一度逢う約束が又流れ 志重

上五の表現を少しドラマ的に詠めば

▽七夕の約束雨でまた流れ

○洗いざら流してしまおう今日の悔園八重子

上六になるがこの場合はいが必要

▽今日の悔いさっぱり流す終い風呂

○笹舟を浮し岸辺を追って行く 輝夫

笹舟を人と考えたと単に追って行くとするより、弱い人間のその先を詠むこと。

▽笹舟の流れる先にある望み

○分が悪い聞こえぬ振りで聞き流す 千代

聞こえぬ振りと聞き流すは同義語に近い。

▽分が悪い話を老いは聞き流す

○激流に揉まれてみえる人の底 勤

底〓心底は分るがもう少し考えてー

▽流されて揉まれて知った人の情

○せせらぎの流れに逆らう稚魚の群れ 賢

原句のせせらぎは不要

▽目高にも流れに逆らう意地があり

○本流を避けて支流で向う海 徳三

海分らぬでもないが、反骨を詠むとすると

▽本流を外れ支流で氣勢上げ

○カード化の流れに乘れぬカタツムリ 君江

カタツムリもいいがカード化とあるので素直に人間に持つてくればー

▽カード化の流れに乘れぬ一途者

○わだかまり流れる川が連れてゆく 智加恵

下五が安易に流れた。

▽わだかまり川に流したふたり連れ

○正論が流れて数が勝つ政治 五月

流れてを流されにした方が適切ではー

○早口についてり込まれ流される 志津香

何が流されるのか。中七が冗長になってしまったので具体性を欠いた。

▽中傷を流す早口についてられ

○折角の流れささぎる料金所 尚士

この下五ではインパクト不足。折角のも冗長といえる。

▽順調な流れささぎる事故現場

○流れには逆らわないうで生きて行く 靖雄

佳句のセツ子さんの句をご参考に。同じ内容だが彼女の句には川柳でいう軽みがある。

○流れ星ヒトリ流れて何所へ行く タツエ

亡母で装飾すると句が生きてくる。

▽亡母に似た何処へ行くのか流れ星

○約束が流れる元は無責任

下八の表現が不味い。

▽約束が流され今日をもてあまし 宗明

○初詣で流れすみやか整備員

トシエ

中七で説明句に陥入っている。多少ニュア

ンスは違うが

▽初詣で押すな押すなと警備員

トヨ子

○世の流れ正義の道が忘れられ

処世訓のようで

▽末世の流れ魑魅魍魎が棲み

○真実が流れる噂追い越せぬ

純子

下五の表現にやや無理が見られる。ここは

単純に

▽真実が噂話に流される

トキ

○何時か川も濁流となつて人を呑む

上六中八のわりには説明的

▽おとなしい川も時には人を呑む

賢治

○火石流地球の息を赤く染め

下八がとつてつけたような表現

▽火砕流地球の怒りか世紀末

煩惱児

○流されると知つて痺さす頑固者

上九音字が説明句にしてしまっている。

▽左遷地へ情に痺さし流される

章司

○思ひ出と子の厄負うて流し難

何もかも言い切るには無理がある。

▽子の厄を負うてつらかる流し難

三八重子

○分水嶺清濁呑んで海に果て

上五が遊離している。

▽清濁を呑んで大河の悠々と

○流されて立ち止つたら至富の地

中七が冗長。至富分ちぬでもないが広辞苑

にも漢和辞典にもない言葉

▽流された場所に至福のありがたさ

○余生もつ渚の流れ逆わす

禮子

素直に水とすればリズムもよく分り易い。

▽余生もつ水の流れに逆らわす

○雨天中止 試合が流れ延期です

晩翠

①②③共に同義語の併記にすぎず、句の内容が乏しい。

▽好試合流れた雨の日曜日

○底流を知らぬ軽石垢抜けぬ

山平

底流 社会の目に見えぬ大きな流れ、軽石

弱い又は軽薄な人間と見付け(着想)は

すこいいのだが、下五でこの句を駄目に

してしまっている。

▽底流の恐さ軽石知らぬまま

○夕方は雲の流れ見一曲を

美寿子

情景をもつ少し劇的に

▽夕映えの流れる雲にわらべ唄

○流れに乗れず一人暮らしの寂び住居

四三郎

一人暮らしと寂び住居は同義語に近い。

▽定退後流れに乗れぬ倦び住居

佳句

リハビリに流れる汗の回復期

茂代

嫌なこと水に流して煤払い

一步

ポランテア流れる汗を評価する

大世帯流れにまかせ丸くいる

山雅子

別れ来て流れる涙未練かも

美弥子

ひと振り流れを変えた投手戦

泰雄

会合の流れを変えた紅一点

一典

潮の流れに昨日の私ぬぎ捨てる

彩子

古傷を水に流して今日の幸

政子

ビル谷間流れる人が吸い込まれ

美子

流されて薬をも攪むわらはわら

幸枝

一徹に生きて世の流れに乗れぬ

ひさ乃

匠の技親から子へと血は流れ

郁子

さみしい日流れるように夕日おち

宏子

(よく頑張られた)

人情の狭間で今日を流される

美智子

ときどきは流れを変えた処世術

美也子

ラッシュアワー流れよこぎる風もいる

玲子

濁つても流れる水は生きている

宏

(今の政界を)

実家帰り流れるように時がたち

彰雄

(居心地のよい場所は)

流されるままに生きれば楽だろう

セツ子

(そっいかぬのが人の世の常)

てる代

一筋のわらでこの世を浮き沈み

(言い得て妙)

私の句

処世術強い流れに逆らわす

本社 一月句会

一月七日(金)午後五時半

アウィーナ大阪

予想されたような混乱もなく明けた二十年初の本社句会には百七名の出席者を迎え定刻開催された。

初めに年末、年初に故人となられた同人、福元みのる・辻白溪子・北山悟郎三氏の冥福を祈り黙祷を捧げる。

昨年度月間賞杯永久保持者の和歌山市川上富湖さん(欠席により代理)にカップが贈られた。続いて11年度皆出席者に主幹揮毫による色紙56枚が配られた。また、同人岩津ようじさんの句文集『冬の蠅』が本日出席の受付番号5・0の人達21人に謹呈された。

お話は昨年新春と同じく黒川紫香氏。目標としていた二十年を元気で迎えることができたもなく93歳という。

人と人とを結ぶ言葉の大切さ、言葉によるふれあい、ぬくもりを語る。地方の川柳家達との出会い、結びつきも、言葉により記憶に残る。また最終の勤務新阪急ホテルの女子寮

の御縁で、昨秋長崎を訪れ、25名の元寮生の歓迎を受けたこと等、明るい話題であった。氏のふくよかな笑顔に、出席者は長寿の福と、元気を分けていただけたようであった。

月間賞は三宅保州氏(海南市)に輝く。
(司会―ダン吉) (記名―朝子・燈子)
(受付―茜・義子)

席題「風」 石原靖巳選

北風よ風の行方を知らないか
天翔ける子の夢乗せて龍の風
糸切れた風と言われて八十年
思いきり風と酸素を吸うている
連風に主役脇役などはない
糸切れた風になりそう君の留守
奴風の踊りで笑い取るコンビ
糸の長さは無限と信じ風昇る
連風を雲と遊ばせ冬休み
風揚げて親子の絆強くなる
風あげに行つた男が帰らない
風だつて安全圏を知っている
大空を舞いたい風がすねている
竜になる風が一気に天を突く
七草も風も昭和へ帰りたい
風の精やんちゃな風を抱きとめる
昇龍に負けじとはげむ奴風
君の住む町を偲んで風の恋
糸切れて風は宇宙の星になる
父と子のころはかほか風づくり

洋 三男 保州 英壬子 武庫坊 アキ 一歩 義 瑠美子 鹿太 朝子 アキ 重人 武庫坊 寿子 高栄 朝子

夫婦風糸が絡んでよく落ちる
電線にたたら踏んでる奴風
天国まで昇つて行つた父の風
風にのり少宇宙を舞っている
ボクの風しっかり抱いた冬木立
奴風 糸を切りた時も
強く弱く風の糸引く妻がある
風にのる風にけじめをつけさせる
奴風くるくる風に立ち向かう
風揚げの盛んな土地の味な和紙
風あげも国旗も見えぬ町が病む
ボカボカのおひさん風もねむなり

金太 周信 保州 いわゑ 千代 泰子 たず子 夕花 隆盛 楓楽 セツ子 月子

Y2K風はのんきに空を舞い
糸切れた風で朝まで飲んでほる
エリツイン辞任風も届かぬ北の島
前世は鳥かも知れぬ奴風
糸切つて風も言い分あるらしい
人 風と契つて風ははるかな夢を見る
地 大空に舞えずベッドに飾る風
天 日の丸も風も舞つてる島の春
軸 宇宙遊泳大志は捨てぬ奴風
兼題「コント」 松原寿子選

鬼遊 月子 雅文 楓楽 公子 舞夢 弥生 剛治

七福神コントをのせて船出する
 思い出の涙がコントになつて春
 幕開きのコントわたしが引き受ける
 二千年問題過ぎてしまふコントなり
 バツイチの男読ませるコント書く
 コントから大河ドラマに育つ恋
 転けそうになるとコントが生まれま
 手料理のバセリ一つにあるコント
 面白いコントを作る河内弁
 バージンロード父一代のコント見せ
 串刺しのコントが朝のコラムから
 ばら園にコントが一つ落ちていた
 大阪はコントで地盤沈下する
 生きていることが此の世のコントで
 あかしたなコントを探す広辞苑
 男と女のコントはななめから読も
 拍手して分らぬコント続いている
 プロポーズぶざけてコントにしてしま
 走りながら走らぬコント考える
 コント風に僕の葬儀も頼みます
 遊び上手なまりをヒントにしたコン
 携帯とコント明い声が舞う
 仏だんもコント見逃す大家族
 来る春へコント温めている蕾
 コントならうちで毎日やっている
 後半のコント賑わす紙吹雪
 猫と女のコントは無限ロングラン
 妻の掌のコントの主役いつも僕
 コント終つて仮面が二つ落ちてい

隆盛 隆盛 隆盛 保州 弘一 天笑 岳人 しげお たもつ 恵子 いわゑ 鹿太 かわゑ 楓楽 千歩 寿美子 諷云児 たもつ 弥生 ますみ 一風 正坊 澄子 武庫坊 一風 泰子

賞金を狙うコントのかくし芸
 燕尾服今日いちにちのコントだね
 佳
 生真面目な顔からコント飛び出した
 泣き笑いのコントを詰めている財布
 冬に埋もれてコントが風邪をひている
 二〇〇〇年のコントは龍のひげにある
 底抜けの鍋がコントを繰り返す
 人
 ヒーローもヒロインもないコントです
 地
 手袋の先につままっているコント
 天
 気ぜわしい世相コントの筆を折る
 軸
 物足りぬコントへ塩を効かせよう
 兼題「盛る」 三宅保州選
 てんこ盛りの福を運んで欲しい辰
 一盛りで来た人生に胸を張る
 朝起きて食事盛つてる仲直り
 山盛りのめしで充電する息子
 山盛りのお代り頼もしい茶髪
 垣根越し小皿に噂盛ってくる
 嘘少し盛った話に人が寄る
 雑用をいっぱい盛って母元気
 八起きめは盛り沢山の夢という
 黙々と土盛る鉢に狂いなし
 てんこ盛り出世払いにある恩義

春 稚代 紫香 公子 美代子 森子 満寿蔵 保州 雅文 英子 セツ子 鹿太 正一 和一 千歩 勇太 保子 シマ子 弥生 一歩 隆盛

貪欲に盛って運から見放され
 盛り上げておいてなんにも手伝わ
 サラダ盛るセンスが良くて嫁にする
 盛り皿を隅で支えているパセリ
 毒盛った皿は最後に出すつもり
 愛を盛る皿は深目の方がよい
 愛を盛る皿はピンクがよく似合
 はるの涙ぐい私を盛り付け
 てのひらに少し屈めて盛る情け
 砂の城盛って私にある主張
 九条に盛りこめられている願
 虚と実の真ん中で盛りあがる
 証拠隠滅戯画をいっぱい盛ってお
 紙の皿軽いギャグなら盛れそう
 丁寧にお礼を盛ってくる葉書
 罪ばかり盛られて身動きがとれず
 夢を盛る皿一枚を買いました
 妻ある日他人の顔を飯を盛る
 あんさんハナハトでつかと盛り上
 鶉色の皿に盛りたい未来像
 いい事があつて仏飯高く盛る
 佳
 てんこ盛りと大阪では売れる
 愚痴聞いてもらふ仏飯高く盛る
 殺し文句盛った手紙が舞い戻
 少女脱皮皿に盛られているぶど
 ひと山に盛った鱈に俺がいる
 人
 新しい鱈を盛ったミレニアム

月子 梨里 瑠美子 澄子 房子 楓楽 重人 寿子 和子 ダン吉 ダン吉 いわゑ 美代子 美代子 朝子 森子 とし子 諷云児 寿美子 義子 たす子 弘一 楓楽 寿子 雅文 勇太 森子

賀状欠礼ばらばら櫛の歯が抜ける
善人のバケツの底が抜けている

佳

すり抜けて遠くへ去ったのが本音
悲しみから抜きたい為に飛んでみる
手を抜けば恋の勝利者にはなれぬ
氣を抜いた時をねらった風邪の神
髪が抜け歯が抜け魂が抜ける

人

少しだけ力抜いたら見えてきた

地

息抜きがとつても下手な悲しい手

天

折角のワインの栓が抜けません

軸

ネジひとつ抜けた辺りにある人気

兼題「世界」

橋高薫風選

元旦を私一人の世界にする

世界地図何と健気な日本だな

花博へ世界の花が来るそう

友達をまいてふたりのかんらん車

職退いて広い世界を知るカエル

火種抱く国がこんなに世界地図

血みどろの世界清める雪よ降れ

世界史の区切り区切りにある砲火

わが町を世界の地図にさがす子ら

職退いて別の世界が見えてくる

屋根の上登って見えた別世界

たつお
女

森子

舞夢

千代

寿美子

雅文

グン吉

扶美代

鬼遊

柳宏子

高栄

照子

庸佑

満津子

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

萬の

ささくれた裏の世界を知る鳥
読書佳境しばらく音のない世界
ホームバー世界の酒を飾ってる

回想の世界を熱くする唱歌

海外旅行蹴つてあなたと小さな旅

世界観インターネットに変えられる

世界観違つと軽くないなされる

核ボタン世界が怖い程狭い

家内安全世界の平和まで祈り

誤作動もなしに世界に初日の出

新しい国の形を待つ世界

胃袋が世界の味となじんでる

米原を過ぎるとはっと銀世界

南からまーるく見える雪世界

銀世界などと都会の人は言う

厚底のブーツへ一矢銀世界

ヒマラヤを見た写真とおんなじだ

いっぱしの世界を見た万華鏡

飢餓の国飽食の国かなしけれ

世界一の妻だと思ふことにする

雑草の世界も強いのが残る

佳

世界中歩き日本に住み馴れる

世界遺産と暮す日常非日常

笑みだけの世界になったお母さん

六十億こころの数だけある世界

あの世から見たい千年後の世界

人

子供部屋のぞけば世界動いてる

久美子

みつ子

はじめ

アキ

扶美代

遠野

正坊

重人

希久子

雅文

利昭

正一

瑠美子

公子

保州

明月

義子

睦子

寿美子

義子

諷云児

紫香

和子

グン吉

弘一

洋

ますみ

地
蟻の世界に音楽はタブーです
天
英壬子

天

最大の世界遺産は地球です

軸

椅子一つ川柳世界万華鏡

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

軸

◎皆出席者追加 黒川紫香・板尾岳人(56名)

平成11年度年間賞発表

二〇〇〇年記念ふあうすと川柳大会

日時 4月23日(日) 午前11時開場

場所 兵庫県民会館9Fホール

(JR元町から徒歩7分地下鉄県庁前駅東12出口)

宿題(席題なし)

「通る」

「差」

「宇宙」

「残る」

「ドラマ」

「年」

「線」

「理由」

出句締切 12時(各題2句)

会費 二〇〇〇円(記念品・発表誌呈)

千葉 平井 吾風選

高松 堤 春子選

福岡 松原 葦男選

中日川柳 浜口 剛史選

川柳塔 橋高 薫風選

番傘 森中恵美子選

時の川柳 小松原爽介選

本社 泉比呂史謝選

◎三月に同人名簿発行しますので、平成十年版の名簿に訂正のある方は至急事務所まで。

長崎は今日も

晴れだった

黒川 紫香

これで四度目になる長崎は、今回も三日間雲ひとつない好天気だった。約二十数年前、私が最終職場として勤めたホテルの女子従業員達が勤めを終えて故郷長崎に帰り、女子寮の寮長をしていた私を忘れずに一度長崎へ呼ぼうと一決して招かれ、長崎を訪れたのだ。

丁度この話が出た頃、熊本川柳会の岩切康子さんから来ないかという話があり、長崎へ来るのならハウステンボスの入場券とホテルの宿泊の付いた優待券を送って戴いた。

先ず博多から玩具のような電車にのってハウステンボスに立ち寄った。美しい運河の橋を渡るともうオランダにきた気分になる。手続きをして園内に入るとバスまたはタクシーが案内してくれる。今夜泊るホテルヨーロッパ前で降ろして貰いチェックインする。園内には他にもホテルはあるがここが一番大きい。夕食まで散歩に出る。緑あり、チューリップ

あり、運河と水車まさに夢の国だ。夕食後、夜のショー 光と海、オランダの帆船や、七彩のイルミネーションに圧倒される。

翌日は園内一周遊覧船で運河を回り堪能する。高速バスで長崎市内の大浦天主堂に近い長崎ビューホテルに着く。玄関の黒い表示板に「大阪の黒川さんの歓迎会」と鮮やかに書かれていたのには面映かった。

みんな廿数年振りの再会だ。私だけでなく同じ長崎に住んでいても、ホテルを辞めてから会うのは初めてだという人達も居る。

思ひもかけぬ五島列島の福江から飛行機で二人馳せつけて来た。涙が出る。思い起せば七、八年前、長崎で日川協の全国大会が開催された時、参加した茂津、三男、英子、諷云児、メ女、美智子さん等と私の七人が今日来た五島の娘達に誘われるまま、空路福江に渡りワゴン車で島内を案内してくれた末、民宿まで世話して貰った。その時も川柳会場へ数人来て、御主人や小さい子供に「この人が大阪のおじいちゃんやで」と涙ぐましい紹介をしてくれた想い出が浮かぶ。

「よう、よう」言っている間に宴会の設備も出来、懇親宴となる。話は矢張り勤めて居た大阪の事で、そして私が世話していた寮での思い出となる。夜中に高熱を出して救急車

を呼んだり、女子寮のこととて、痴漢が出没し庭の大樹に登って覗いたのはいが落ちて大怪我をしたり、大浴場の屋根から二階の部屋へ忍びこんだものの、大勢の寮生に騒がれて腰を抜かし警察を呼んだ事もあった。何しろ当時は二十歳前後の女性が二百五十人は居たから驚いて腰を抜かすのも当然だった。

故郷を離れて来た高校出たての若い身空、悩みも多く職場の問題、対人関係、そして恋愛問題それぞれを聞き、アドバイスするのも私と寮母の役だった。反面生き生きとした若さと考へ方に教えられる事も多かったし、私自身楽しくもあり思い出多い毎日だった。

私が寮に勤めた頃は新幹線が開通し、東京オリンピックが催され大阪では万博が開催、当然ホテルも林立して入出が足りず関西以西の各地から集めた。特に長崎は何かの縁があったのか毎年二十人近い女性が来た。

三日目は私のまだ知らない野母崎半島を案内してくれた。遠くに見える石炭の島、通称軍艦島の歴史を聞きつつドライブを楽しみ、午後二時発の特急で皆に送られ帰阪した。

ともあれ昔の絆を忘れずに廿数年経った今でも、そのまま抱き合える心は正に川柳の持つ心の絆と変わりはないのではと思う。

長崎は今日も昨日も晴れだった 紫香



毎月25日締切・30句以内厳守
編集部

翠洋会 兎玉 蛙報

丘ひとつ消えて新興地の銀座
岡いつか山になりたいころざし
ビタミンCいっぱい食べている炬燵
おもかげを残しつつ老け同窓会
玉碎の丘名もない花が咲いている
玉手箱飾るリボンが大きすぎ
こたつにはみかんの山が良く似合い
沖はるか白浪見える兵の墓
リボンつけてマザコン男返します
一浪の夜ふけへ母の温い蕎麦
老けてない証にしたい赤いシャツ
世紀末きつとよい事起こりそう
夜更けまで灯の消えぬ受験窓
老けたなと思う病後の三面鏡
処女匂集りボン飾って贈られる
お互いに年をとったと幼友
妻の機嫌リボン一つでよみがえり
掘炬燵年賀書きつつミカン食べ
ペアルック夫唱婦隨の見える岡

恭昌 希久子 志華子 蕉子 東雲 春 会美 義 靖巳 周信 叙子 澄子 真砂 喜美子 千枝子 日の出 舞夢 宣司

坂のぼる岡の暮らしに辛い古い
岡の上に住んで出無精ひどくなる
竹馬の友徳ぶ摩文仁の丘に立つ
気まぐれな風にのせられ丘のぼる
星の降る岡でハートを盗まれる
樹齡千年しだれ桜と句碑の岡
唐突の黒いリボンの笑い顔
青春を反芻してる丘の上
花粉症評判悪い岡の杉
みかんむき姉妹の話まだ続く
みかん一個分け合う妻がいてくれる

川柳塔おとし 原みさを報

老人も靴は光っていてほしい
厚底のブーツでサンタやってくる
することがないから妻の靴みがく
成人の息子の靴がよく光る
リストラの靴もきれいに磨きます
靴底の減りに上がらぬ棒グラフ
古靴のぬくみが僕をなぐさめる
代表で謝りに行く重い靴
少子化に国もしぶしぶ腰上げる
しぶしぶの受諾商家へ虹を架け
逃げ道はないしぶしぶ泥かぶる
夢を捨て嫁にふしぶし署名する
連名の寄付にしぶしぶ署名する
年重ねしぶしぶ老いのくだり坂
大根を煮るに優しい顔になる
大根足ならこそ大地ぐつと踏め

照子 楓 久峰 蛙 石舟 千歩 絹梢 千雄 正坊 正遊 鬼遊 崇 雅通 由多香 仁子 佳子 艶子 邦昭 宏章 孝子 黙光 伝住 義弘 道子 風花 富貴子

大根の白何にでもうまく添う
生大根かじり歩いた北支の野
大根のおでん飲込むのは惜しい
個性美の大根足もまたきれい
干し大根漬けて農家はほつとする
来る物も来る人も来て無事暮れる
匿名の寄付が届いた歳の暮れ
いろいろとあったけれども年が暮れ
病む夫にハイハイ節で日々暮れる
暮れかかる脳裏放電ばかりする
暮れるのに気づかないほど忙しい
暮れの鐘ぶらんこだけが揺れている
今年こそ決意したのにもう師走
私が一番早く暮れてゆく

横浜あおば川柳会 菱田満秋報

折り鶴をみんな翔ばせた怖い夢
茶柱を信じたくなる不況風
缶入りに慣れて茶柱忘れられ
飛びついたうまい話に裏があり
スランブをバイオリズムの所為にする
朝食はパンでもお茶でしめくくる
朝方に寝耳に水の懐妊
子育てを終えていつでも翔ぶ構え
くしゃみして賀状金粉吹きとばす
留守電に他人行儀の語をつかい
訓練が無事を避難をさせてくれ
他人には見せぬ素顔を知っている
もつ他人ではない朝のティーカップ

せつ子 千秋 以和万津 小生 舍人 彰雄 紀子 清子 登美 ゆきの 野草 庸二 みさを 満秋報 あかり 笑子 街湖 良子 サト子 和可 徳三 あらた 雅子 道子 亜希子 鈴美 純子

息止めて羽虫飛び交う中を抜け
冷えた茶で話しあつて善後策
新婚は跳ぶようにして帰宅する
おめでたい歳を他人が言うお通夜
とびうおの空から広き確かめる
跳び越えたつものりの足が水溜り
へそくりを隠した本が飛び出てる
茶柱を吉とみたてた頼みごと
他人だがおもう夫婦ごっこする
妻だつて女権しつかり見せている
猛犬が吠えて散歩の遠回り
今日のうつ明日翔べそうな茜雲
駆け上がる若き眩しい二段飛び
後継ぎが戻り茶煙霧が晴れ
頑張れと言っただけで済む第三者

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

気がかりなひとつ紛らす窓を拭く
冬の窓 蘭も二鉢置いてやる
窓ガラス謎解くような丸い月
こたわりをゆつくり流す窓の月
窓あけて少しわたしが変り出す
窓辺より差し込む陽さしあげたい子
窓全開しかしブルース聞こえない
窓越しに木枯しをみて日向はこ
ソロバンへ損は承知の母の指
ソロバンをはじいて恋が実らない
五つ玉鑑定団が値踏みする
介護にもソロバンの要る世紀末

絹子 八重子 土風 広和 嘉信 敏 政勝 句多留 かず枝 省子 裕峰 かつ子 為佐子 潮華 満秋

ソロバンを斜に構えてまけときま
競い合うソロバン弾く日もあつた
ソロバンの隙間に絆こぼれ落ち
ソロバンがさびればど池黄昏れる
叱られて度にウロコがはがれ落ち
叱られても戻りたいのは母の膝
叱られてうれしく思う母傘寿
叱られて他人でなかった伯父の顔
車内にも叱りたい子が居て困る
我が頬を打つ気で叱る親ごころ
叱つたら恐いおやじはもういない
叱られてみたくて小石投げている
手短に話せと上司焦れている
選手獲得巨人よ勝手過ぎないか
寡たけなわ社長のおはこ出る時分
どこにでも愛を点してくる夫
少年が虹と約束した未来
出会いからいい友だちになる予感

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

人生のおまけをガンと騙し合い
喜寿迎え働くことが楽しいな
片割れの月が訣れを暗示する
一日一善心の垢をすり落す
復興の証勇気をくれるルミナリエ
はや口で街に活気のである師走
黒豆が煮えてはすみのつくおせち
何もかも許しこころに温い風
つまずいた石を知ってる足の裏

トミエ 晴美 美智子 みつ子 周信 貴代子 絹子 江美 澄子 哲嗣 哲子 庸佑 萬的 春蘭 清子 石舟 正坊

佳句地十選 (1月号から)
藤解静風
コスモスが咲く丘で聞きたい話
良心にとどき狸寝をさせる
いつかきつかなしい合図するだろう
冬も良し大根の味酒の味
この坂を越えたと軽くなるつづら
声を時々かけて下さい鑄びぬよう
風船が飛んだ町から嫁が来る
哀しみはみな裏口が知っている
みんな戻つたみんなが年を取つていた
強情なぶどうに種が二つある
締切りが迫り一瀉千里と書く賀状
独りっ娘の恋の強さに敗れました
檜山の回りぐるぐるして戻り
年末の荷物が重い老い二人
一枚のメモにけじめの走り書き
風邪うつす距離には居ない倦怠期
私のけじめ古傷には触れぬ
年玉をつめて待つてゐる老い茶の間
隅へ来て風をよけてるひよこ売り
尼崎いくしま川柳会 春城 年代報
しかられてやつとのこのこいたずら子
のこのこと試食した後茶がほしい
のこのこと宝くじ買う夢を買う
無神論者ものこのこの神の加護願ひ
愛 博子 楓 完司 節夫 美子 幹夫 勇次郎 弘治 昌子 夢之助 正治 満寿蔵 澄子 十四郎 紫香 節子 渉

湖に舟を出したくなる月だ

湖がつぶやく山の奥の奥

子の供忘れてパチンコ屋のチューリップ

忘れたのごめんねですむ石路の花

メモしてメモしたことを忘れてる

気持ただけ若いつもり物忘れ

新幹線に忘れて降りた孫土産

げんまんをした指を見て思い出し

菊一輪下弦の月は寂しすぎ

無意識に血は争えぬ癖が出る

十二月ゴトリと貨車の着くあたり

目の前の菓子に誘惑されそう

転居のはがきボンと桔梗のひらく音

小菊咲く小春日和の散歩道

小春日和街角のウツ和らいで

雨だれのリズムが叩く午前二時

肩の骨ばきばき鳴らし人見知り

川柳ささやま

酒井

靖子報

日だまりで木馬の夢が揺れている
湯豆腐の揺れを黙って見ています
メニューには無い松茸のフルコース
目立つ娘の朝から揺れるイヤリング
襟足の白さが目立つ車椅子
控え目なおんなの目先恐くなる
働いて好きなメニューに満ち足りる
富士山は目立つ日本の宝もの
たまに着る着物が目立ち気はずかし

武庫坊

紫香

昭三

比ろ志

しづ子

夢之助

義芳

弘治

久子

千恵

日出男

年代

歌子

和子

正子

全彦

一笛

薫

純子
恵美
多美
美智子
八重子
とみ子
つや子
かはる
すず子

機械でもたまには休む日がほしい

目先よい方を選んで悔い残る

目立つ色は赤より女は紅を引く

目立つたらたちまち弾が飛んで来る

ふくらみが目立ちはじめ入れる籍

道端の目立たぬ花の愛らしさ

策練ったメニュー立派で中味なし

大切なメニューは嫁のかくし味

節々のメニューは母の口伝え

お葬式にグイグイの指輪つけてはる

大根炊き妻のメニューが口に合う

休閑地仏の愚痴が耳を刺す

はまゆう川柳会

中後

清史報

分ち合う心で満たす募金箱
ピンチにはママも借りて貯金箱
ライターに王座とられたマッチ箱
隙間なく里の香りを箱に詰め
箱庭のような家でも俺の城
土産物品確かめず箱で買い
箱入りの娘ようやく嫁に出す
時々は呆けた真似して和を保つ
五目飯真似のできない母の味
踊りの輪見様見真似でついて行く
真似をしたしてはいないと訴訟沙汰
真似をしてまねられてる野心作
真似しない進取の気性開く道
真似をして厚底履いて怪我をする
どん底で勇気をくれた児の寝顔

かつ子

美紗子

美緒子

泰子

房江

君代

毬子

ヒサ子

富美

芳郎

可住

靖子

生米子
太一
てる坊
恵美子
比斗志
雅視
サト美
すみれ
修也
美佐子
華水
たけ史
公治
登彰

向かい合うまでは勇気を持っていた

遠い日の勇気のなさに残る悔い

ついて来る妻の勇気が背を押す

甦る勇気を呉れた盲導犬

席譲るにも勇気要るものと知り

よその子に注意するのに要る勇気

心底の気持ちを外に出す勇気

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

政治不信ジングルベルは鳴るけれど
歳末に障子の白さあるゆとり
歳末へ見切り発車のベルを押す
歳末の風は情けを抱いてゆく
歳末は何もしないと決めている
年末を不安にさせる世紀末
新巻が売れる声してみぞれ降る
二千年に備え食品よく売れる
ボーナスを目当て商魂たくましい
信頼と善意で売れる無人市
孤独だから心を売りに街へ出る
おふくろの味で売れる小さい店
早起きがまた始まった日曜日
早朝の新聞師走の音で来る
ながながと早い話がおわらない
一年の早さをゴミの日に捨てる
今時は早い結婚すぐ離婚
早送りするたび過去を光らせる
計算の遅れ私の駅がない
情念の風は計算嫌ひ抜く

清史

佳子

利ぼん

平和

慶一

さだ代

まゆみ

煩悩児

知恵子

茂美

小鹿

登志子

昭二

晃

みえ

多賀子

昌枝

たけし

与根一

静江

房子

邦代

博子

聡美

哲雄

圭詩朗

日出子

突然に椿誤算の音で落ち
不景気で引き算ばかり多くなる
盆栽の魅力計算する他人
夫のうしろに計算高い妻
がまんして七十五日噉飲む
湧き水があまり無心でそつと飲む
一杯のワインに消えたわだかまり
うたがも持たず蛇口の水を飲む
錠剤を朝の仕事に飲んでいる
また飲んで来たねと味気ない返事

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

畔 静恵 芳枝 久枝 注湖 友子 太泡 桂子 すみこ 町紅
吐来 かつみ 章司 敏 利武 一知 りつえ 桂子 扶美代 美喜 泰平 泰子 聡 みつこ 満寿蔵 一壺 絢子

来年の暦を鬼も買って行き
肩の荷がいよいよおりて岩田帯
悪評を正す役目に立たされる
いよいよと覚悟を決めて手術台
逆転へいよいよ俺に来た出番
喜寿も過ぎいよいよ部品ガタがくる
やるだけはやりたいいよいよ待つ結果
いよいよとなると父より強い母
いつの日か笑える日がと励む母
ふしくれた指黙々と石磨く
核ゼロの日までは励むボクのペン
励むもの求めて趣味の門たたく

岩美川柳会

石谷美恵子報

美代子 敦子 和歌子 昇 四三郎 庸佑 志洋 昭平 洞庵 重人 ダン吉 潮華 大漁 單車 隆風 静生 螢 はお 孝男 一夫 主一郎 忠良 蟹郎 まみ子 睦子 和歌子

来年も仕事がちやんとあるように
大役があるからまんだくたばれぬ
ワインより日本酒が好きめしが好き
十指みな役をこなして凭れ合う
良い嫁で姑の仕事をみんな取る
父さんは夢の中まで仕事する
役どころ悟りピエロを演じきる
りストラの匂う机に日が長い

川柳大阪

坊農 柳弘報

一京 一瑤 公乃 芳江 たぬ 節子 裕子 美恵子
高2 主 劍山 和子 隆司 信醉 雅巢 多香 照月 洛醉 まつお 利武 希久志 金太 笑風 喜楽 重人 柳弘 芳香

研究をしたがやつぱりノーマーク
飽きられる前に私が捨ててやる
幾千年越えて奇岩は人を呼び
鬼ヶ城見張り番する女郎蜘蛛
大金をかけた研究しかいない
侵食の自然の造形人集め
趣味に生き生涯絵筆乾かさず
マニュアルを無視臨界に大あわて
研究が神の領域侵すエゴ

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

美 花 かよこ
柳 昌 青 道
川 笑 柳 童
楽 子 本 蔭 棒
鉄 心

ふり返るたびに炎が横を向く
助手席へ乗せたは幽霊だったのか
横向いて写すと僕も捨てたものでない
横笛を吹いて親父が風になる
横向くあなた頼りにしてんのか
横丁で長話する影二つ
義理チョコも食べれば同じ味がする
義理で来た講演会が面白い
義理一つ細い絆を繋ぎとめ
義理にでも上手と言えぬリズム感
義理という列の後尾にいる欠伸
処世術義理と情けの熨斗袋

川柳塔なら

坊農

柳弘報

妻鼻唄ウチにはぬくい風が吹く
腰を折る深いお辞儀にある気品
丸腰で無手勝流の話聞く
じゅうずの手に紅葉はあらはら水子塚
及び腰の介護保険にある不安
追憶の風吹き抜ける田舎駅
地獄から這い出て怖いのがない
本腰で介護保険と向かい合う
もみじ散る煩惱ひとつ断つように
東海村で暮らす度胸がない度胸
ホラ吹きの話真顔で聞いてやる
吹かないで下さい残り火が燃える
絵葉書の中にビードロ吹く女
腰低く胸に叛旗を隠し持つ
笛を吹く妻の元気がありがたい

川柳会製花

石上

悦子報

章 久 あやめ
春 蘭 秋 泉
富 子 水 魚
良 一 道 子
秋 雄 卓
眞生夫
美千子
朝 子
和 夫
多哥由
完 司
蟹 郎
一 京
勝 美
行 男
東 雲
明 かつみ
忠 良
和歌子
洋

ひと刷毛で消せるだろうか今日の罪
横になる地球に今は身を預け
義理人情に厚く出世に遠くいる
手をやいた末っ子に母看てもらう
めでたさは妃の御懷妊でぐくくり
祝い酒末広がりで締めくくる
世紀末環境ホルモン不気味なり
末席の寡黙の一矢胸を射る
末っ子に生まれて世の中甘く見る
一つだけ消しました多数決
私が消えてしまっただけ残す
諸々を消し有難うだけ残す
一人ずつ消して残ったのはあんな
十年日記消したい文字にまた出会う
人ひとり消すペン先を尖らせる
焼印を押され消せない恋慕情
過去を消す女の背は前向きに
横からの風によろけるしかないか

輝 子 あき子
三 男 英 子
公 子 豊 太
信 子 鉄 治
千 寿 子 大 輪
保 州 紀 久 子
正 博 精 子
稚 代 泰 子
百 合 子 富 湖

やつと建つ吹けば飛ぶよな砂の城
ためた腰華麗にしなる舞扇
七十歳度胸だめしの一人旅
留守電の向こう冷たい風が吹く
日本語で書けぬ首きり仮名で書く
五人の子度胸と我慢で育て上げ
竹馬に乗つてるような靴を履く
度胸ある蟻一匹に悩まされ
腰低くせよと言われて継ぐ暖簾
天平美人腰のうねりにある色香
二度の職度胸を据えた面接日
先輩と呼ばれて見せる空度胸
酒飲みのもみじか夏場から赤い
丸腰の気楽さケータイなど持たず
紅葉狩り手話の夫婦のわらべ顔

寿 子 真 弓 紫 香
忠 翁 裕 美
吞 天 優 子
和 重 高 夫
佐 代 子 紀 美 女
克 子 季 世 恵
幸 代 幸 子
天 狗 美 和 子
洋 子 美 和 子
たけし 久 峰
高 栄 孝 子
茂 雄 眞 理 子
絹 子

口元に笑みを浮かべて嘘をつく
靴のひも締め口元を引き締める
口元を緩める術に気がつかう
口元の笑みに油断をした不覚
がらくたを粗末にしない父明治
ガラクタがガラクタでない言わせた
くるくるの好きなお寿司は手が早い
レベル4やがて被爆者増えてくる
幸せの塗り絵をさせている平和
無理難題方程式にはまらない
十二月カニも麻薬も岸壁に
骨になったぐらいいで何だ節がある

和歌子
洋

ミニよりもロングの裾の切れ目追う
趣味の奥深く現在地も不明
亡母の味に遠い彼岸のちらし寿し
やがてみな花に埋もれて行く浄土
コスモスが揺れるこのわりなど捨てて
骨壺に余った骨はがらくただ
肩をたたけがらくたの音がする
おれより先に死ぬまでと介護する姿
真剣に後ろ姿を見てくれぬ
優しい男だ私の姿褒めてくれる
可哀そうでも大嫌いな蛇みみず
団子虫まるい姿で怒ってる
田舎でもいいよと嫁に来てくれる
いい事もそのうちきつとやって来る
待つ人はだあれもないが朝は来る
何時来てもいいよと母の膝が言う
やがて来る冬を大きく膨らます
がらくたに力くさい酒の神

かわはら川柳会

上田

俊路報

玲子 ひろこ 真砂 美恵子 きみ子 石花菜 彬 螢 典子 睦子 よしえ すみこ 一夫 悦子 高栄 節枝 求芽 秀子 余更子 正子 寿子 泰良 登生 一薫 悦子 静子

来年は変身すると散る紅葉
紅葉狩り日頃の憂さを山に置く
紅葉背に写すと妻もピンボケる
わかあゆ川柳会 松本はるみ報
かたくなに片意地はって栗のいが
虫食いの栗かちぐりう嫉妬する
赤トンボ母の化身か離れない
朝市に素敵な花を見つけたら
赤トンボ悲しい飛行機しってるか
忘れ物手から放したのあたり
焚火して栗がはじけた懐かしさ
借金も蓄えもなくおつりゼロ
魔屋のコスモスに舞う赤トンボ
子科練をのせた日もある赤トンボ

竹原川柳会

時広

一路報

聴 俊路 恵美子 好栄 ちよえ 鈴江 はるみ かつ子 聖子 博利 清泉 白汀 高千枝 大史子 2史子 幸子 喜美子 静風 節生 淑子 夏喜 正宏 不朽

リハビリの揺れているのは父の手だ
札束に揺れた心の後遺症
父の背を憶う心が揺れるから
一言を添えた絵手紙友の顔
沢山のの人に会いたい展示会
教養の格差を埋める酒仲間
すぐから仲間命をかけた話する
車座の仲間命をかけた話する
川柳に燃やす仲間のあとを追う
ブルジョアは仲間に入れぬ紙コップ
縄のれん見栄はる仲間泣く仲間
クローンで仲間を増やす策を練る
人はみな仲間ドナーカード持つ
八尾市民川柳会 宮崎シマ子報
芸を磨いて忘年会を迎え撃つ
忘年会携帯電話ついてくる
やっと縋り戻したふたりの年忘れ
ゼンマイの余力で忘年する宴
雅子様御懐妊とのニュース聞く
ジングルベル子等に嬉しい雪が降る
嬉嬉として待ちわびて帰る雪だより
嬉しい日たこやき買って帰る
うれしい日の日記欄外まであふれ
親不幸のわたしをはめる老母が居る
恋人へ贈るセーター編み終る
水仙が冬の二人を和らげる
水仙が生きていますと庭の隅
ひとひらの水仙温暖化に狂う

笑子 房子 栄恵 汎美 喜久恵 喜美子 貞枝 一枝 規代 菁居 力 節夫 一路 森子 ますみ 和夫 年人 柳宏子 宏 己代一 のぼる 剛治 ばっは 太郎 一風 春子 柳弘

— 109 —

木の葉髪変換文字に迷いけり
 長らえて今年も耐える寒の水
 暖冬へ意地みせに來た寒い朝
 カタログで買ったつむりの冬支度
 カトレアのおがまま聞いてやる冬日
 サンマ切断器も小さき昼の飯
 ときどきはふざけて風をやり過ぐす
 歩け歩け煩惱憂さの消えるまで
 良心が変な所で顔を出す
 自分史に冬の頁が多すぎる

三幸川柳教室

三宅

保州報

軌道から外れて走る子の個性
 私の横を走り抜けてく福の神
 走り過ぎ充電しつつ往く余生
 暴走をする子へ愛の信号機
 人生を走り続けて無位無冠
 物欲に走り忘れてきた心
 疾走を軌道修正する手綱
 火の玉となって野心が直走る
 追い風に走るベースを乱される
 やんちゃして汚しておくれ白い靴
 真っ白にならぬ白紙に戻しても
 白菊をほめたらすねる青い石
 とっておきの白旗プレスしておこ
 み仏と対峙してみる白い視野
 白日に晒すと見えてくる自分
 頬張れば越後が見える白い飯
 好きなだけ書けと小切手渡されて

薫 あずき 智恵子 雅子 義子 一夫 楓 房 靖 已 正 坊 健三郎 和代 嘉平 三千子 町子 秀男 初子 みね 次根 美子 保子 豊太郎 百合子 美智子 千秀 正 甫 章子

北の海吼えて男の血が騒ぐ
 北風の音符が誘う虎落笛
 北へ流れ雲もわたしも旅をする
 また何時かいつか逢えそな北の宿
 ハイビスカスが北の話を聞きたがる
 悟り得て悠々と寝る北枕
 北国の訛りに雪の匂いする
 男坂磁石はいつも北を指す
 はしゃいでる母は悩みをかくしてる
 かくし事ないから怖くないマルサ
 ウラン処理臨界事故もよくかくす
 もやもやを隠しつついついてる同居
 かくし事増えて膨らむ鼻の穴

堺川柳会

河内

月子報

ユニークに年寄りらしい理想もち
 足並みが揃ってそれぞれの野心
 二人三脚ピタリと阿吽から決まる
 いいことが揃う優しくなれそうだ
 紅葉は超一流の刷毛ででき
 ライバルの歯まだ揃ってある負けている
 一流のホテルで風邪をもらてくる
 美しい姉とお揃い着たがらず
 飲兵衛に声をおかければすぐ揃う
 一流とは何ぞ真面目に生きてきた
 叫ぶ時ムンクに負けぬ顔になる
 湯につかり友としっかり理想論
 一流をテレビで競うシェフの腕
 夢二の絵に食い入っている二人連れ

正一 碧 桂香 満洲子 当代 めぐみ 和子 さち子 起世子 鉄治 清 公子 登美代 春蘭 美子 美代子 みつこ りつえ 昭子 小雪 文 磯子 かりん 楓 なぎさ 美波 紫

夕焼へ翺びだしそうな林檎の実
 天二物与え声よし器量良し
 揃えとくだけの全集買つてくる
 一流の包丁鯉に骨がない
 一流の哲学がある釜ヶ崎
 足並みの揃った群れがききな臭い
 豊かさの虜にならず凜と生き
 優雅ですとても楽しい料理です
 一流のシェフが忘れぬにぎりめし
 一流より心安まる人選ぶ
 一流もふと立ち止まる曲り角
 癒着ばれととうとう名前リスト載り
 場違いの席に座って喉かわく
 足音が揃う怖さを知っている
 小さな靴揃うと家が活気付く
 一流の隣の席もよく目立ち

南大阪川柳会

吉川

寿美報

盲愛のツケひと波乱ふた波乱
 盲愛へ犬の体臭消えている
 盲愛され翔ぶにとべない籠の鳥
 盲愛の犬服を着せりボンつけ
 盲愛のツケかも知れぬ好き嫌い
 盲愛がさせた罪だと詫びる母
 商人の儲けは明日を読んでいる
 儲けたらあげる狸の皮算用
 タコ焼で儲けてベンツ乗っている
 駄菓子屋の儲けなくても子供好き
 インターネットひとつでたんと儲けてる

つづや 哲平 玄也 明月 泰子 千代 梓 冬虹 アキ 八千代 日の出 舞夢 伽羅 勇太 ちや子 さくら 幸子 雅文 ひさ乃 叔人 重人 頂留子 太郎 朝子 正博 直子 三男

人の倍儲けワンマン手におえず
三倍に値札をつけて五割引き
最後の落葉見届けたのは森のリス

事故目撃それから死生観かわる
状況証拠ばっかり目撃者が居ない
見てはならぬものを見てから偏頭痛

死亡事故見てから運転止めました
お地蔵さんが目撃してた難事件
時効前未だ目撃者から探し

目撃をした方が困る駅の裏
盲愛をまぬがれている子沢山
好奇心ももしかかを追いかける

飽食の今にもしかが起つたら
どنگりが寄ればもしかの知恵が出る
ポケットにもしかをさぐる妻の勘

元締めが裁けぬ法の仕置する
銀行の総もとじめが甘い汁
元締の技あげまんをはべらせる

元締もやさしい老母を忘れない
倉吉川柳会
松本よしえ報

兎かに辰に変わって傘寿すぎ
バーゲンにとっさり買った爪楊枝
半月にぶかめと人魚のため息

潮騒もかもめ知らぬ深海魚
ハモニカもピオロも岬から聞こゆ
乙姫の住む深海に招かれた

わだつみの声が聞こえる深い海
どっさり和金があるのか喧嘩せぬ

久子

楓

文秋

東雲

慶一

柳宏子

文秋

道子

度

章久

深海で鱗を剥いだ人魚ども
深海を語る夢の城に着く
玉の奥あの日からもう諦めた

深海魚心は天を翔けている
くじの日を待つどっさり外れ券
深海で誰が歌うか海ゆかば

子兎が来てから我が家よく喋る
冬からの手紙が届く北の窓
四月から公務員です真面目です

ハードルを下げてから身がやわらかい
ありがたや麻酔からさめ痛み知る
深海で生きたる魚の知恵もらう

深海は竜宮城のあるところ
深海のマンションになった大和
深呼吸一つする間に秋暮れる

暮迫り支払いの残チエックする
閉店セール客はどっさりでも寒い
法螺吹きが帰るとっさり塩を撒く

好きだからセクハラだとは思わない
腸にポリープ深海に活火山
錦着た山から冬が下りて来る

大原川柳社
矢内寿恵子報

二人三脚軋む車の後を押す
母さんの横顔やけに嬉しそう
いいかげんお嫁きよ横顔まだきれい

横顔があまり真面目で近寄れぬ
横顔をそつと見送るそれでいい
僕の横顔整形なんかしていない

幸子

節子

明智子

明美

天雀

秋草

柳喜美子

よしえ

久子

康子

親子の段差に軋む入学に
横顔は空似と知らず声をかけ
横向いて首振らぬ子をもて余す

横顔をちらちら盗む恋心
横顔をそつと窺う午前様
ペン先が軋む男の決意の日

人生の秋横顔に軋むびより
不景気の煽りに軋む屋台骨
横顔を見せ貰うただけで酔い

軋む胸押えきれずにどう悟る
横顔に昔を偲ぶお人柄
軋む日もあった平和の三世代

横顔に怒ってますと書いてある
横顔は買ってもらえぬ小さい意地
兄弟の血が軋み出す遺産分け

栄転の椅子の軋みは妬心かも
城北川柳会
神夏磯典子報

金木犀の香に誘われて歩を運ぶ
幾年の箱に納まる夫婦箸
奥の手が袂の底で糸を引く

雨の午後静かに過去をかえりみる
面倒見よくて猫にも居つかれる
赤ん坊の声に自分を取りもどす

平凡な暮らしの中に和み
奥の手を知っているから動じない
肩の荷を降ろして生きたるのも勇氣

平凡というしあわせに気がつかず
後わずか日めくり破るのもいとし

悦子

巴子

喜美子

敏子

南花

みさえ

たづ子

はるみ

昭子

静子

あすなろ

地佳平

はじ芽

寿恵子

登美子

とし子

ただし

久留美

達子

高栄

史風

昭子

はじめ

チサ子

平凡な花で野に咲く山に咲く

風の絵を描けばきこえる相聞歌

平凡に風向きを待つ風媒花

バーゲンで探した服を褒められる

売家の旗秋風にゆれている

平凡に見えて枯淡の名人技

遣伝子が申し送ったへそ曲り

面憎い収賄の住む門構え

平凡な暮しにもある四季の彩

分が悪くなれば消えますすちの嫁

自分史のレーンの先にある灯

奥の奥極めて霞持ち帰る

人の世を描く画面は明るめに

三面鏡と遊ぶひとりの秋がある

逆立ちで奥まで吐いたマヨネーズ

悲喜劇の奥の命が愛しい

ゆるやかに生きるカーブを切るレーン

奥の手をまだあたためているゆとり

吟行に憂さを忘れた河内の湯

東大阪川柳同好会

森下

愛論報

強すぎる個性ふたたび斬られ役
ふたたびのえにして若い母となる
反省も後悔もない良い眠り
眠りから覚めると虹が消えていた
眠たそうな顔で核心突いてくる
善人に化ける目じりを下げておく
化けの皮はけて事業が簡抜ける
整形で化けた笑顔に傷ひとつ

道子 千里 睦子 あやめ 千歩 倫子 順三 小路 白峰 あい子 和子 潤子 冬虹 アキ 夕子 正美 森子 公一

五時からの女に化けるコンパクト
まっ白なエプロン似合う母が好き
夕ごはん先ず嫁はんが食べてから
うまそうな毒がお盆にのせてある
おこはん毒ある花に触れたがる
きこ雲下は毒がまだ消えぬ
ときめきを抱くと宇宙へ発火する
通天閣あんたとうちの小宇宙
残念と回りの人が言っただけ
残念が続く迷路を抜け出せず

京都塔の会

都倉

求芽報

病院の暮しも飽いた三か月
日の暮れはやや早くなり秋祭
ガラクタを売ってガラクタ買ってくる
ニューファッション好きになれないのは老いか
秋草をコップに挿して後の月
前垂れにみかん一盛買ってくる
川二つ合つて流れて京の町
こもれ日に色あざやかな森そよく
ぎんなんの実に紅葉の影かすむ
糺の森昔のままの荘厳さ
倒木の無残歴史を物語る
糺の森で故人を偲ぶ京の秋
口利いた手前ひと口乗つておく
舌足らず上手に乗せる糸電話
風船に乗って飛びたい自己嫌悪
もう一人乗せる気である船着場
絵ハガキの誘いに乗つてみたくなり

晋吾 朝子 鬼遊 度 賢子 修次 弥生 美弥子 柳宏子 愛論 笑女 春蘭 武庫坊 年代 寿美子 輝美 輝美 高栄 美智子 庸佑 典子 紫香 吉之助

自転車に乗ると聞える風の私語
皿の上もみじ乗せ目を楽しませ
調子に乗りすぐ踊りだす路地雀
ラストダンスつい乗せられている二人
案揺れて揺れて陽の目を見ないまま
ふところの案は最後にひとり出そう
弱虫が案外涙に強かった
しつとり和服の人に会う野点
しつとりと京の紅葉にとける女
ライバルの通夜しつとりと更けてゆく
女傘しつとり濡れて嫉妬する
しつとりと濡れてゆきましょ蛇の目傘
しつとりと歴史の声を運ぶ風

ローズ川柳会(前月分) 山崎

君子報

枯れ草の焼ける匂いよ遠い母
親離れ出来ない枯葉しがみつ
ヤッホー声谷川下る木の葉舟
核の世に安住と知る深海魚
蜂蜜の深いところで秋凍る
夢の中枯れ野にひとり迷つて
ワープロで深い思いが伝わるか
友と合ひ深い縁の五十年
人柄の深き相手を選ばない
枯れてゆく花に拍手を惜しまない
枯れぬよう眼鏡も代えて辞書を繰る
師走来て女おんなじことをする
口惜しいなお札が枯葉になつて
堂々と枯れてみせよう一本松

楓楽 宏子 波留吉 萬の 欣之 美穂 求芽 達子 シマ子 正坊 友照 百合子 女 哲子 トミエ 貴代子 まさお 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 君子 義子

冬枯れは今朝も落ち葉をかきあつめ
柿ひとつ落ちてても還る土がある
雅子

川柳塔おつばこ吟社 木村あきら報

盜聴をされたか手の内見透かされ
老い一人心の花も枯れかかる
文仙

オゾン層地球吐息で穴があく
均等と言えど厨は妻の城
勝

二千年コンピュータもつらたえる
坊太郎

交わす度酒に吞まれて出る本音
子のために火中の栗も拾うかも
放任

さよならは車が角を曲るまで
ウインドーに吐息つく筈金が無い
治延

若き日の小さな嘘が癌となり
トゲを持つバラに水やり肥料やり
玲子

まだまだと言てる内に婚期過ぎ
七勝七敗後一日に賭けている
マツエ

口ゲンカしながらも越す年の暮れ
いさむ

高槻川柳サークル卯の花 (前月分) 川島諷云児報

窓際に追いやられても明日はある
雨の鬱窓のもみじに救われる
義一

ひそひそと相談僕のことらしい
人形になるネクタイをゆるく締め
稲子

ネクタイをゆるめて話す人という
ネクタイに縁ない職に自負がある
重人

貴方との出会い水にも火にもなり
そもその出会いは神の悪戯か
節子

活恵
ルイ子

出会いたくない人に逢う午後のうつ
運命の出会いで熱くなるドラマ
泰雄

出会い頭火花を散らす好敵手
月満ちて吾子抱いた日忘れな
吉之助

さよならをしたが背中が泣いていた
逆光線の中でさよなら影がのび
澄子

ぬくもりに別れの言えぬ春の宵
散骨のさよならの声風が消す
萬の

さよならの語尾が濁っている未練
振り向かぬ背なにさよならそつと言
求芽

さよならはしたくなかつたさよなら
さよならと振るハンカチが美しい
満寿蔵

さよならを言わしてくれぬ細雪
見えなくなつてからサヨウナラサヨウナラ
石舟

寺の門潜れば秋の風の中
勤労に感謝したいがリストラに
メ女

もう一人の自分に嘘をつく自分
年増になつたけど誘つて下さいな
スミ子

禪寺の雪はしとしと降つてよし
知恵熱があればアテランスを脱がす
しげお

この世でのことはこの世で済ませたい
柳柳塔みぞくち 小西 雄々報

女心ほのかに匂う洗い髪
洗濯のできた小川が懐かしい
波留吉

木枯らしへ大根洗い急かされる
朝シャンはしても食事はせず出掛け
靖巳

旅の宿苦勞を洗い蝶になる
大山を洗う初雪目にしみる
柳宏子

女心ほのかに匂う洗い髪
洗濯のできた小川が懐かしい
一笛

木枯らしへ大根洗い急かされる
朝シャンはしても食事はせず出掛け
治三郎

大海原見れば心が洗われる
新世紀心身洗い乗り出そう
久江

ときどきは命を洗う風に会う
いい事を願ひ善意の我を洗う
智恵子

手を洗ひ病む身に愛をさしのべる
五感みな風で洗つて余生の灯
康女

同病の痛みが友の輪を作る
何としよう痛いほど手を握られて
雄々

うるさいが帰れば淋し孫一家
うるさいなまたお願いの選挙戦
弘子

うるさいと親に怒鳴っている茶髪
時間にはうるさく定刻五分前
蛙城

娘のピアノ隣が弾けばうるさくて
声高な小ギヤルうるさく避けて乗る
鹿太郎

饅頭のアンにうるさい総入歯
うるさいのが静かに飲んでいる無気味
東吉

赤い鉛筆で困んだ孫の誕生日
まだいける尻にキャップを付け削る
苑子

すすまない鉛筆おいて雲眺め
鉛筆も合格鉛筆にホツとする
辰郎

鉛筆で半生綴る放浪記
鉛筆の芯が知ってるお人柄
呂万

奥の手を初手から出したお人好し
奥の手があれば知りたいガン患者
一齋

奥の手は派男を困らせる
奥の手に核を持つ横車
甚一

盛之
信博

すみえ
路子

けい子
狸村
和歌子
仁緑
松風
基

補聴器を外し奥の手出す古老
格安もお気に召さぬと売れ残る
期限切れ格安で買う猫のえさ
格安に女の財布走り出す
建て売りの安さ不安が先に立ち
格安の旅でも楽し湯があふれ

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

条件は聞くまで返事出来ません
シャボン玉条件なしに塀を越す
条件の示されぬ基地苦渋増す
結局は捨てられなくてとの棚
情熱が冷めると全て無に感じ
象の鼻棚からぬけて夢さがす
干渉はしない約束同居する
棚越えて子馬自由の草を食む
人形はおもちや箱から嫁に行く

はたる川柳同好会

田辺正三郎報

おふくろの味の秘密に酒があり
花婿の母が一番酔っている
目出度いと言ひ酒を飲み
紅白の幕が引き立つ鏡割り
酒飲まぬ二人の夕餉直ぐ終り
酒飲めぬ人に会計役させる
酒愛し酒におぼれて逝った人
ボジョレ入荷まだ貼つてある十二月
しあわせがつく気がせぬしあわせ
続編のない夫婦劇橋が入る

萬 的
東 雲
昭 二
徹 子
白 光
さよ子

慶 子
喜美子
香 住
能 子
欣史子
あずき
弘 直
シマ子
清 芳

昭 子
喜美子
竹 二
ただし
雪 子
見 清
柳 童
実 史
博 史
よろう

鳶が鷹どこで変ったDNA
繁盛が続いていくという幻想
物知りの今買い時と言った株
物知りになり回されるお嫁入り
おんな三人寄ればかなりの物知りだ
又あいつ物知り顔でしやしり出る
物知りで永らく庶務課係長
物知りに話を聞くこと長つたる
物知りの患者お医者の手をやかせ
物知りが葬儀差配をする田舎
物知りと凡人がいて世は丸く
しうもないことを沢山知っている
コンピュータ世界騒がす二千年
竜の背で大いに遊ぶ二千年

川柳塔打吹

米田 幸子報

蜂蜜のびんを舐めてるおじいさん
ばあちゃんかひよこひよこ出ては話とる
自惚れて自慢の芸を披露する
チャーミング自惚れ顔もまた可愛い
自惚れが過ぎて二の足出て来ない
夜の町自惚れ者の多いこと
自惚れて書いた寄附金引っこめす
自惚れてミス日本にプロポーズ
興和紡跡にひよこひよこ蟹気楼
蜂蜜の甘さを知った落とし穴
自惚れ的美貌益々艶が出た
ひよこひよこ可愛い孫が歩き出す
自画像に自惚れの眉太く書く

緑 骨
千里志
直 次
敵 子
保 子
祥 風
螢 柳
久 子
正三郎
セツ子
勝 子

新 雪
正 安
桂 子
美ッ千
松 盛
逸 子
セツ子
富 枝
勇喜男
たけ代
定 明
石花菜
善 江
一 枝
喬 水
よしえ

和 枝
かつみ
きみ子
信 子
玲 泉
玲 坊
博 丈
和 歌
一 夫
芳 光
螢 子
睦 子
完 司
玲 子
雄 々
節 子
幸 子

ライバルが転べば蜜の味がする
蜂蜜が欲しいと北の島が言う
自惚れる程の男と出会いたい
自惚れも言えぬ小さな器です
旗日すぎ急いで巻いている私
罵とみてみすみす蜜をなめそこね
自惚れた喉に非情な鐘二つ
どぶ川も泡立ちそうな師走なり
ガキ大将蜜蜂の巣をにらんでる
心にも日本国旗を持っている
ひよこひよこ男の前にしやしり出る
外面がよくてひよこひよこ出てしまふ
哀しみをこらえひよこひよこ踊らんか
冗談まじりひよこひよこ痛いところ突く
ひよこひよこ主義を変えてはラッパ吹く
蜜の香が身八つ口からこぼれ落ち
自惚れの強い河童の甲羅干し

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

世の蟻三歩下った母の背な
父母の背から自然にせんにつく蟻
さわやかな娘にであうバスの中
後悔はしない男の向う傷
苦い水飲まされてから目が覚める
後悔は親の小言も上の空
目かくしにちと大きなカレンダー
妃殿下も要ります妊娠カレンダー
カレンダーをめくる元気のある余生
嫁いだ娘の部屋にわびしいカレンダー

稲 子
和 子
スミ子
泰 雄
吉之助
一 笛
柳宏子
あやめ
満寿蔵
波留吉

外堀が埋まるプロポーズの風を待つ
一日を埋めるせわしい十二月
穴埋めはすると先輩それつきり
平和への叫び地雷は埋めないで
老夫婦やつと二人の水いらす
やれやれをまだまだにするフルムーン
生きたとはこんなに激しい人の渦
末っ娘が嫁ぎ夫婦の熱いお茶
肩の力抜くときがない回り椅子
リストラを躲した椅子に深く掛け
夢ぐらい持たねばこの世つらすぎる
晩学の川柳余生の生き甲斐に
爪に角つけてリベンジ考える
初恋も老いらくの恋も詩仙堂
少し汚れて都会の鴉らしくなる
死火山になりつつ頭の毛が抜ける
整形のあととは笑わぬ美しさ
塗れるだけ塗って美人の枠にいる
どうせも十年ぐらい酒たばこ
後悔を足場にのぼる縄ばしこ

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

冷酒がじわじわ利いた泣き上戸
断絶をされても絡む親の情
無言劇じわりじわりと攻める妻
百罪を消すひとつずつ石を積む
子の携帯母のメールが届かない
葬式に寂しく積もる牡丹雪
刻々と音痴へ唄の番迫る

節子 紫香 靖巳 活恵 治三郎 秀夫 重人 求芽 砂輝守 石舟 義一 澄子 真笑 惠美子 晴美 慶太 しの 諷云児

騙されたおんが狙う僕の首
じわじわと愛がふくらむ母の愛
ちちははに石限りなく積んでいく
じわじわと尿管ゆるする酒の量
鳳仙花積もる思いを打ち明ける
包囲網じわじわ犯人を追いつめる
一本の蔓断絶をくい止める
年月が崩してくれて厚い壁
じわじわとおとこ手込めにするお酌
雪まんだら影も断絶山頭火
子育てに母は積木をくりかえし
婿の血を入れて暖簾を守り抜く
ふりむけば未練が積もる冬帽子
貨車過ぎたあとも親子に残る音
冷や酒が腹から足へ効いてくる
断絶の兆しが見える遺産分け
断絶がいつまで続く唐辛子
鳩死んで少年の背に雪積もる

川柳高知

川竹

松風報

針金に命あずけた菊人形
倒れても首もち上げる菊の花
菊日和菊にかこつけ菊の宴
ふれあいには菊を見る人作る人
お色気をふりまき彼氏探す菊
菊作日ここ数日の天下人
亭主より大事にされている菊花
酒酌めば二倍楽しくなる菊見
居酒屋に男を誘う灯が点る

妙子 大吾 ヒサ子 北歩 順風 慕情 銀波 ふさる 愁女 ツネ 井蛙 黙人 千加子 花葉 花峯 五楽庵 道太郎 幸 美々 熊男 孝雄 酒仙 やすき 快風 良雄

赴任地の灯が妻を恋しがる
原発へ反対しても灯は消えぬ
灯が消えたような村にも来る祭
一灯を守り理想に遠くいる
丸い灯の中で育てて親思い
家の灯が見えて再び千鳥足
過疎の灯を燃え上がらせる秋祭り
夜の道灯みつけて急ぎ足
甘えたりすねたり愛の灯は消えず

川柳塔鹿野みか月忘年句会 土橋 螢報

護られて信念のある運転だ
おそこかな地に泣く民の声がある
脳味噌が甘くなったかよく眠る
たそがれの女には見えぬ草書の美
世紀末あの手この手で騙すひと
浮き沈みあつという間に世紀末
介護保険まだ揉めている世紀末
世紀末どなたが変えるどう変える
謎とけぬニュース残した世紀末
なんたつて不安だらけの世紀末
雪が来てさわぐ世紀末のはなし
軌道修正できないままに世紀末
煙立つ公害という焚火にする
人の話を煙に巻くとは許されぬ
四畳半たばこの煙そつと吐き
湯けむりの旅が大好き老い二人
山寺の煙静かに秋を焚く
わたくしをまろやかにする香の煙

てるみ 京子 和江 佳風 千鳥 圭風 典雄 祥子 松風 喜与志 睦子 きみ子 茶子 久枝 節子 汲香 くに子 はるお 諷人 宣子 みどり 八重子 敦子 弘子 明美 ひろ子

菩提樹の落葉の煙はほとけ色

スモッグの中で延命策を練る

古老言う戌亥のトイレ辰巳蔵

竜巻の日本海の蟹うまし

恐竜の住み家となつたおもちや箱

わが世にも竜巻というものが棲み

目を閉じて竜の姿を描いている

龍年が三回いまだ独り者

地面から昇れないまま龍は古い

登龍も時どき天下りをする

龍の子の裏切りに会うことばかり

好色な龍の落し子の尻尾

富柳会

池

森子報

自分自身を信じ白紙で立ち向かう

モデルハウスの出口に捨ててある吐息

幸せの寝息一男一女あり

怒つたら負けヨメさん異星人

妻の寝息はみじんもぼくを疑わぬ

ラムネ玉拾つてからの旅はさすらい

春になつた拾ひにゆこう森の体温

子午線に戸惑っている異邦人

小さな息一つわたしの演技です

淋しいとボツと書いた秋のメモ

ストレスを流す点滴屋台酒

息かけて私の鏡よく磨く

点取り虫の親子の鼻が尖つてゐる

冬木立の中で小さなサイコロを拾う

石でさえ撫でてやつたら温うなる

汲香

あづま

武子

野草

かつ乃

初子

保子

孔美子

和子

隆風

富久江

螢

射月芳

しげお

笛生

幸子

明子

英一

吞舟

定男

扶美代

美代子

柳宏

千里

長生

蓄水

大鷹

漬物石私も老母がしたように

川底の石は昔を語り出す

石が無口で笑いの面がまだ彫れぬ

柿の種拾つてからは友が無い

曼珠沙華と異なる毒で撃ちました

宝石箱に女が溜めている野心

息詰めて昔聞いてた父母の口論

手も足も欲しいと石が愚痴を言う

異なことの二つに鬼の持つ涙

異を立てるとき一匹の熱い骨

一円貨も枯葉も秋のてのひらに

真実を見たくて紙を陽にかざす

石垣のひとつの石になり果てる

得意わざの真横に弱点があった

裏がわの音を拾った首の冷え

川柳藤井寺

高田美代子報

きつかけを作つてくれて有難う

俄雨相合傘がきつかけに

きつかけは相槌うつた旅靴

妹の結婚式で見初雲へ二度三度

きつかけが欲しくて足を鍛えてる

碁石打つ手がきつかけで友となる

仲直りちようど良きそな風が吹く

きつかけは入試に落ちた者同士

はら吹きの話が合つてくるお酒

彼女の歯きれいそれから好きになる

家中をうまく動かす母黒子

妻子

悦子

鬼焼

元紀

マリ子

大八

初太郎

晴美

良子

欣之

たつお

比呂史

夢成

天笑

森子

春蘭

志洋

敦子

悦子

利武

アキ

瑠美子

扶美代

かつみ

美子

宗一

喜代子

黒いうわさ七十五日でおさまらず

黒板を背に教室が荒れている

黒帯を締めると消えた片えくぼ

喪服着る女が抱いた冬の傷

喪に服す女に黒が重くなる

ふるさは墨だけで足る雪景色

究極のおしゃれの黒に凝っている

黒幕が事件を謎にして笑う

背信の私を試す発車ベル

あと十秒ベッドが僕を引きとめる

ぎりぎりまで男の骨を抜く悪女

少し前に教えて下さい死ぬ時を

ぎりぎりまで心得てます女の酒

ぎりぎりに爆発強い河内弁

一枚で揺れる夫婦の首の皮

ふと合った目と目それから南風

泣いてばかりおれない黒を脱ぎ捨てて

「先に行く」伝言板は不機嫌で

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

世紀末何とはなしに気ぜわしい

老人会 素人役者に声かかり

ばあちゃんの好きな役者はドサ回り

オペラグラス役者の皺を見てしまふ

立役を陰で支えている役者

フアッションのタイトルで買う月刊誌

タイトルへ鯛が刎ねてゐるありがとう

十連覇 偉業を遂げたやわらちゃん

出足そぐように待ったの長電話

昌子

花梢

重人

大八

葉

昭子

正一

淑子

婦美枝

六点

修六

桂子

みよ子

栄一

和樹

鐘造

たつお

美代子

正坊

知香子

紫香

寿美子

庸佑

慶子

重人

一笛

柳宏子

人生の土俵に待ったなんかない
一人分のバック並べた物業屋
限界に男の涙涸れている

新世紀へ北の四島先送り
衰える五官美味しき妻らない
十二月八日の朝は覚えてる

カット絵が楽しい毎月の句報
聞いている弔辞どこかで聞いたよう
草笛を吹けば童話が甦る

一汁一菜父母の時代で消えました
周信 女

初恋の実らぬまがいとoshi
始めてのデートもやっぱラーメン屋
べったんべったん昔を想う師走なり

焦らずに坂の途中で深呼吸
ああそうだ一で始まる新世紀
はじまりは街でもらった花の種

この坂を越せば楽しい花園か
新世紀登り切った広い岡
歩み寄ることを覚えた老いの坂

坂道で弱気を叱る亡父の声
少年の進路越せない坂はない
大正の時計命を刻む音

渡る世に始めの苦勞効いてくる
わだかまり消えていつきに登る坂
始めから二次会までを組んである

転んだを作り笑いで消している
哲子 藍

みつ子 藍

キク子

ミサヲ

てる

山崎 君子報

風云児

ただし

博史

英子

文学ルート川柳募集

文学ルート(松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市)

作品—文学ルート(5市)周辺の自然や衣食 賞—大賞1点・奨励賞5点・佳作賞若干

住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳(未発表作)

宿題と選者(各題2句以内)

松江市「夕映え・湖」

尾道市「うず潮」坂道

今治市「タオル」鯛めし

松山市「坊ちゃん」いよ餅

高知市「日曜市」カツオ

第2次選者

(注)全日本川柳協会会長

理事長 吉岡 龍城

常務理事 橘高 薫風

応募方法—専用の応募用紙または官製はがき、封書に書かれた作品(FAXによる応募可)。応募作品には「宿題」及び氏名(ふりがな)・住所・年齢・性別・職業・郵便番号・電話番号など明記のこと。雅号の場合は本名も書き添える

応募資格—年齢・職業・性別・国籍は不問

出品料—無料

応募締切—平成12年3月31日(当日消印有効)

発表—平成12年8月、入賞者に通知。

◎「宿題」によって応募先が異なりますので、どの「宿題」を選ばれても構いません。

◎どなたでも参加できます。一人でも多くの応募をお待ちします。

主催 文学ルート形成推進協議会



8ミリ映画と白溪子さん

黒川 紫香

「えっ僕の追悼文を書くんやて、ほんなあほな（少し間をおいて）書くんやったら8ミリの事かな」

と言われそうな生真面目で、ぶっきらぼうでちよっただけ頑固な白溪子さん。

忽然として逝かれた。得体の知れない皮膚病に医者を変えている間に駅の階段を転げ落ちたり、いろんな疾患が重なって最後は咽喉出血のショックで亡くなった。生前病名を尋ねても「判らへんのや」と邪魔臭さそうに言われたのが判る気がする。気にもしなかったが大変な事だったんやなと今にして思う。

私が白溪子さんを知ったのは、刎頸の友正本水客さんが大阪鉄道管理局の運転統計課に勤めて居た頃、部下であった彼を紹介された。其の大鉄局内に大鉄畔柳社という柳社があった、麻生路郎先生のご指導で後に川柳雑誌社の副主幹になられた福田山雨楼さん、そして浜田久米雄、植山九天、岡田某人さん等々錚々たるメンバー、水客、萬的さんとその一人

で杜的、白溪子、求芽さん等も加わった。その水客さんと白溪子さんの奥さん同士が

ご姉妹である事は知る人ぞ知るでありそれも川柳の絆と言えよう。白溪子さんは元来無趣味の人で、現役時代は酒も少し飲む程度だったが、職を辞してから流行り出した8ミリ撮影に凝りだして、高槻8ミリクラブに入会し本格的にやり出した。ご多分に漏れず私も松川杜的さんも加わり、同じ国鉄で番傘同人の久保和友さんも交じり、京都の杜的さんの御宅でしていた塔の会の川柳会の後で8ミリ競演会を催した。和友さんが一番上手だった。

白溪子さんの畢生の大作は昭和六十年九月新阪急ホテルで催された、四百数十名参加の当時の主幹西尾栞先生ご夫妻の喜寿金婚祝賀川柳大会の作品である。朝から晩迄十時間かかった前代未聞の行事を8ミリに撮り、おまけにトーカー機が手に入らなかった時代で音

声を別のカセットに入れ、ナレーションを息子の嫁にさせたという凝った豪華版である。そのテープは今でも川柳塔本社事務所の棚に保管されている筈である。

その事を以後誰にも話さなかったのも彼らしい。逝く五ヶ月前に奥さんを亡くした時もかほそい声で「家内が死によったんや」と伝えただけで病状その他聞いても一切喋らなかつた程寡黙の人だったのが、彼が亡くなる直前に発行された川柳塔十一月号の自選句に奥さんを偲ぶ五句の筆頭に

極楽に着いたと妻が夢にでる

と発表されているのを見て愕然とした。やはり亡き夫人の事しか念頭になかったのだと思う。

その奥さんの所へ小走りに旅立たれて間もなく再会されて四方山の話をするのだらうと思う。

遺 句

湯豆腐の湯気に向こうは皆他人

分校で学び故郷忘れない

中流の暮らしとゴキブリ思つてず

我慢していても涙が先に出る

本名 辻 勇雄

戒名 釈 勇善

平成十一年十二月三日没 享年八一歳



北山悟郎さんを偲んで

玉置 重人

悟郎さんの訃を知らされたのは、一月三日の昼過ぎの娘さんからの電話でした。

しばらくは言葉もなく、娘さんと奥様の涙声を聞けばかりでした。

昨年末に奥様から入院したとの連絡を受け、地元の病院へお見舞いに伺った時は、しっかりした口調で話し合えたのに、残念でなりません。頑張って下さいとお別れの握手したあの手の、温もりが忘れられません。

憶えば悟郎さんとは随分昔から、句会でお目にかかっているのに、言葉を交わすようになったのは、数年前からのような気がします。

以来本社、南大阪、もうけいと、各句会で一緒にさせて戴き、本社句会ではいつも早めに来られて私の席を確保して戴いたものです。

特にもうけい句会は、悟郎さんにすめられてから出席するようになって、今日まで続いているのですが、すすめたご本人がいなくなつて、淋しい限りです。句会の帰り道が一緒

なので同じ電車で梅田まで出たもので、地下街の喫茶店でいつも長い間、川柳と戦傷の話に花を咲かせたものでした。

そう言えば悟郎さんとは、何べんも入った喫茶店だったが、今まで悟郎さんから、復員してからの苦労話は聞かされなかったが、片足を戦争で奪られた身では、並々ならぬ苦労があったことは想像に難くはないが、いかにも剛直の士らしく、何くその気力ですよと笑うばかりだったが、奥様の内助と、娘さんの優しさはいつも感謝されておられました。

伴走の妻と人生かけ抜ける

妻と娘が気儘な僕の桶となる

特にお孫さんの話になると、邸宅の前で写された振袖姿の写真を、目を細めて見せてくれた時の姿が、今でも目に浮かびます。

彼は又禁酒禁煙の人でした。訳を聞くと激戦の戦場で、所属部隊が全滅の中で、たった一人仮死状態で生き残ったという、正に九死

に一生の体験をしたので、当時の戦友のことを思うと、酒煙草などとてもやる気にはならないと律儀そのもののお人柄でした。

只困ったことは、会計の伝票はいつも取ってしまふことで、随分と借りを作ってしまつたが返す術が無くなつてしまいました。

本社句会に於ける、悟郎さんの大きな呼名は圧巻で回りの人を、驚かせたものでした。句は人柄を表わす、とか言われますが

手応えがあるから肝を据えている
決意の男真正面を向く

ああ桜男魂地に墜ちる

空耳か亡き戦友の声耳をさす
汗涙無駄にはすまいひた走る
不器用に歩き続ける足一本

終幕を飾り度く汗流して

等々いかにも悟郎さんらしい、硬派の句が多いが時には

三人の中の一人在が妬いている

のように、ハツとする句も発表された。が、
圧巻は平成九年度路郎賞準優秀作第二席の一徹の骨の硬さが邪魔となる

で賞のレプリカを抱えた、悟郎さんの姿はいかに嬉しそうに輝いておられました。

謹しんでご冥福をお祈り致します。

愕然と柳友の訃を聞く虚ろなり

重人

柳界展望

〈田中新一選〉

きょうもまたいのちもら
つて生きている 横田鎮
なお、本社同人の村上剛
庵の三氏が薫風選、酒井一
壺氏が新一選の十秀に選ば
れた。

★第32回島根県芸術文化祭
の入賞作品が決まった。川
柳の審査員は本社同人の尼
れいじ・原章峰・松本文子
の三氏で、応募句数700
句の中から入賞7句・入選
42句を決定。本社関係の入
賞は次のとおり。

★第七回相生市もみじまつ
りは11月7日、相生市総合
福祉会館で開催。本社同人
の受賞者は次のとおり。
事前投句の部

〈知事賞〉

生かされている面白さ鳥
になる 佐藤 治代

〈銅賞〉

明日咲く蕾に声を掛けて
置く 園山多賀子

★朝日新聞なにわ柳壇の平
成十一年度の十秀が決まっ
た。最優秀句は次のとおり。

〈橋高薫風選〉

空爆を告げるネクタイ春
の色 竹田みずき

〈相生市議会議長賞〉

大切に遊ぶわたしの残り
時間 岸 桂子

発表大会の部

傘をさす血のつながりの
無い子にも 森田 文

豊かな耳が拾い集める良
い噂 山本 玉恵

★第11回ふれあいの祭典川
柳祭発表大会は12月3日、
兵庫県民会館で受賞式と句
会が行われた。

〈文部大臣奨励賞〉

鉄砲を担ぐまん画はもつ
描かぬ 三輪美智子

なほ、本社同人の受賞は
次のとおり。

〈ふれあいの祭典実行 委員会代表会長賞〉

男一匹永遠という駅に立
つ 高田美代子

〈時の川柳社賞〉
片棒を担いでからの失語
症 三宅 保州

〈朝日新聞社賞〉

ポツリポツリ重たい雨に
なりそうだ 川上大輪

★第35回川柳塔きやらぼく
忘年句会は、12月12日、米
子市観光センターにて、1
40名の参加を得て開催さ
れた。本社関係の秀句は次
のとおり。

飛魚は夕日の中へ消えた
のか 小島 蘭幸

にんげんがいつばいで寒
い広場だ 新家 完司

偶像が針の穴から崩れ出
す 野口 節子

新同人紹介

宮 野 みつ江

— 薫風・狸村・ダン吉推薦 —

夏 目 健 一

— 天笑・諷云児・洋々・公弘推薦 —

山 本 益 子

— 天笑・諷云児・洋々・公弘推薦 —

中 村 金 祥

— 天笑・諷云児・洋々・公弘推薦 —

うつらうつらと鉛がとけ 三位植田一京、四位鈴木公
てくる 小島 蘭幸 弘、八位川島諷云児

★川柳ふうもん吟社第18回
没句川柳供養大会は、12月
12日鳥取市の鳥取共済で催
された。出席者は132名で本
社関係の受賞者は次のとお
り。総合成績一位両川洋々、
主役には成れぬ番茶と心

のひらにもつすぐ動く
風がある 鈴木 公弘

妻という手形に印が押し
てない 土橋 螢

主役には成れぬ番茶と心

得る 森山 盛桜

▽出版△

淡い色ばかりの中で眠く
なる 石谷美恵子
干涸びて浮気の虫が巢に
戻り 石谷美恵子
成仏を願う鬼籍も銭がい
る 最上 和枝
★第一回吉本川柳没句供養
大会は12月17日、大阪道頓
堀「くだおれ」で開催、本
社同人の秀句は次のとおり。
少子化へ桃をどんどん割
らせよう 政岡日枝子
もう僕がこけても誰も笑
わない 村上 剛治

▽人事往来△

■12月12日、米子市観光セ
ンターで行われた川柳塔き
やらぼく忘年句会に薫風主
幹は出席、兼題「頭」の選
をつとめた。

▽同人消息△

毒のないカレーを炊いて
いる美人 高田美代子
骨壺でまだ妬いてるか騒
がしい 小西 雄々

■板尾岳人副理事長(堺市)
は、平成11年度大阪府商工
会の堺商店連合会役員とし
ての功績に対し、大阪府知

事から表彰を受けた。

■平松かすみ理事(寝屋川
市)は11月3日、寝屋川市
文化連盟から、永年にわた
り公民館サークル活動の川
柳普及に貢献した優秀役員
として表彰され、金盃を授
与された。

■遠山可住参与(篠山市)
は「ニューひょうこ(兵庫
県知事公室広報課発行)」
12月号の「人間紀行」に「川
柳を通じ同世代と老後の生
き方を探る」と題して「川
柳ささやま社」主宰として

近鉄小劇場の「王将」の主
役坂田三吉をつとめる板尾
創路さんは本社副理事長板
尾岳人氏の御子息。

訃報

■伊藤定子さん(前平
城の会主宰・奈良県)
は、12月14日病気のた
め死去。82歳。告別式
には宮口笛生副主幹・
中原比呂志常任理事が
参列、お見送りした。

■菅井智水庵氏(元同
人・三幸川柳教室前主
幹・和歌山市)は、12
月24日病気のため死去。
78歳。告別式は26日、
本久寺で行われ、柳人
多数がお見送りした。

▼訃報▲

■上田翠光氏(元参与・奈
良県)は、10月30日病気の
ため死去。84歳。遺句「献
身の二字貰ってくれた妻」

■辻白溪子氏(参与・川柳
サークル卯の花相談役・高
槻市)は、12月23日病気の
ため死去。81歳。12月25日
公益社会館高槻で告別式が
行われ、薫風主幹はじめ、
紫香・柳宏子・鬼遊相談役
ほか多数がお見送りした。

■北山悟郎氏(同人・生駒
市)は、1月3日肺癌のた
め死去。80歳。1月5日・
6日にひかりが丘公民館で
行われた通夜・告別式には
薫風主幹はじめ、笛生副主
幹・楓葉副理事長・柳宏子
相談役ほか多数が参列した。
法名・淨岳明智信士。

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 会 梨 花	19日(土)午後1時から 無駄・好き・A・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子
城 北 川 柳 会	19日(土)午後1時から 悟る・スリル・宝・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岸 和 田 川 柳 会	19日(土)午後1時半から 釘・経験・好意・細工	市立福祉総合センター 2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	20日(日)正午から 寒気・信用・書く・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	20日(日)午後1時半から 気晴らし・控え目・医者	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	21日(月)午後1時から 進む・パレード・古書・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	23日(水)午後6時から 笑い・逸物・ウルトラ・鋭利	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前10時から 食べる・鼻・週末	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	26日(土)午後6時から 秀才・やがて・重い・侍	東大阪市立社会教育センター 2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川 柳 ふうもん 吟 社	27日(日)午後1時から 世の中・ゼロ・やがて	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
はびきの 市 民 川 柳 会	27日(日)午後1時から エレガント・むつつり 油断・「争う」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	28日(月)午後1時から 箒・モラル・実物	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	28日(日)午後7時半から 雪・針・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	3 日(木)午後 1 時より 専門・羨・掃く	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	4 日(金)午後 1 時から 雪・目・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	5 日(土)午後 1 時から 並・すべて・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川 柳 塔 みちのく	5 日(土)午後 4 時から 面白い・花道・ほどほど	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 唐津支部	6 日(日)午後 1 時半から キッチン・鈴・のびる	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
ほ たる 川 柳 同 好 会	8 日(火)午後 1 時から 歌う・細い・鬼	豊中市立登池公民館 阪急・モノレール登池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	8 日(火)午後 1 時半から 伸びる・贈る・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス④番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	10日(木)午後 1 時から 逃げる(共選)ねばる(折句)さしみ	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
八尾市民 川 柳 会	10日(木)午後 6 時から ときどき・叱る・足・集金	八尾市文化会館 4 F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 打 吹	12日(土)午後 1 時から ジャンケン・清廉・秘	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	12日(土)午後 1 時半から 売る・雪・神	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 塔 わかやま	13日(日)午後 1 時から 関西・おそろく・ブーム 連想句「◎」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	14日(月)午後 1 時から 暇・好き・しっかり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 5 分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
高槻川柳 サークル 卯 の 花	18 日(金)正 午 から 脈・怖い・路地裏・いたわる	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩 7 分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児

編集後記

★西宮に三十年住みながら

今まであまり宵えびすにも十日戎にもお詣りしたことがなかった。一月十日の西宮北口句会に備えて、九日に年間賞のカップ等を受取りに、西宮戎神社近くの店へ行った。丁度、宵えびす

で凄人出であった。みな手に手に福笹を持つている。私も急にお詣りしたくなり

お店の人に聞くと、自転車も荷物も預かりますから一寸行つて来られたらと、気軽にすすめてくれた。

★おまつりの出店は昔から変らず、やさそばやいか焼きなど食べ物のお店が多く、おいしそうな匂いの中、ぞろぞろと人の流れが続く。急ぐので人混みの間を縫うようにして、ようやく本殿に辿りつく。商売の神様で

はあるが無病息災、今年の無事を祈り、福笹の店を横目に家族連れの人々の間をすり抜けカップ店へ戻る。

★慌ただしのお詣りだったが、思いがけない御利益が待っていた。お詣りの前にカップ等の支払いを済ませていたが、帰ると「先程のは割引きを忘れていたので一三〇〇円お返しします」とのこと。私がお詣りしている間に店の方が気がついて領収書を書き直して待っていてくれた。もしお詣りせずに帰っていたらそのままになっていたところ。貴重な一三〇〇円であった。

★一三〇〇円の金額が問題なのではない。それに気のついたお店の人の正直さ、そしてタイミング。御利益なんかではないのかも知れないが、それを御利益と思うのは人間の弱さなのか、美しさなのか…。(み)

「六賞回顧篇」を

本年は二十世紀を振り返る企画が、川柳塔社でもいろいろ考えられていることと思いますが、私は六賞(路郎賞・川柳塔賞・渺湖抄・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞)の回顧篇を取り上げて頂くよう希望いたします。

この六賞については、塔社のメーインイベントとして多くの会員の関心を呼んでいるところですが、

☆昨年十月私は初めて川柳塔の路郎賞準賞を頂いた。準賞とは言え、自分には遠く及ばず、無縁のものと思つていたので、嬉しさはとも言葉では表わせないほどである。

その日の日記に感想を書こうとして浮かんだのは、「栄光の日も一日は二十四時」(薫風)の句であった。まさにこの句は私の心境にぴたりとあてはまる。

残念ながら過去のことだからない。塔社も、最近では同人・誌友とも著しく増加している折でもあり、この辺で六賞の意義・歴史(受賞者・受賞句等)といったものを緋いて下されば、会員一同、一層の興味が湧くのではないかと考えます。

形式はどうでも構いませんが、ご一考頂ければ幸いです。

石原 靖巳

名句はいつまでも共感を晴れや喜寿とは言えどどうよぶもの、私にもいつかは人の記憶に残る句が生まれ尤も御本人は俳句とおっしゃっているが、

うちに、栄光の一日は、あつていたので、嬉しさはとも言葉では表わせないほどである。

☆詩人サトウハチロー氏は川柳を「何でもよむ」「五七五でよむ」と言われたが、その妹佐藤愛子さんは、七歳になられた時「秋晴れた人の世のはかなさ、残されたる人の悲哀をしみじみと感じる昨今である」。(希)

暮れから新年にかけて同人の計報、御近所の計が相次いだ。この句に、うたかたの世のはかなさ、残されたる人の悲哀をしみじみと感じる昨今である。

「秋晴れた人の世のはかなさ、残されたる人の悲哀をしみじみと感じる昨今である」。(希)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（4月号）

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

作品募集

4月号発表 (2月15日締切)

川柳塔 (8句)	橋 高 薫 風 選
水煙抄 (8句)	河 内 天 笑 選
愛染帖 (3句)	波 多 野 五 楽 庵 選
茴香の花 (3句)	宮 西 弥 生 選
課題吟 (3句)	「キッチン」
	「鈴」
	「のびる」
初歩教室 「はい」 (3句)	岸 本 宏 章 選
	須 郷 井 蛙 選
	村 上 ミツ子 選
	吐 田 公 一 担当

5月号
課題吟 「あっさり」「島」
「闇」
初歩教室 「焼く」

本社2月句会

とき 2月7日(月) 午後5時半
ところ アウィーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「ゼロ」

「毒」 高 橋 夕 花 選
「背く」 高 杉 千 歩 選
「舞う」 小 池 し げ お 選
「火」 西 出 楓 楽 選
「橋」 橋 高 薫 風 選

席題 1題 当日発表 (各題2句以内)

会費 1000円 投句料 500円

本社3月句会 6日(月) 予定

兼題 「カリスマ」「あかり」「姫」
「願 い」「様」

夜市川柳募集

第9回「鳥」 平 山 繁 夫 選
ハガキに3句 2月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺 川 柳 会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価 六百元 (送料76円)

半年分 四千元 (送料共)

一年分 七千九百元 (同)

二〇〇〇年(平成12年)二月一日発行

編集兼 橋 高 薫

発行人 橋 高 薫

印刷所 美 研 アート

大阪市阿倍野区三好町一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川 柳 塔 社

電話 (06) 691-6914 振替 〇〇九八〇一五二三三八番

わかりにくいキャストで贈るわかりやすい浪花人情劇!

王将

特別演出 ● 北條秀司
作 ● 松尾スズキ



近鉄小劇場提携公演

2000年 2月25日(金) 19:00開演(18:30開場)
26日(土) 14:00開演(13:30開場)

会場 ● 近鉄小劇場

入場料(全席指定・税込) / 前売 4,500円 当日 5,000円

前売開始日

12月5日

電話予約・お問い合わせ ● 近鉄小劇場 06-6771-1009(AM10:00~PM6:00)
<電話予約後の送金先> 〒543-0001 大阪市天王寺区上本町6-5-28 近鉄小劇場「王将」係
チケット取扱い ● チケットぴあ 06-6363-9999 / ローソンチケット 06-6387-1900